越谷市郷土研究会会報第十三号

古志賀谷

平成十七年九月刊

ごあいさつ

会長　宮川　進

平成十七年六月十八日の総会後の理事互選により、会長役を前任の谷岡隆夫氏から引き継ぐこととなりました。初代の大野伊右衛門氏、二代目小島誠氏、三代目谷岡隆夫氏と四十年間の当会の歴史をつくってこられた方々と比べますと、越谷のことを知らない、日本史のことも知らない、まことにお恥ずかしいものが大任を引き受けさせていただくこととなったわけでございます。

なにとぞよろしくご支援、ご協力のほど、お願い申し上げる次第です。

さて、「郷土研究会」とは何なのかを考えますと、これは研究者、専門家の団体である「学会」ではありません。あくまで「市民」の団体です。そして当会は「郷土史」研究会ではなく、「郷土」研究会です。これは先輩方が越谷の「歴史」だけでなく、「あらゆること」を対象に研究する会にしたいという思いをもたれたからではないかと考えます。

もうひとつ、当会はＮＰＯ法人です。県内の「郷土史研究」あるいは「郷土研究」の団体にさきがけてＮＰＯ法人となりました。

市民の方々に郷土のことを知っていただくことは、市民の豊かなこころ、郷土に対する愛情、住民同士の連帯感をもっていただくことにつながると考え、この分野での社会貢献はこれまでもやってきたし、これからもますますやってゆかねばならないことであるという思いがあったからです。

「市民による、越谷のあらゆることを研究対象として、社会貢献する団体」を、会員みんなの力でさらに発展させてゆきたいと考えております。よろしくお願い申し上げます。

目次

ごあいさつ　会長　宮川　進

越谷市郷土研究会創立四十周年きき書き　郷土研究会　1

法然と浄土宗寺院　菅波　昌夫　9

富士の浅間か、浅間の富士か　酒井　達男　13

天明三年（一七八三）の浅間山噴火と越谷　金岡由紀子　15

川柳地区の石仏をたずねて　増岡　武司　23

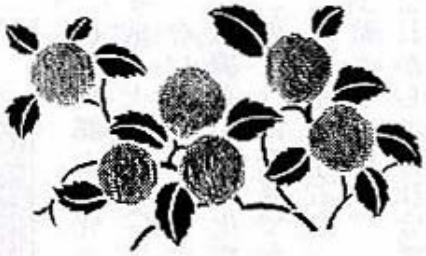
古文書に見る新川の歴史　加藤　幸一　26

徳川家康公狩り装束の銅像　青山　栄吉　31

こしがやふるさと話　増岡　武司　33

越ヶ谷久伊豆神社の収支決算書　木原　徹也　35

史跡めぐりの記録　郷土研究会　46



★会員アンケート …… 76
★史跡めぐり一覧 …… 83
★展示品リスト …… 84
★研究発表会一覧 …… 85
★会員名簿 …… 86
★役員表 …… 89
★会報掲載基準 …… 90
★あとがき …… 91
★編集委員 …… 91

表紙　金子　泰岑

越谷市郷土研究会創立四十周年きき書き

越谷市郷土研究会は、昭和四十年(一九六五)に発足した。平成十七年五月(二〇〇五)には四十周年をむかえた。

今は三百人余の会員を擁し、史跡めぐり、講演会、研究発表会、石仏調査、市文化祭への参加などの活動を実施している。

このように発展できたのは、諸先輩のご尽力が礎になっている

平成十六年五月、特定非営利活動法人(NPO法人)の認証を埼玉県より受けた。

これからは、社会貢献をさらに推進する態勢をととのえている。

今日は、郷土研究会が発足した当時を知る方に、郷土研究会設立の趣旨や、これからの会への要望などをうかがった。

出席者

前会長　谷岡隆夫氏

常任理事　高崎　力氏

会報「古志賀谷」編集委員会

郷土・越谷の再認識に

郷土研究会設立の趣旨をお聞かせください

高崎　昭和四十年前後には、たまたま四年～五年前に、越谷市の史跡・伝説の調査の研究をやった成果がでました。資料なども集まって、市民の方々の協力を得て、ムードがあがりました。

仲間の研究会の組織にしようとなりまして、当時、活躍していた人たちが中心になって発起人会を開きました。

谷岡　発起人については大勢いらっしゃるので、個々の方についての思い出など後で申しあげます。

私は設立の趣旨はあまり知らなかったんです。

とにかく、もともと郷土史が好きでしたので、もっと越谷を知りたい、古くからある伝説や昔の史料を研究したい趣旨の会員募集のチラシを見て、入ってみようと思ったんです。

会の設立の昭和四十年四月のことでした。

当時、郷土研究会の事務局は、越谷小学校の敷地内に越谷市立図書館がありまして、そこが事務局でした。

入会させてくださいといったら、この会のことは本間さんがやっているから、趣旨を聞いてお入りなさいという話をいただいたんです。

本間さんはそのころサラリーマンで、図書館にいらしたのではなかったんです。

年会費五百円を納めて入会させていただきました。

設立当時、発起人や会員集めはどうでしたか

高崎　もともと昭和二五年～二六年ごろから、有志の人たちで

会の名前もなく、同好の仲間が集まって史跡めぐりがあったんですよ。
それは越谷地域だけでなく、三郷・岩槻・松伏・春日部など埼葛南部という広いところで、大体、九ヶ村で、それぞれ二人～三人ずついましたかね。
その人たちが、郷土研究会が発足すると同じような形で当番制でお寺とか、史跡とかを自転車でまわっていたという経過があって、それが発展して、越谷独自につくろうということになったんです。
当時、やっていた人たちだけでは人数が足りない、もっと増やしたいということで、地区担当みたいな制度をつくったんですよ。七星さんは越ヶ谷を担当とか、新井さんは大沢を担当とか、有瀧さんは大相模担当だとか、担当地域をつくって地域に仲間づくりをすすめる方式をとったんですよ。
それは初めの理想でしてね。そういう制度がうごいたかどうかははっきりわかりません。

創刊号の会員名簿には地元の名士の方が入っています

高崎　当時の地元の名士というのが、中心になっていたということは、新聞記者の方もいてわかるとおり、当時の地域のインテリ層の仲間なんですよ。
役場の職員・学校の職員・社会的に文筆活動をしている人、市会議員・県会議員という名誉職などの人たちが多く集まったところが、郷土研究会の特色かも知れません。

こちらからお願いにいったんですか

高崎　何人かは勧誘して入れてます。おそらくほかの方もそういう形で仲間を呼び込んで、かなりの人数が集まったと思います。
谷岡　会員の中身を考えますと、設立当時は越谷の地元のインテリ層の方が多くて、当時の名簿をみると百人ぐらいの規模で会員がいらしたんです。
そのうち半分ぐらいが地元の方です。
発起人についてインテリ層が多いですけど、これだけメンバーがよく集まったなあと思うんですけど。
高崎　そうですね。いま、考えてみますと、当時の役員さんは、全部、私が知っている人です。
人口も少ないけど、いま以上に情報は発達していて、好きな者同士は自然に集まるという形ができました。
その中でいちばん活動したのは、木村図書館長なんですよ。
図書館へ来る方はずいぶんいたし、若い人でも図書館利用が当時はさかんだったもんですから、場所とか地位を利用してかなりの宣伝効果があったと思います。
谷岡　会の立ち上げには本間清利さん(柳町)と木村信次さん(恩間)がとくに尽力されました。
私はサラリーマンでした。昭和四三年に幹事に任命され役員の仲間に入りました。役員になってからは、土曜日・日曜日は、会務で多忙でした。
勤め先の慰安会や行事はなるべく欠席する始末でした。
勤め先の会社のワープロで郷土研究会の書類づくりをしたり、コピーを無断使用しました。
勤務中に幹事の木村さんから頻繁に電話がかかってきました。
木村さんは、市史編纂と俳句連盟会長と図書館長とかけもちで、お忙しいようでした。

お年寄りの郷土研究グループ

史跡巡りは二十回も

越谷 研究発表など熱心な活動

各地の史跡を見学したり、珍しい伝統や貴重な郷土資料を研究しているお年寄り中心のユニークなグループが越谷市にある。越谷市郷土研究会（大野伊右衛門会長）がそれ。スタートしてすでに四年目。史跡めぐりだけでも二十数回、そのほか研究発表会なども行ない、熱心な活動を続けている。

大相模不動尊を見学する郷土研究会員たち

無機質なスプロール化のため、急激に昔の面影を失っている同市で、同研究会が文化財保存のために果たしている役割は大きい。

とんよりした曇り空だったさる二十七日の日曜日。同研究会は同市内の大相模不動尊に出かけた。メンバーは婦人五人を含む三十八人。境内を入念に見て歩き、寺に保存してある仏像や遺物を観察、いつも散歩やお参りでなじみ深い同寺を改めて見なおした。案内係は太間清利市史編纂委員、高崎力北中教諭。説明を聞いてうなづいたり、おたがいに談笑したり、楽しく一日をすごした。

この前は青梅の鍾乳洞を見学した。毎月第四日曜日に集まり、同の日などは研究発表を開いたり、講演会を催している。会員の中には、下間久里のシシ踊りを研究している三原静太郎さんをはじめ、大野会長、八島晃正さんなどくろうとはだしの郷土研究家もいる。

会員の平均年齢は六十歳代だが、八十歳のご老人もおり、職業も元先生、農業、会社員とさまざま。

「自分の生まれ育った土地について勉強してみたい」、「若いときに見聞したところをもう一度…」と、入会の動機は"研究派""懐古派""遠足派"といろいろ。なかには家庭から引っ越してきて興味をもち、ずっと参加し続けている人もある。

女性会員のひとり松下美佐保さんは「市の広報で知って参加したのですが、毎回楽しくて―」という。別の会員も「ずっと越谷に住んでいるんですが、自分たちの知らなかったことがたくさんでてきて勉強になります」と、会の意義、面白さを強調する。

木村彦次同市立図書館長は「若い人たちのグループは数多いが、お年寄りのグループは珍しい。まして"郷土観光"でなく、郷土研究をおもなネライとしたものだけに貴重。郷土文化、郷土愛保存にひと役も会役もかっている」とベタほめ。こんごも多くの人が参加、長く続けてほしい。

昭和44年4月27日　大相模・不動尊

書類と本が詰まった黒の手提げ鞄をいつも持ち歩いていました。慶応ボーイの紳士でした。私が当会の幹事になったことで接触がふえました。たばこのヘビースモーカーでした。

本間さんは、昭和四三年に越谷市の市史編纂事業がはじまり、そちらのほうがおいそがしくなり、当会の行事参加は少なくなりました。

最初のころの会員の年齢層はどうですか

高崎　かなり高かったですね。いちばんの年配者は大野伊右衛門さんで、市役所近くの医者の石川正さん、この方もかなりの年配でした。

教育委員をやっていた大沢弘さん、医者の藤田岩太郎さんとか、大聖寺の住職の加藤義詔さん。こういう方は私からみたらいいおやじさんにみえたわけですから、年齢は高かったと思っております。

谷岡　前頁の新聞のようにお年寄りの郷土研究会でした。いまでました大野伊右衛門さんですけど、初代会長で、出羽地区の旧家で、久伊豆神社の総代だったんです。

なかなかの人格者で、おごりとか人との分けへだてのない郷土研究会のリーダーとしてはふさわしい適任者でした。

大野さんのお宅は、豪邸で三つの蔵が並んで「三連の蔵」といわれていました。

高崎　この辺で陸軍の大演習があった時、朝香宮が大野さん宅に泊まっているんですね。地元では大したものです。

そのころ、谷岡さんは若手だったんですか

谷岡　年齢を数えれば、おそらく最年少でした。

越谷の地元の出身じゃないんで、発起人の方々とは太刀打ちできない点がありました。皆さん、博学でしょう。

発起人は人づきあいがいい、穏やかな方ばかりでしたから、ここまでおつき合いできたと思います。

教育関係でもかなり参加者があったんでしょうか

高崎　当時の教育長は秋山長作さんでした。ご自分も歴史が好きだったんですね。そういう点ではいい教育長でした。

そのため発想は少し違うとこがありましてね。

一般の方は同好の集まりという形をとりたかったのを、秋山さんは、教育長という立場から学校教育との結びつきを強調しすぎて、理事には小中学校の社会科教科部会長を必ず入れるという条件をつけられました。

私としては、その制度には、そういう枠については、初めからうまくいかないと考えていました。

加入する校長さんを含めて人間関係も、そう長くいくもんじゃない、本人の意思じゃなくて、たまたま役職の割り振りで、その立場で入ってくるということですから、これでは個人の同好の士ではなくなるわけなんです。

それを強硬に訴えたんですけど、発会の時には入れてしまいました。

私は会員ではあっても役員にはならんとがんばって発会式はボイコットしました。

越谷時間

設立のころの行事や史跡めぐりはどうでしたか

谷岡　史跡めぐりは好きなもんですから、当時から皆勤といいますか、ほとんど出ました。
会社勤めでしたので土曜日や日曜日しか時間がなかったんです。講演会・史跡めぐりは、ほとんど土・日でしたので、参加させていただきました。
最初のころは、今とは一寸違う点があるんです。
当時は、雨でも雪でも強引に実施しました。
案内の先生ははっきり決めず、行き先で石仏の説明、地誌の話、寺社の解説、伝説の披露は、当日の参加者がそれぞれ知識を発表するのがユニークでした。
　あのころは越谷時間でした。越谷時間は何だろうと思っていたら、のんびりしていて約束どおりに出発するんじゃないよ、越谷時間はおくれるんだよということで、遅れるのが通例でした。風習として越谷時間があるとは知りませんでした。

高崎　郷土研究会が発足以前の同好団体はのんびりしてましてね。
その影響が尾をひいて、谷岡さんがいまお話したようになったんでしょうね。

史跡めぐりは、当時、毎月おこなわれてますね

谷岡　発起人の役員さんが熱意があったんですね。参加者は平均二十五人ぐらいですかね。
設立後、三年～四年は、越谷市と周辺ばかりでした。
　案内者に山崎善司さんや山田政信さんが登用されたのがきっかけで、遠方へ行くようになりました。
　昭和六〇年十月には、当会発足二十周年記念に会田家のルーツを探りに信州へゆきました。平成十四年三月は、史跡めぐり三百回記念で三の宮卯之助の力石を訪ね、諏訪地方を回りました。
最近は一月三日の七福神めぐりが毎年の恒例となり、参加者が増えています。

会の事務や集会はどうでしたか

谷岡　木村図書館長が退任され、事務局は幹事さんの自宅へ変更しました。
幹事宅は駅から遠いので、駅に近い山崎善司さん宅、石塚園(茶店)さんに資料の置き場所、中継などでお世話になりました。
石塚園さんへ事務局連絡ボックスを設置しましたが、利用するのは木村さんと私ぐらいで、まもなく廃止しました。
　集会は今のような施設がありませんでした。
越谷小学校の小島校長さんのご好意で、講演会や集会は小学校の教室を借りていました。小さな机と椅子はきつく、まいりました。
でも、和気藹々でした。

県レベルでみて、当会の活動はどうでしょうか

高崎　以前からどの地区にも歴史関連の会はあるんですよ。
史談会とか、似たような物好き集団があちこちにあります。
越谷のように一般市民ぐるみで関心のある方をまきこむ新しい発

想と形でスタートしたのは、他の会とは違うでしょう。その分、ほかの会はかなりの研究実績をもった団体ですから研究の集積があるようですね。そこへいくと、越谷市郷土研究会は四十年代の発足ですから史料などの蓄積はすくない。今後それらが完備してくれれば、社会に還元していけるでしょう。

行政からの後援なしで、これだけ活動している団体は？

高崎　すくないと思いますよ。

谷岡　頭の中にないですね。行政と結びついてやっているのは、足立史談会・草加史談会・埼玉県郷土文化会が主な団体ですね。役所と直接つながりがない団体は、県内では越谷市郷土研究会だけでしょう。

市史編纂は越谷がモデル

設立してよかったことは、どんなことですか

谷岡　私は好きでやっていたので、よかったことは、人とのふれあいがいちばんプラスになっています。勉強させてもらったことです。

高崎　こういう会ができて、本間さんが市民になったのがきっかけで、越谷市史編纂事業がスタートしました。市史編纂は、県下では大宮市が早かったんです。

越谷では、編纂メンバーを市内にかぎらず、広範囲から優秀な人材をあつめました。いまは江戸博の竹内館長さんは、編集主任として呼んで、十年間、越谷の仕事をやっていただきました。越谷で経験した編集委員の方々が、その後、他の市史編纂をやっています。似たような組織でやるようになったのも、越谷がモデルになったようです。

大雪の史跡めぐり

会として困ったこと、やりにくかったことは

谷岡　史跡めぐりが会の活動の柱でした。昭和五六年六月、栗橋で大雨に遭いまして、お寺に駆け込んだことがありました。昭和五九年二月、日黒へ行ったとき、大雪で怪我人がでないかというようなことでした。

平成三年十月、品川のときも大雨でした。しかし、当時は中止とか延期がなくて強引にやったもんです。いまは反省しています。幹事として「やれやれ、終わった」と家へ帰って風呂へ入りかけたときに、警察から電話があって、「お宅の会で迷っている人がいる。引き取りに来てくれませんか」嫌なことになったと声を出したことがありました。鎌倉めぐりの時でした。

高崎　私は責任をとる機会が少なくて、その分、研究発表がどういうわけか多かったんですね。

そういう点で、地味なんですけど、越谷市民の関心を高めるよう、できるだけ生活に密着するような形を取り上げるような講演内容でやることに努めております。

人生の師

むかしはこうだったことをお話しください

谷岡　発起人の方々の思い出をお話します。小島誠さん、二代目の会長でいらっしゃいました。温厚な小学校の校長さんで、ご親切にいろいろご指導いただきました。有瀧龍雄さんは、ご存知のように有瀧アーボレータムの園長さんだったんですが、理事会に植木の苗を二十ばかり持ってこられるのが常でした。苗木を分けて有瀧先生の解説があって、それから理事会がはじまりました。

瀬尾哲太郎さん、大袋の村長さんでしたが、温厚な人で、この人も人づきあいがよかったように思いました。

幹事の八島晃正さん、新聞記者だった方で、その知識を会の方へ生かして、運営に協力していただきました。

監事をなさっていた小泉市右衛門さん、旧道の方です。おもしろいというか、愉快な方です。思い出がいろいろありますよ。

高崎　郷土史だけではなくて、人生の先輩でもあった人たちですから、人間的な面でのお世話を受けております。

いま、私が調査研究をやっているベースになっている、あるいは、きっかけになっているものは、ほとんど大野さんから口伝えなんですね。

この会が発足した昭和四十年代、たまたま見田方遺跡が発見され、その発掘にエネルギーを注ぎました。

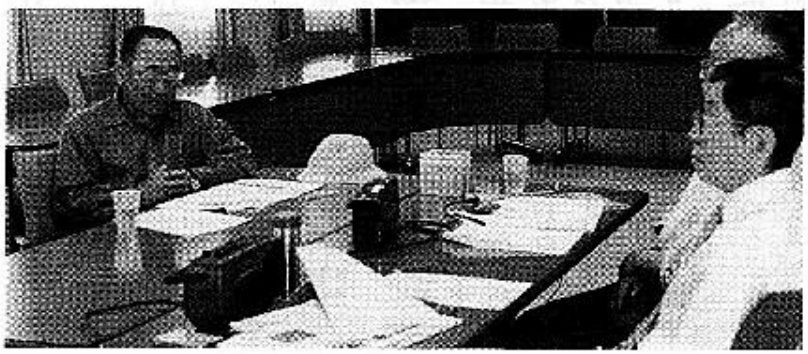
その後は、行政の方に入りました。行政サイドの行事も見ました。

そちらから越谷市郷土研究会を見ることができたんです。

終わりのころは、八潮にいたもんですから、地域によってこんな

前会長　谷岡隆夫氏

常任理事　高崎　力氏



に違うことがわかりました。

谷岡　郷土研究会では、いま、高崎先生が第一人者で活躍しています。講演会とか、「かたりべの会」のリーダーで、当会にとってはなくてはならない人という位置づけです。

会員は三倍に

会員・会報

谷岡　当初の百人の会員が、三十年間、百人前後で増えたり減ったり一喜一憂でした。

増えだしたのが平成六年です。百人から二百人、あっという間に三百人と増えました。会員の紹介というケースもありますし、史跡めぐりで会の説明を聞いて入会する方もかなりあります。

宮川さんの積極策で会員が増加しました。チラシを配るなどやっていただいた成果が出ていると思います。

平成十六年六月、ＮＰＯ総会の時は、三二〇人となりました。

昭和四七年に会報第一号が出ています。初刊はガリ版でした。受けがいいというか、評判がよくて全部なくなりました。

昭和五七年二月に増刷したんです。

執筆される方はだいたい決まっていましたけれど、皆さん、熱心に投稿していただきました。

今は二年ごとに六百部発行しています。今後もつづけて刊行していただきたいと考えています。

拠点がほしい

会の今後のあり方や要望など、反省をこめてお願いします

谷岡　平成十六年にＮＰＯ化しまして、活動の幅を広げているところです。文化財管理とか文化財パトロールなど、あたらしい分野の活動を目論んでいます。

「史跡めぐり」と講演会を行事の柱としてこれからも続けていきたい。会員の皆さんの協力を期待しています。

高崎　これだけの事業規模が拡大し、会員もふえ、役員会や専門部会が開かれたりして隆盛になってきました。

ところがいちばん大事な拠点がないんですね。一棟、とはいかなくても一室程度が自由に使え、いろいろな資料が保存され、そこが情報の発信地にもなる場所がほしい。

人々が出入できる、そういう拠点があればいいんです。資金や人材など課題はありますが。

一部の役員さん宅や部屋が、郷土研究会の事務室になっています。いろいろな器材や、会の会計と個人のお金と区別つかなくなるような混同しちゃうんじゃないかなーと思います。

これはどの団体でも同じような問題がある。一部の役員さんの家や部屋、電話がまるで会のため提供されてしまうようになっています。

谷岡さんとか、現在の事務局担当は大変だなあと思います。

これをどう解決するかは、何ともいいようがないですけどね。

いま、いちばんひっかかっています。

では、この辺で終わりにいたします。ありがとうございました。

（平成十七年五月二四日　越谷市中央市民会館　収録）

法然と浄土宗寺院

菅波　昌夫

法然

浄土宗を開祖した法然(一一三三～一二一二)は、鎌倉初期の僧である。地方豪族の子として生まれた。

父は権力闘争に敗れ、法然を前に「父はもう助からない。決して敵を恨んではならない。もし復讐をするなら争いはいつまでも絶えないであろう」と遺言をして絶命した。父の言葉を受け、九歳のとき出家した。

十三歳で比叡山にのぼり、源光に師事した。

のち、比叡山延暦寺の別所である黒谷で二十年間の修行した。

四三歳のとき、専修念仏(ひたすら念仏を唱えて他の難業を修めない)の教えをさとり、京都東山吉水(よしみず)で浄土法門を開いた。

『専修本願念仏集』『浄土三部経釈』などの著書がある。

浄土宗

それまでの仏教の教義は、相応の学問と知識を必要とし、裕裕福でない一般庶民にとっては手の届かない教えであった。

浄土宗は、念仏を唱えさえすれば、人は等しく極楽に往生できるという教えである。

難しい学問も修行もいらない、「南無阿弥陀仏」と唱えれば、だれでも極楽にゆけるというもので、この教えが庶民の間に広がり、心をとらえていった。

家康の松平家は、代々浄土宗であったから江戸時代になると、徳川氏と結びつくようになった。

西の知恩院、東の増上寺を両輪として、浄土宗は教線を伸ばした。

元和元年(一六一五)、徳川幕府から浄土宗法度が発令された。

知恩院は、浄土宗第一の総本山としての地位を不動にした。

増上寺は、大本山(総本山の下にあって所属の末寺を統括する)として宗務所となり、行政上の権限をにぎるようになった。

家康は江戸に居を定めると同時に、増上寺を菩提寺として、厚い信仰をよせた。

晩年には毎日六万遍の念仏を唱えた。老人にはこれがきつく、数を減らしたら楽になったという。

本尊

信仰のよりどころとなる仏が本尊である。浄土宗では「阿弥陀如来」を本尊とする。

本堂には、中央に阿弥陀如来を配置し、向って右側に観音菩薩を、左側に勢至菩薩を祀る。

観音菩薩は阿弥陀如来の慈悲の徳を、勢至菩薩は阿弥陀如来の知恵をそれぞれ表し、これを阿弥陀三尊という。

南無阿弥陀仏

「ナムアミダブツ」とは、古代インドのサンスクリット語を漢字で音写したものである。

「ナム」とは、どうかよろしくお願い申しあげますという意味で、阿弥陀仏に帰依と信頼の心をもつとなる。

「ミダ」は「量(はか)」るの意で、これに接頭語の「ア」がつくと反対の意味になって「はかり知れない」という意味になる。

「ブツ」は、仏陀で悟りを開いた人を意味する。

以上のことから、「南無阿弥陀仏」とは、はかり知れない偉大なお力を持った阿弥陀さま、どうか私を極楽浄土にお導きください、とお願いする言葉である。

勢至菩薩　　阿弥陀三尊像　重文　　三千院　　観音菩薩
阿弥陀如来

阿弥陀仏

阿弥陀仏は、インド王族の太子に生まれた。
一念発起してその地位を捨て出家した。国を出て一介の修行僧となった。
名を法蔵比丘と改め、長い間の修行をして、四十八の誓願を立て、阿弥陀如来になった
これを阿弥陀の誓願といい、「もし自分が仏になったときはこのような状態にしよう。」というものである。
「この誓願が実現しないかぎりは絶対に仏とはならない」という第十八願がとくに重要である。

末法思想

この思想は、仏教の歴史の見方である。つくられたすべてのものは、時間とともに、変化し、やがては滅するという。
釈迦の没後、仏教が衰える三つの時代がくる。
一、正法時　釈迦入滅後、釈迦の教えが正しく行なわれる時期。
二、像法時　造寺造塔は盛んにおこなわれるが、仏法がやや衰える。
三、末法時　仏法が形ばかりとなり、最後に法滅のときをむかえる。
日本では釈迦の没後二千年に、末法時代がはじまるとした。
永承七年(一〇五二)にあたる。
末法は一万年続いて法滅時代に入る。その後は無仏の時代がつづき、五六億七千万年後に弥勒菩薩がでて、人々を救う。
鎌倉時代は末法到来という危機意識のもとに宗祖たちが時代にふさわしいあり方を考えた。
法然(浄土宗)と親鸞(浄土真宗)は、伝統的修行ではなく、末法時代に応じた「おこないやすい仏教」である浄土仏教をとなえた。

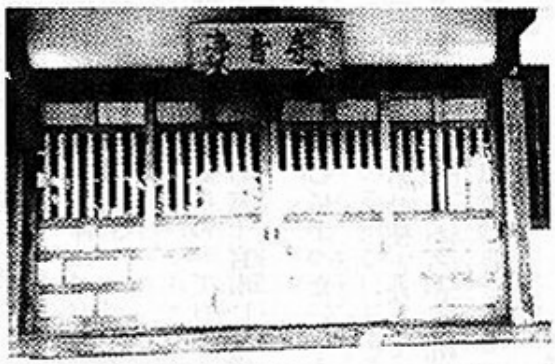
越谷市・浄土宗寺院

所在地	山号	寺院名	開基年	開山僧	本尊
登　戸	報身山極楽寺	報土院	天正10年（１５８２）	聞秀義教	阿弥陀如来
大　成	解脱山保鏡院	浄音寺	文禄３年（１５９４）	解脱阿在保	阿弥陀如来
増　林	正林山	林泉寺	文正元年（１４６６）	本誉良諦	阿弥陀如来
越ヶ谷	至高山遍照院	天嶽寺	文明10年（１４７８）	専阿源照	阿弥陀如来
北川崎	太子山	聖徳寺	慶長２年（１５９７）	観誉源応	阿弥陀如来
大　松	栄広山浄土寺	清浄院	嘉慶元年（１３８７）	賢真上人	阿弥陀如来
舟　渡	仏説山	無量院	永禄10年（１５６７）	三誉相雲	阿弥陀如来
大　泊	大竜山東光院	安国寺	寛正５年（１４６４）	誠誉専故	阿弥陀如来
平　方	白竜山月照院	林西寺	元亀元年（１５７０）	等海成阿	阿弥陀如来
西新井	日照山光明寺	西教院	元亀３年（１５７２）	法誉上人	阿弥陀如来

大松・清浄院

登戸・報土院

舟渡・無量院



大成・浄音寺

大泊・安国寺

増林・林泉寺

平方・林西寺

越ケ谷・天獄寺

西新井・西教院

北川崎・聖徳寺

富士の浅間か、浅間の富士か

酒井　達男

大沢(北越谷)の地名については、ここが元荒川に臨んだ低地で大小の沼沢が散在していたことから、大沢と名付けられたといわれている。

また一説には、長元三年(一〇三〇)、下総国の西川辺(のちの大沢村)の住人深谷源三郎が富士山に行き、大沢の滝から五彩の光を放った石を持ち帰り、砂丘の上(北越谷二丁目)に浅間宮を勧請し、この石を御神体として祀ったのが大沢地名語源の一つと伝えられている。

かつては近隣七ヶ村の総鎮守で由緒ある古社であった。近年のビル建築の進出により、いつの間にか消えてしまったことはまことに残念である。

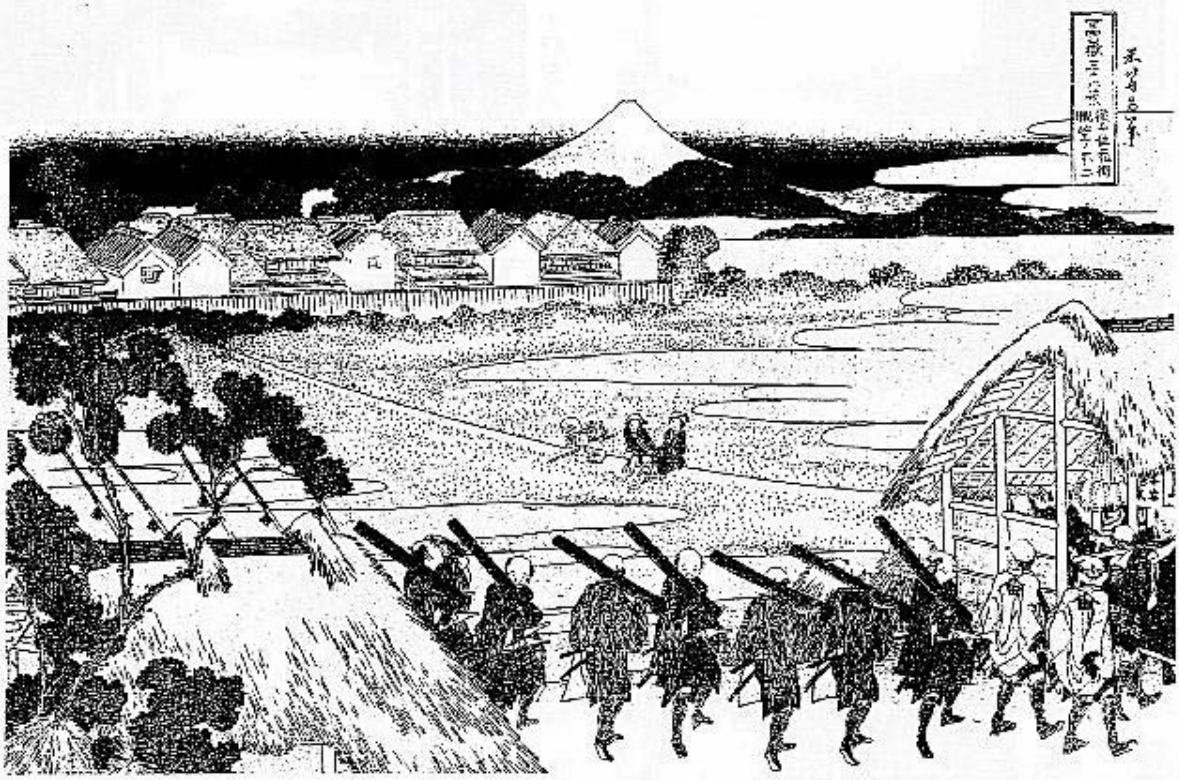
現在、市内にある浅間神社は、懸仏で有名な中町と、丘の上にたつ平方のを含めて数社をかぞえる。県内では小社をふくめて一八五社にものぼっている。

全国的にみて、富士山の御神霊を祀った神社がどうして浅間という名称なのか、とまどいを感じることがある。

これについては神社誌によると、延暦十九年(八〇〇)の大噴火により北麓にあって日本一といわれた富士大神宮が、焼失と埋没により現在の富士宮市に分霊を祀って表本宮浅間神社とされたのだという。

それではここで富士よりも浅間を名乗るに至ったいきさつには次の歴史があった。

この爆発の六年前、坂上田村麻呂の父が勅使となって阿祖(アソ)谷に上り、大神宮はわが国最初に現れた神であるから先現(センゲン)大神と改めさせた。



富嶽三十六景　葛飾北斎　千住より眺望不二

これより後世、先現と浅間の文字の混用が始まったという。
次いで天暦元年(九四七)、勅願により先現大神が阿座真(アサマ)明神と改称された。
このため、また、阿座真と浅間の文字の混用がはじまる。
阿座真の社地が、阿祖山にあったのでアソヤマがアサマに縮音されたものだという。

しかし、阿座真の文字は使われず、先現と浅間が同一発音なので浅間の文字が慣用されるに至った。
しかも、その発音もセンゲン、アサマどちらでもよいということになった(鈴木貞一説)。
日本人の誰もが素晴らしいと思っている富士山は、外国人でも最も登りたい山にちがいない。
幕末の万延元年(一八六〇)、外国人として初めて富士山頂に立った英国公使一行は、火口にピストルや小銃弾を二十一発も撃ち込んで登頂を祝福した。
日本で聖なる山頂に銃弾を浴びせられた最初の山は、富士山ではなかろうか。
それにしても、気軽に富士山と呼んでいるフジサンのフジとは、いかなる意味と、どこからつけられたのだろうか。
①アイヌ語。火の山を意味するフンチ説。噴火を意味するブシ説。
②南方系(マレー?)語。素晴らしい意味のブシ説。
③古代朝鮮語。火を意味するブル説。
④日本で空にかかる虹をフジと呼ぶ表現があるから、藤の花が下がるように美しいスロープをたとえた藤山こそが似つかわしい説。
⑤中国での永遠神仙思想を秘めた不尽、不死の山につながる説。
フジが初めて記録に登場するのは、奈良時代の常陸風土記に福慈(フジ)の文字で表現されている。

浅間については、先現とは別にさまざまな説が多い。
信州には、今も噴煙を上げている浅間山がある。
アサマは火山にかかわる名称と思われる。
南方用語では煙や湯気をアサ、アサブといっている。
日本の火山や温泉には、アソ、アサマ、アタミなど類似の地名が多い。
火を吹く富士山もアサマ山だったかも知れない。
駿河にあって、天に最も近く崇高なアサマの峯を仙人の住む不尽(つきることのない)の神山と見立てたとしても不思議ではない。
富士山頂には平安時代にすでに登った人がおり、富士山記には「山の名は富士郡の名をとったもので、山には浅間大神がいる」と記されている。

地名はそこの特徴によって付けられるのが常だから、富士郡の名は逆に富士山からとったものと考えてよいと思う。
したがって平安中期には富士の名は成立していたことになる。

同じころ、日本のことを書いた中国の書の中で、はっきりと富士山と書かれているので、もしかしたら、中国からの逆輸入だったことも考えられる。

富士の名が富士郡設置により広まったが、一般の人々の口にのぼるようになったのは、戦国末期から富士講の開祖である長谷川(藤原)角行が諸国をめぐり、富士信仰を説いてまわった功績が大きい。
後継者の一人に鳩ヶ谷宿の小谷三志が有名である。

なお、浅間神社の祭神として此花咲耶姫命が、前面に明示されてきたのは、江戸時代初期のことである。

(参考文献『歴研』)

天明三年（一七八三）の浅間山噴火と越谷

金岡由紀子

一・越谷に降った浅間山の灰

平成十六年九月から十一月にかけて長野県と群馬県の境にある浅間山（二五六八メートル）が数回、小噴火をした。十一月十四日の噴火では越谷にも微細な灰が飛来し、屋外に駐車した黒い乗用車等は、浅間山の灰がうっすらと確認できるほどであった。

さて、江戸時代の越谷にも「浅間噴火による降灰の記録」が残るのでご紹介しよう。

二百二十二年前の天明三（癸卯）年の「浅間・火坑焼（カコウヤケ）」について書かれた古文書である。（＊1『越谷市史・四』「大沢猫の爪」より）

一　同年（天明三卯）七月上旬、信州浅間火坑焼、関東灰砂降、七月七日之頃灰降、七日之夜中ヨリ震動、雷電二而八日昼過迄砂降候事二、三寸。
　昼行燈付申候事・・・・。

つまり、現代の暦でいうと八月四・五日である。八月四日の夜中から地震や雷鳴が起こった。翌日五日になり真夏の昼なのに外は暗く『行燈（あんどん）』が必要だった、というのである。

越谷で降った灰が『二、三寸』というのだから、六・六～九・九㎝の降灰である。当然、田畑も家も蔵も灰に埋まっている。

関東地方はこの前年の天明二年も冷夏であった事が、

　北前年夏寒気強青立ニ成五穀不実引続疫病流行也・・・・・・。

と記録されている。

夏に寒気が強く『青立（あおだち）』＝稲などが実らないままに青く立って生えている状態、になり『五穀（米・麦・粟・豆・きび、又はひえ）』が不作で伝染病が流行った、というのである。

天明二年に始まる関東・東北の冷夏は天明三年・夏の浅間山噴火を経て、天明六年の『利根川（関東）大洪水』につながる。浅間噴火は後世に『天明の飢饉』と呼ばれる一連の飢饉の大要因であった。

二・「浅間焼け」と「浅間押し」

では、越谷に『二、三寸』の灰を降らせた旧暦七月七日の噴火は浅間山の周辺ではどのような被害をもたらしたのであろうか？（以下、日付は旧暦で表記する。）

それを語るには天明三年の浅間噴火被害を、四月九日から始まり半年近くにわたる一連の「浅間焼け」と七月八日の午前十時近くに起こった「浅間押し」に分ける説明が最適と思われる。

・「浅間焼け」

天明三年の「浅間焼け」の初日は四月九日とされている。この日からの浅間山の状況を信州・佐久側から見ていた人の記録を時系列で述べると、

　四月八日・・・山開き
　四月九日・・・「焼け」はじめ。噴火のはじまりである。

五月二六日・・・大地震動。煙立ち登る事、数百丈。
幅二、三十間程に見え、雲の峰を積むが如く、くり綿を重ねる如し。
二七日・・・鳴動あり。
二八日・・・雨降り、雨と煙の区別がつかない。
六月一八日・・・夜半、地響き。
一九日・・・晴の日。鳴動、煙立ち上る。五月二六日より強い。
二九日・・・焼け出す。百千の雷よりすごい。
七月朔日・・・六月二九日より強い。暮れ方より焼け静まる。
二日・・・大焼け。朔日より強い。
五日・・・少々焼け出し、夜に入り強く、遠近雷の如し。
六日・・・大焼け。
七日・・・大石火玉が飛んで来る。
八日・・・千万の雷が一度に発するよう。

（＊2『浅間山大明噴火史料集成Ⅳ　記録編三』）

空からの被害が直撃したのは、浅間山南麓の軽井沢・碓氷峠・松井田・安中であった。

当時の宿場町の屋根は、本陣以外はかやぶきや板屋根に置石が多く、火山弾が空から降ってくるとあっという間に燃えてしまうのである。

軽井沢宿の人々が逃げ惑う様子は、

（七月）七日、夕方。焼け石降り来たりければ大いに驚き騒ぎ出し戸板を担ぎ、桶・すり鉢を頭に戴き、又は夜具・蒲団をかむり、男女のへだてなく逃げ走る。桶の底へ石が落ち、底が抜けて額に怪我を負った者も多かった。手にした提灯も降って来る石に打ち落とされ、暗い山の中を木にすがり石につまずきながら命からがら近隣の村に逃げた。

という。（＊2）

軽井沢や沓掛・追分は中山道の宿場である。中でも「追分」は、地名が示すように「中山道」と「北越街道」の分岐点であり、この二本の街道は諸国大名の参勤交代の通路にあたる。

南麓・追分宿から見た絵

『夜分大焼之図』
浅間火山博物館保管

天明三年七月のこの時も・信州小諸藩主、牧野遠江守と・越前勝山藩主、小笠原相模守。という二大名が移動中であった。両大名は、七月六日に江戸を出発し七日には、牧野一行は「深谷宿」に着き、小笠原一行は「本庄宿」に着いた。ところが、浅間山の様子に驚き、移動を止め、足止めされている様子を『御用番』役の田沼（主殿頭）意次（おきつぐ）宛に提出している。この二大名の『御届書』は七月十日に江戸城に届いている。

「浅間押し」

一方、空から飛んで来る火山弾や火球、灰を警戒していた浅間山の北麓の人々は思いもかけない被害にあった。考えもしなかった『熱泥流』が七月八日、午前十時頃に山麓を下ってきたのである。

「浅間押し」とか「浅間泥押し」「浅間涌出押出」と呼ばれる災害である。

天明三年の浅間噴火のすさまじさは現代から考えても想像しがたい量の『熱泥流』を押し出したことである。この『熱泥流』の解釈と名称については、科学系の研究者も諸説を示している。

今回は、火山学の荒牧重雄氏（東大）、井上公夫氏らのまとめた『ドキュメント災害史』の「浅間山の天明噴火」（＊3）に従うものとする。

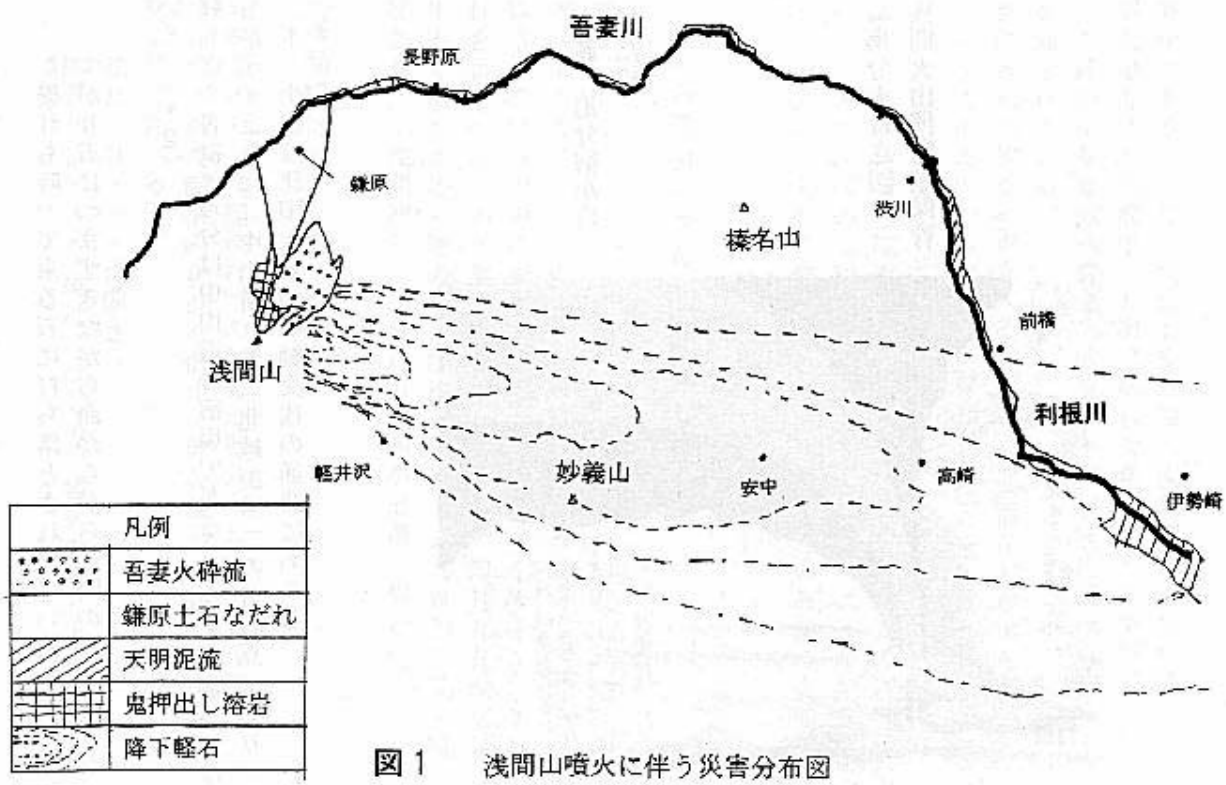


図1　浅間山噴火に伴う災害分布図

（1993年　利根川水系砂防工事事務所作成）

北麓の被害は、実は「浅間押し」前日の七月七日に始まっていた。人家のない「なぎの森」（南木とか梛の字で古文書に出てくる。）が火砕流に襲われたのである。

現代では『吾妻火砕流』の名がついている。

『火砕流』とは、火口から出て間もない熱い溶岩や、高温のガス、火山灰等が入り混じりものすごいスピードで斜面を下る現象である。

日本では、平成三年（一九九一）に長崎県の雲仙普賢岳の噴火の際に発生しており、火山災害の中でも最も怖いものである。

（越谷で七月七日の降灰というのは、この「なぎの森」一帯を襲った『火砕流』に関係する、と思われるのである。）

翌日の八日、鎌原村を襲った「浅間押し」は、現代では『鎌原土石なだれ』と呼ばれる。

浅間山の北麓には『柳井沼』という湖沼地帯が存在した事が最近の調査でわかっている。（＊3）

浅間山からの噴出物は北麓を猛烈なスピードで下り降り水を湛えた『柳井沼』を飲み込みその水分を含み更にスピードを加えたといわれている（井上公夫説）。鎌原村を襲った「浅間押し」は「ヒッシホ、ヒッシホ、わちわち・・・」と不気味な音を発しながら時速一二〇kmで五七四人の村民の八十三％にあたる四七七人を飲み込んだと考えられている。（各人数については諸説ある。）

残りの九十七人は近くの高台であった観音堂へかろうじて逃れ助かった。（「浅間押し」以前から神仏に祈り観音堂に居た人もいるのでは？・・という説もある。）

この村では昭和五十四年から発掘が行われた。鎌原観音堂へ登る石段はもともと五十段であったが上部十五段を残して下の部分の三十五段は「浅間押し」の土石流で埋もれてしまっていたのである。埋もれた石段の上に近い段からは、重なるように倒れた女性二体の骨が出土し、逃げ遅れた悲劇をまざまざと見せつけた。あと数段を登りきっていたら助かっていたのだが、若い女性は年配の女性を背負ったままで、二人は果てていたのである。若い方一人なら助かっていたであろうに・・。と二人の関係に憶測が流れた。

遺体の顔に肉付けをすると、うりざね顔のよく似たタイプの二人であった。母親と娘か年の離れた姉妹かと考えられている。（＊4『孀恋・日本のポンペイ』）

たくさんの悲劇があったと思われる。

鎌原村の悲劇のもう一つを話すと・・・。

夫と妻、子の三人で畑仕事をしていた。

昼になったので、子を先に家に返そうとした夫婦は、たまたま子より小高い場所にいた。

その時、「浅間押し」が山麓をものすごいスピードで下ってきた。夫婦は子供に「逃げろ」と叫んだが、低い場所を歩いていたその子は夫婦の目の前で「浅間押し」に飲み込まれてしまった、という。（＊2）

『鎌原土石なだれ』はさらに下り、吾妻川渓谷に入り、川沿いの村々を襲った。

泥流は流れを堰止め、一旦はダムの様に容量を留め、そして決壊するという事を何度か繰り返した・・・という古文書の記述もある。（＊2）

吾妻川沿いの一つの悲劇として記録されているのが、当時幕府の役人であった根岸九郎兵衛鎮衛（やすもり）の（＊5『耳袋』）に「人の運計るべからざる事」のタイトルの二番目に見ることができる。

現在の渋川市・祖母島（うばしま）での出来事である。

「浅間押し」の際に、村人は命からがら後ろの山へよじ登った。翌日、村の被害を見ると二十数人も押し流されて行方が知れない。"顔の見えない者は死んでしまった"と嘆いていると、河原の岸に何かが見える。よく見ると孫を負うて泥の中にうつぶせた百姓の女だった。祖母はすでに死んでいたが、子供は無事であった。

根岸九郎兵衛鎮衛は『予見分御用を仰せ蒙りて、残らず廻村見分し、翌春までに損所御普請（しゅったい）も出来しける』と自らも記しているように浅間噴火後の九月に「幕府勘定吟味役」として被災地を視察した。このときの根岸の身分は、従六位に相当する「布衣（ほい）」であった。二年後の天明五年三月には「佐渡奉行」（金の儲かるポスト）になり、五十俵も加増されている、エリート上級役人である。被災地区に対して温情的な判断を下している。

吾妻川・利根川・江戸川への泥流は現代では『天明泥流』と名づけられている。『天明泥流』の被害者は、約九百名と数えられている。

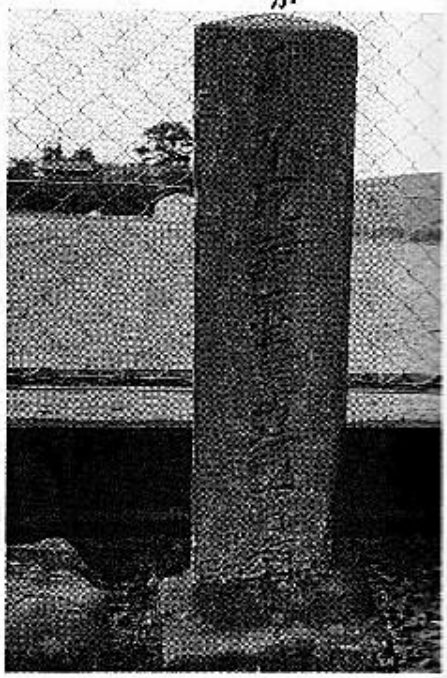
中には、運良く流出した家の屋根に登り（千葉）行徳まで流れ、生きて帰った者もいた、という話もある。

鎌原村を含めると「浅間押し」被害者は千三百六十～七十人とされている。

表１　供養碑の表（河口近くより６地点を図２に示す）

番号	写真	所在地	寺・神社、他	碑文	建立年
①	／	千）香取郡東庄町夏目	禅定寺	『光明真言二百万遍為水中万霊菩提』施主惣村中	天明3年7月(1783)
②	／	東）江戸川区東小岩	善養寺	『浅間山噴火犠牲者供養』(東京都指定文化財)	寛政7年(1795)
③	／	東）葛飾区柴又	題経寺	『南妙法蓮華経、川流溺死者若男女、一切変死之魚畜等供養塚』	天明3年7月(1783)
④	A	千）野田市関宿町木間が瀬	出洲地区水神社	『水死諸聖霊諸畜類碑』	寛政元年7月(1789)
⑤	／	群）邑楽郡千代田町舞木	円福寺	『為水死男女菩提也』施主村中	天明3年7月(1783)
⑥	B	群）伊勢崎市戸谷塚	観音堂	石地蔵・供養碑がある	天明4年11月(1784)地蔵

＊＊千）は千葉県、東）は東京都、群）は群馬県の略。



碑石の背景右手が利根川堤である。

三・吾妻川、利根川沿いの供養の石造物

「浅間押し」は被害にあった人々はもちろんだが、流れてくるモノを見、被害者を助けた人々（上流のみ）にとっても驚愕の事であった。

越谷と同じ行政区分であった、「伊奈半左衛門忠尊（ただたか）」代官所に属する金町（東京都葛飾区）の名主・勘蔵の記録である。（＊2）金町は、（表1・図2）③の題経寺（帝釈天）より北に約2kmの場所である。

昨（七月）九日八ツ時（午後二時頃）より江戸川の水、泥のようになりはなはだ怪しく存じ奉り候ところ、いずかたより流れ来候や根付きの立ち木打ち折れ候様になり、人・家・道具・材木の類ことごとくコナゴナになり一面に押し流れまいり候。しかも、人の死骸ならびに馬など切レぎれに見えおびただしく流れ通り候。夜五ツ時（午後八時頃）過ぎになり、流れもの減りそれより流れ止まり中し候。是まで見聞した事のない変事にてこの段訴え上げ奉り候。以上

金町まで流れてきた時には、無残なことに、人も馬も切れ切れになっていたというのである。（表1・図2）は現在でも確認できる「浅間押し」被害者を追悼する碑石である。

真夏の惨事であったので、川沿いの村人は急いで埋葬したようである。下流になればなるほど碑石の文面にも「人畜類」というふうにスプラッターな"遺骸を分けようもない"状態になり、埋葬する側も戸惑っているのが読み取れる。

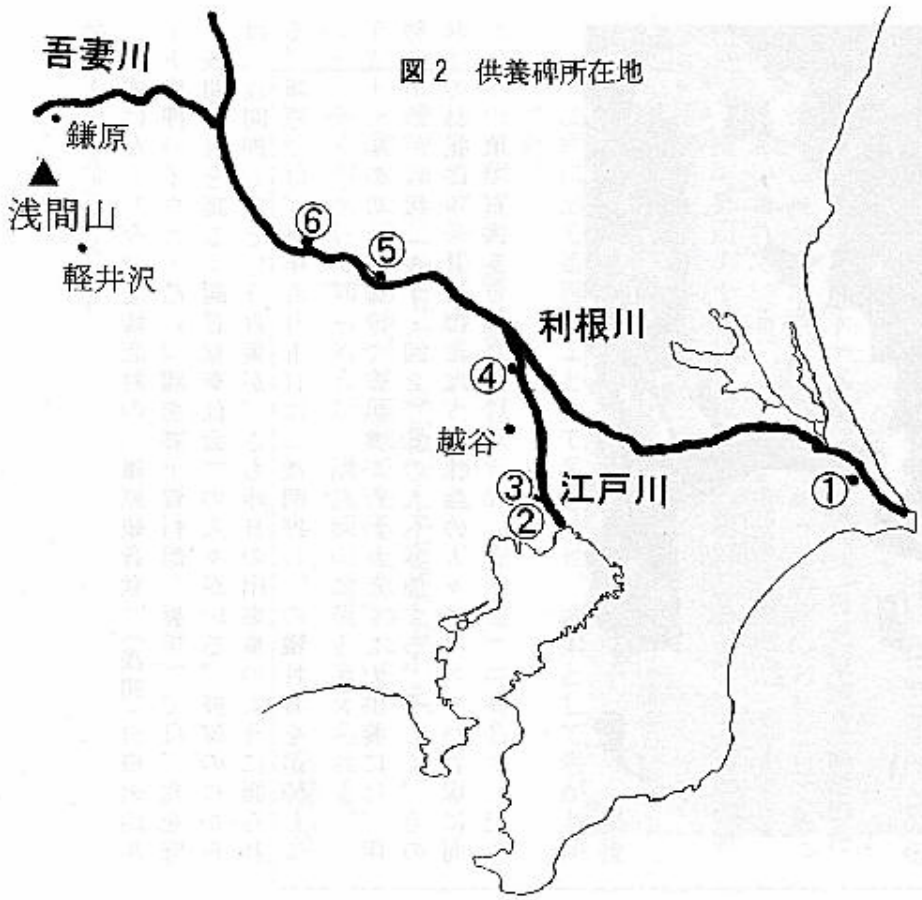


図2　供養碑所在地

群馬県内には約二十数基の碑が残るが今回は利根川・江戸川の河口に近いものを六基のみ表記した。

四・天明六年の関東洪水

天明三年の浅間噴火は同年の冷害のみならず、数年にわたる冷害を引き起こした。現代人は、大気圏に達するほどの噴火が引き起こす冷害についてその因果関係を知識として持っている。その冷害に加えて、利根川は浅間噴火によって河の川床上昇という変化に見まわれていた。

天明三年の噴火の後、利根川や吾妻川ではもちろん浚渫工事を行った。人々はモッコをかつぎ子供まで動員して噴火以前の利根川に戻そうとしていたのであるが、同年十月まで、栗橋より上には、船は上っていく事ができなかった。江戸期の利根川は輸送の大動脈だったが、「浅間押し」は運輸にも大きな打撃を与えていた。

天明六年の「関東洪水」はそれらを背景に起きた。江戸の町の被害もさることながら、越谷の西方村でも、ほとんどの家が水につかったという。西方の中でも大相模の不動尊境内だけは水が来なかったので、多くの人馬がその境内に避難した。しかしその後、約十日間も水が引かなかったので、避難した人々や馬は動けなかった、という。（＊7『越谷市史一』）

五・現在の供養

事故であれ、天災、人災であれ、「あの時、あの場所に行かなかったら。居合わせていなければ・・・。」と思う事がある。“時間”は生きている人間にはたゆとう流れの途中にすぎないが、時間を断ち切られた死者の“時間の断面”を垣間見させるのが事故や天災・人災であろう。

平成になった今でも嬬恋村の「鎌原観音堂」（浅間・白根火山ルート鬼押ハイウエー沿い「嬬恋郷土資料館」裏手）では、堂を守り浅間被害を語る「観音堂奉仕会」の人々がいる。彼等の口からは「浅間押し」という言葉が、さも昨日の出来事のように語られる。鎌原では、毎年八月五日に「浅間押し」の犠牲者を追悼している。

平成十七年の当日も鎌原では供養が行われた。この供養には、伊勢崎市の戸谷塚（表1・図2）⑥の人も参加する。そして、その参加のお礼に十一月半ばには、奉仕会の人々はバスで戸谷塚に向かいこの地でも供養を行うという。

また、写真A（表1・図2）④の野田市関宿では平成十五年まで「浅間押し」のあった日には毎年川べりで念仏を唱える“川施餓鬼”を行っていたという。

（＊6「利根川べりの水死者供養塔」）

六・謝辞

今回、関宿の碑石の場所や川施餓鬼に関する話、千葉県東ノ庄町夏目の碑石については「房総石造文化財研究会」からの情報が大変役に立った。

（表1・図2）①、碑石のある禅定寺の夏目地区は現在利根川の本流からは遠く離れており、私は自力ではこの碑石にはたどり着けなかったとも思う。深謝いたします。

参考文献

＊1『越谷市史・四史料二』121p「大沢猫の爪」福井猷貞著
越谷市・昭和四十七年

＊2『浅間山天明噴火史料集成Ⅳ　記録編三』荻原進編
群馬県文化事業振興会・平成五年

＊3『ドキュメント災害史』国立歴史民俗博物館・二〇〇三年

＊4『嬬恋・日本のポンペイ』東京新聞出版局・一九八〇年

＊5『耳袋1』根岸鎮衛著・東洋文庫207／平凡社・昭和四十七年

＊6「利根川べりの水死者供養塔」石田年子著・平成十六年
『房総石造文化財研究会会報・第83号』

＊7『越谷市史一・通史上』1074P　越谷市・昭和五十年

蒲生・清蔵院山門の「龍の彫り物」は、左甚五郎作との伝承がある。

一説には、寛永十五年（一六三八）、日光東照宮造営のため、日光へ向かった左甚五郎が一夜の宿のお礼として彫ったといわれている。

室町幕府の十三代将軍・足利義輝（一五三六～六五）の家臣伊丹正利が甚五郎の父である。

文禄三年（一五九四）、播磨の明石で甚五郎は生まれた。十三歳で京都・伏見の棟梁遊佐与平次の弟子となり、以後、江戸に出て造営大工として名をはせ、棟梁として名があがった。

東照宮の「眠り猫」・寛永寺の「登り竜」は有名で、江戸初期の建築彫刻の名人といわれた。

慶安四年（一六五一）、高松にて五七歳で没した。

宮大工伊丹利勝が甚五郎であると思われる。

多くの逸話で知られるが、講談師の虚構と考えられる。

（菅波記）

まちの歴史

川柳地区の石仏をたずねて

増岡　武司

かねて川柳に石仏があることをお聞きしていました。地図を頼りに現地へ出掛け調査してきました。

石仏は川柳・久伊豆神社前の路傍にひっそりと鎮座しておられ、昔は近在の人々の信仰の対象として、崇められていたものと思われます。

その石仏は三体並んで建っており、いずれの時代にかこの場所に集められたもののようです。

それぞれの造られた年代は違います。石仏の下の部分に三匹の猿（見ざる・聞かざる・言わざる）が彫ってあり、その仏の姿から「青面金剛像庚申塔」と思われます。

石仏は三体とも手が六本で剣を持っていたり、異なったものを手にしていて、顔の表情もやさしい顔や、恐ろしい顔とがあり、造られた年代によって特徴を出しているようです。

元禄九年（一六九六）・安永二年（一七七三）・天明三年（一七八三）とそれぞれ刻まれており、歴史の古さを物語っています。

越谷市内には約三六〇基ほどの庚申塔があると聞いています。古（いにしえ）の人々が庚申さまを熱心に信仰していたようです。

庚申信仰と庚申塔について調べてみました。

「人間の体の中に潜んでいる三尸（さんし）」といわれる三匹の尸虫（しちゅう）が、六〇日ごとにやってくる庚申（かのえさる）の日の夜に、人の睡眠中に口から抜け出して天に昇り、その人が日ごろ犯した罪を天の神に暴く。その報告をもとに判断して生命を奪ったり、若死にさせたりします。

庚申の日の夜は三尸虫が身体から抜け出る機会を与えないように寝てはならないといいます。

庚申講の仲間たちが一堂に会し、徹夜で過ごす「庚申待ち（こうしんまち）」という行事が行なわれました。

「まち」とは「まつり」が転化したという説や、「待つ」という説があります。

庚申待ちの記念として建立された石塔が庚申塔で、庚申塔は道端や辻、寺社の敷地内、墓地、個人の屋敷内などに建てられました。

江戸時代には庚申信仰が、全国津々浦々で庶民の間で盛んに行なわれました。北海道の礼文島から南は鹿児島県の竹島や悪石島まで日本中に庚申塔が建てられました。

明治に入ると仏教関係の行事として廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）のあおりを受けてか庚申信仰は急に衰え、庚申塔の建主もほとんど見られなくなりました。

「庚申待ち」の行事は主に男性中心ですが、越谷地区では特に女性だけの「月待ち講」もあったようです。

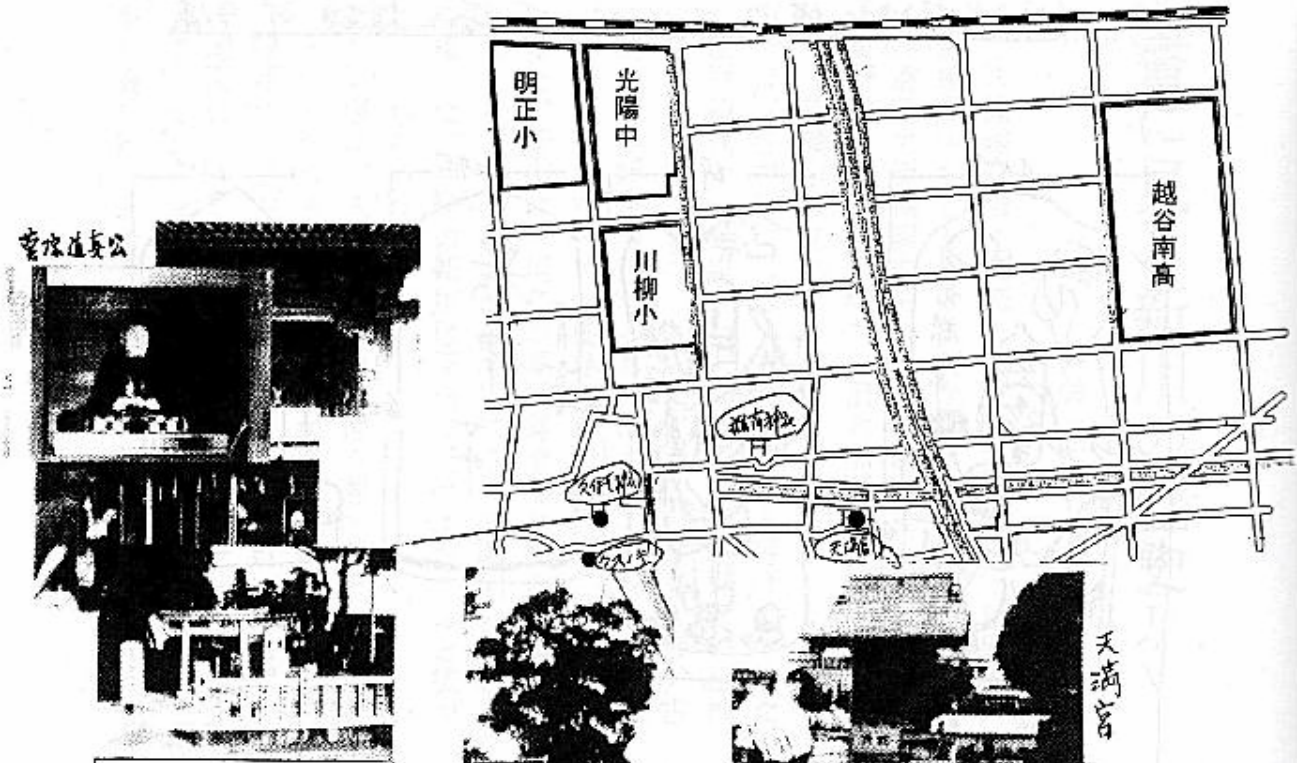
近くにある稲荷神社の境内にも庚申塔が二基あり、元禄八年（一六九五）宝暦（一七五三）とこちらも昔に造られたものでした。

その他に天保九年（一八三八）に、当時流行した疱瘡から身を守るためつくられた「疱瘡神」の石塔や、八幡大神・塞神などもありました。

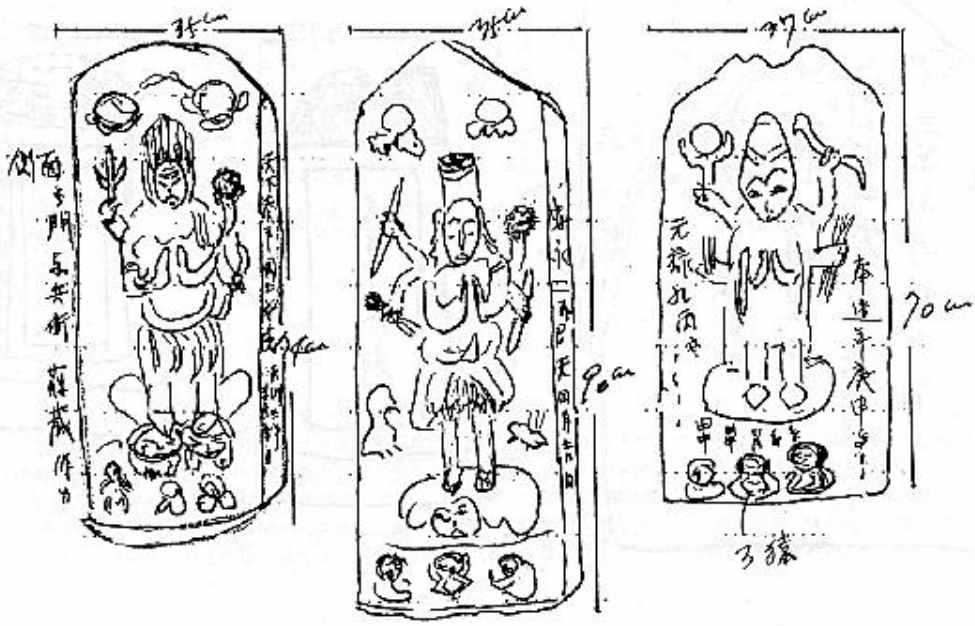
これからも地域の歴史について調べ、伝えていきたいと考えております。

※文中、庚申信仰と庚申塔の記事については、越谷市郷土研究会加藤幸一先生のご指導によるものです。

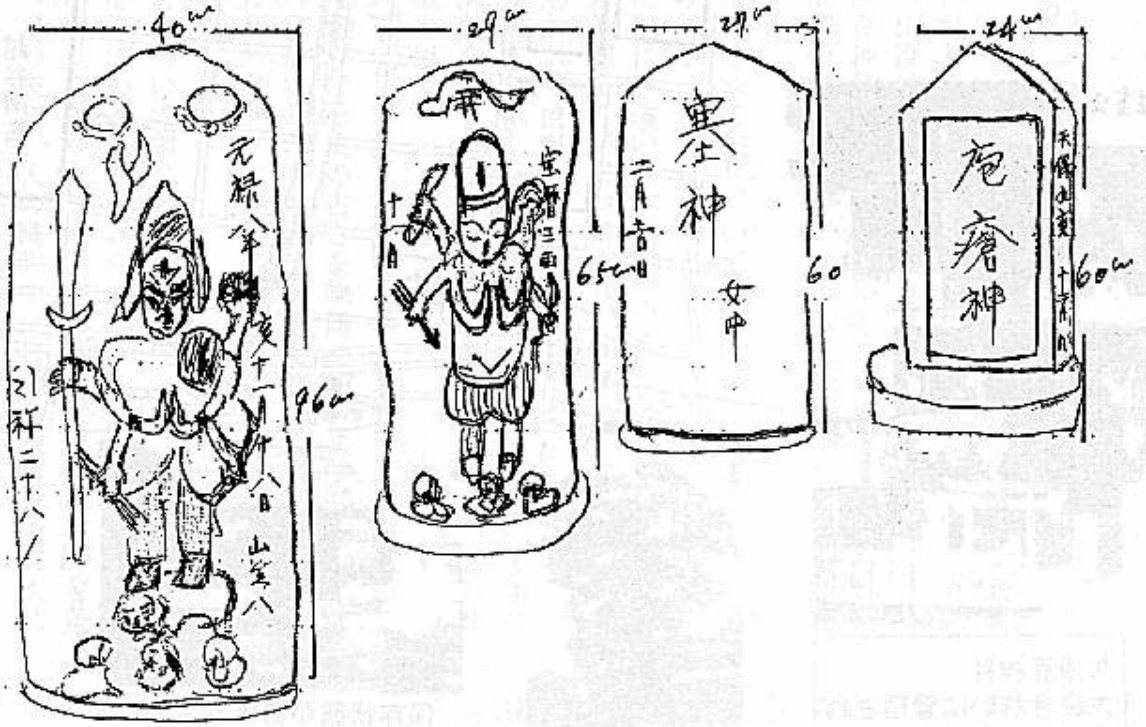
川柳地区の石仏をたずねて

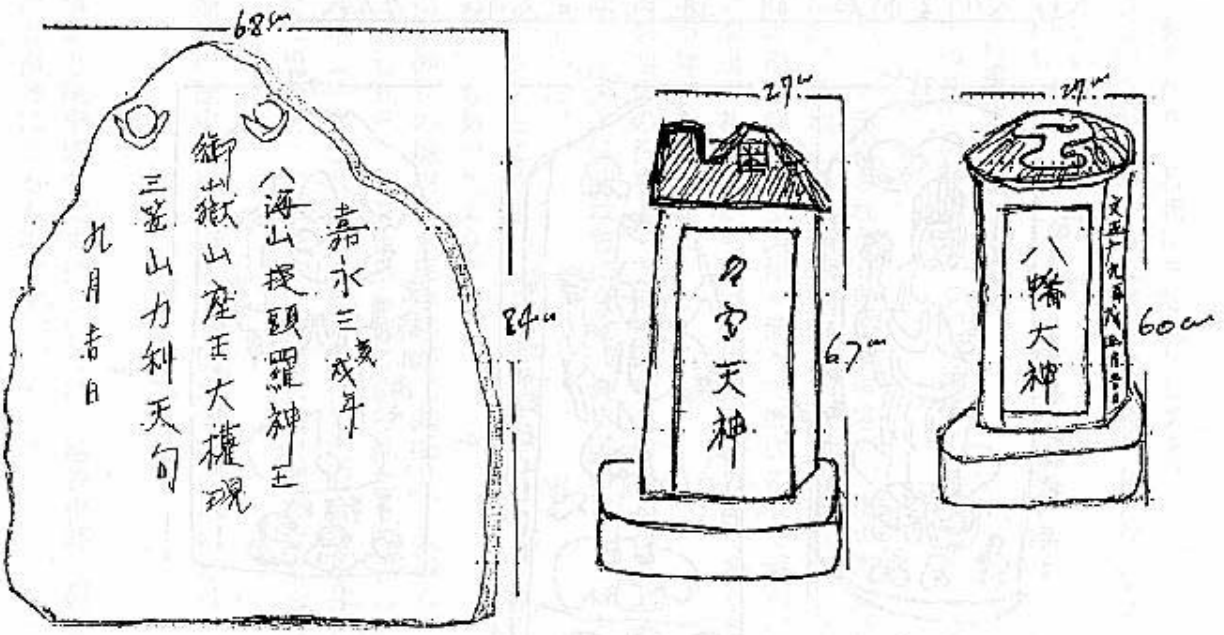


① 久伊豆神社前 道路上の石仏 3体



……②稲荷神社境内 石仏及び石塔と板碑 計7体





古文書に見る新川の歴史

加藤　幸一

県道蒲生岩槻線に沿って流れる現在の「新川」は、江戸時代は「古綾瀬川」とも呼ばれ、かつては綾瀬川の本流であった。県道蒲生岩槻線に沿って、旧越巻村（現、新川町）・旧七左衛門村（現、七左町）・旧大間野村（現、大間野町）と流れ、綾瀬川に注いでいる。

「新川」は、江戸時代には「古綾瀬川」と呼ばれていたことが、江戸時代の長島村、七左衛門村や大間野村の絵地図の解読によって判明した。さらに、現在の綾瀬川は、古綾瀬川に対して「新綾瀬川」とも呼ばれたこともわかった。

宝暦十一年（一七六一）の長島村内山家所蔵の新川筋絵地図によると、新川は、現在の県民健康福祉村の北隣にある三ツ又堰より、この新川が綾瀬川に注ぐ綾瀬川の落とし口までを指した。当時の新川は下流に行けば行くほど広がっていたこともわかった。

なお三ツ又堰は、末田用水が出羽堀や悪水落とし（現在の新川）とに分かれる所にあり、堰が三ツ又になっているためこう呼ばれた。古くから今日までこの地点にある。

この絵地図によって新川が江戸中期の宝暦十一年には既に完成していたことがわかり、その当時の新川の様子を伝える貴重な資料といえる。

宝暦１１年(1761)の新川筋絵図面（長島村内山家所蔵）

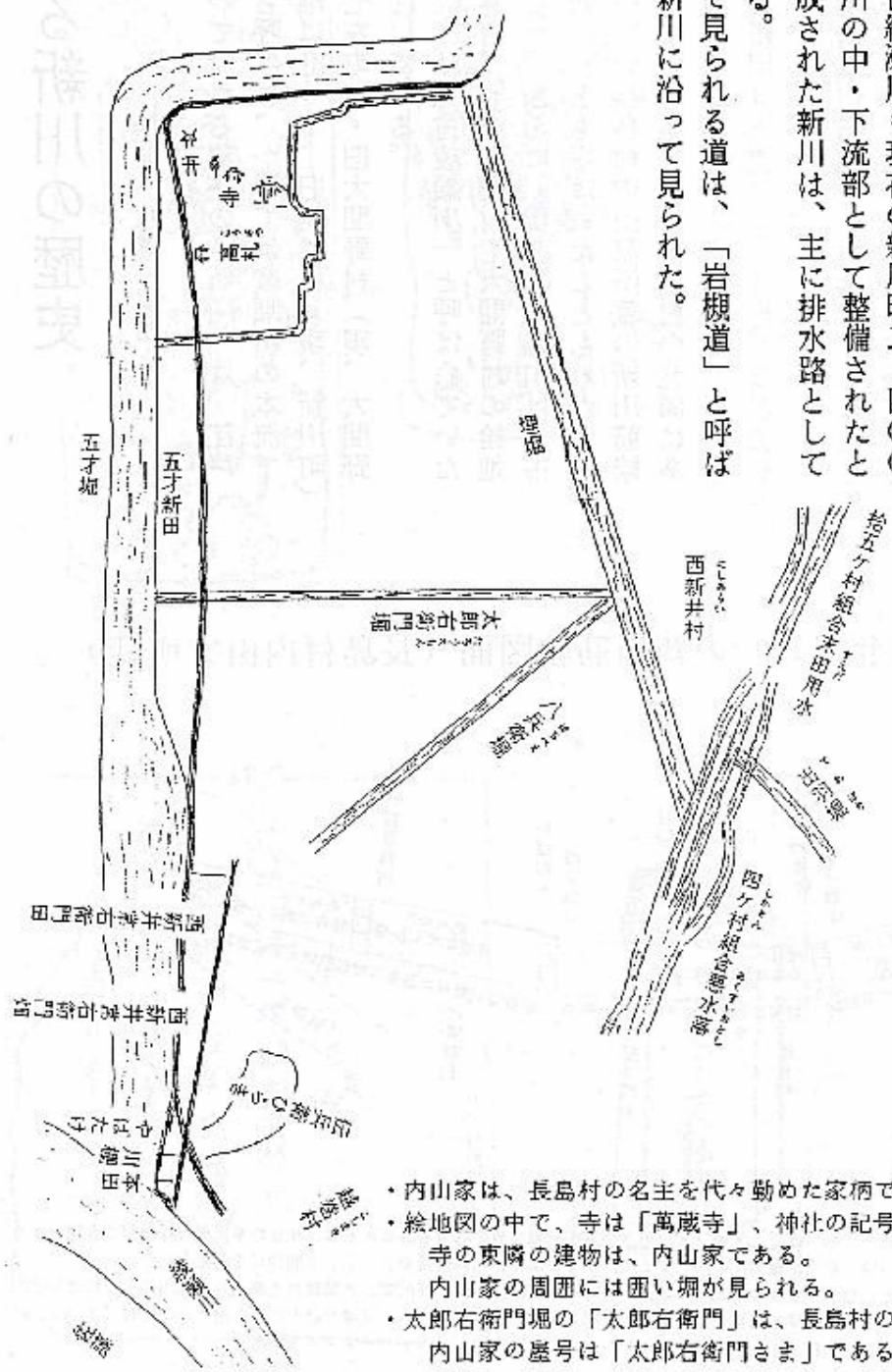
・上記の絵図面によると、新川は三ツ又堰（末田用水から出羽堀が分かれる地点にある堰、現在の県民健康福祉村の北隣）より綾瀬川の落とし口（現、新川が綾瀬川に流入する所）までを指し、その全長が２，０１４間(86)であるという。
内訳は、三ツ又堰から越巻村土橋迄754間、越巻村土橋から大間野村土橋迄600間、大間野村土橋から綾瀬川落とし口迄660間。
川幅は、三ツ又堰付近では４間半、越巻村土橋では７間、大間野村土橋では三ツ又堰付近の川幅の倍の９間となっていて、当時は、下流に行くほど川幅が広がっていることがわかる。１間は約１８０センチメートルである。

天保七年（一八三六）の長島村内山家所蔵の絵地図によると、末田用水の三ツ又堰下流は悪水落としとなっている。このことから、三ツ又堰下流は、末田用水の悪水落とし、つまり排水路であり、これが古綾瀬川に流れ込み新川の上流部として整備され、古綾瀬川も現在の新川町二－四〇〇の島村家の東側から新川の中・下流部として整備されたと思われる。こうして完成された新川は、主に排水路として利用されてきたのである。

図中の五才堀に沿って見られる道は、「岩槻道」と呼ばれる古道である。東は新川に沿って見られた。

「天保七年の長島村絵地図」

－－－長島村内山家文書より－－－



・内山家は、長島村の名主を代々勤めた家柄である。
・絵地図の中で、寺は「萬蔵寺」、神社の記号は「稲荷神社」、寺の東隣の建物は、内山家である。
内山家の周囲には囲い堀が見られる。
・太郎右衛門堀の「太郎右衛門」は、長島村の内山家をさす。
内山家の屋号は「太郎右衛門さま」である。

かつての綾瀬川本流である古綾瀬川は、五才川が綾瀬川に注ぐあたりから、現在の新川町二－四三三の斉藤家北側、二－四〇〇の島村家北側を通って（現在、この区間の川は埋められており、川の名残は全くない）、現在の新川筋を流れていたのである。

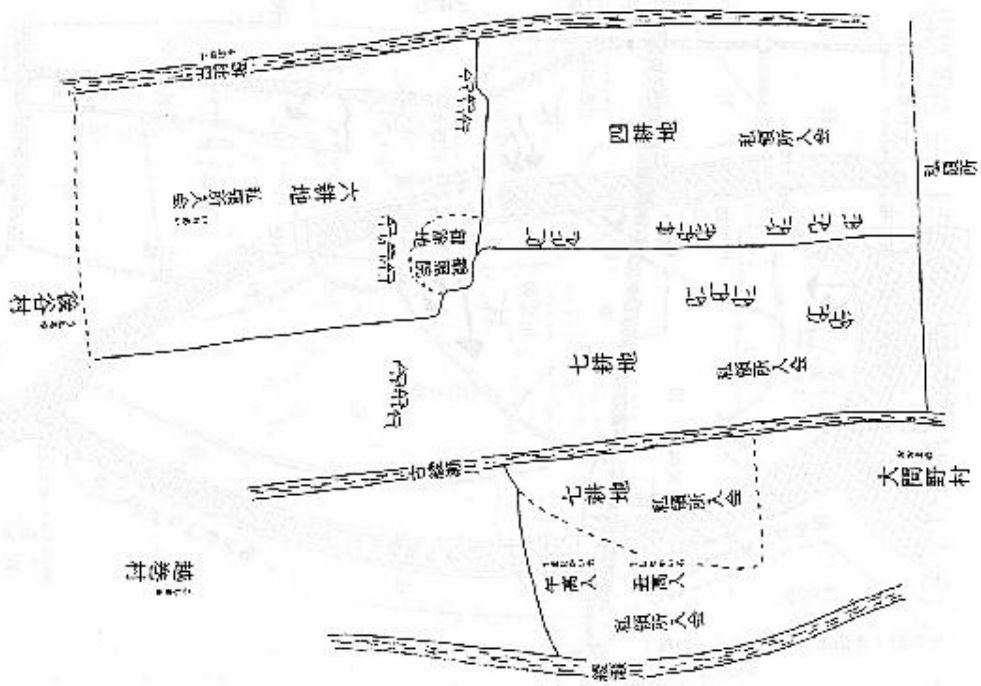
下の図は、慶応三年（一八六七）の絵地図である。この中に「古綾瀬川」と書かれた川がある。現在の新川である。出羽堀は古くからあり、末田用水の現在の県民健康福祉村の北側にある三ツ又堰から西流してきたものである。

江戸時代は、新川（古綾瀬川）の左岸（北側）に沿って古道である岩槻道があった。岩槻道は、新川（古綾瀬川）に沿って北西方向に直進し、新綾瀬川に突き当たる。次に綾瀬川に流入している五才川の左岸に沿って北に進み（前掲の絵地図を参照）、長島村の名主内山家のそばの大堰を通って現在の五才川橋交差点に向かったのである。この道は、地元では「往還」と呼ばれていた。

また図の中央には観照院がある。この観照院から上（北東）方向の道は、現在の出羽小学校に通じる。向かって右（南東）方向の道は、赤山道にぶつかる道である。その合流地点は、現在の赤山道と国道四号バイパスなどの交差点あたりである。向かって左（北西）方向の道は、新川町一－三六六の高橋清氏によると、先の山王社（七左町八丁目集会所）から右折し、突き当たって左折し、越巻村の薬師堂の南側と西側を回って半周して新川町二－七八の島村家

「慶応三年の七左衛門村絵地図」

――七左衛門村井出家文書より――



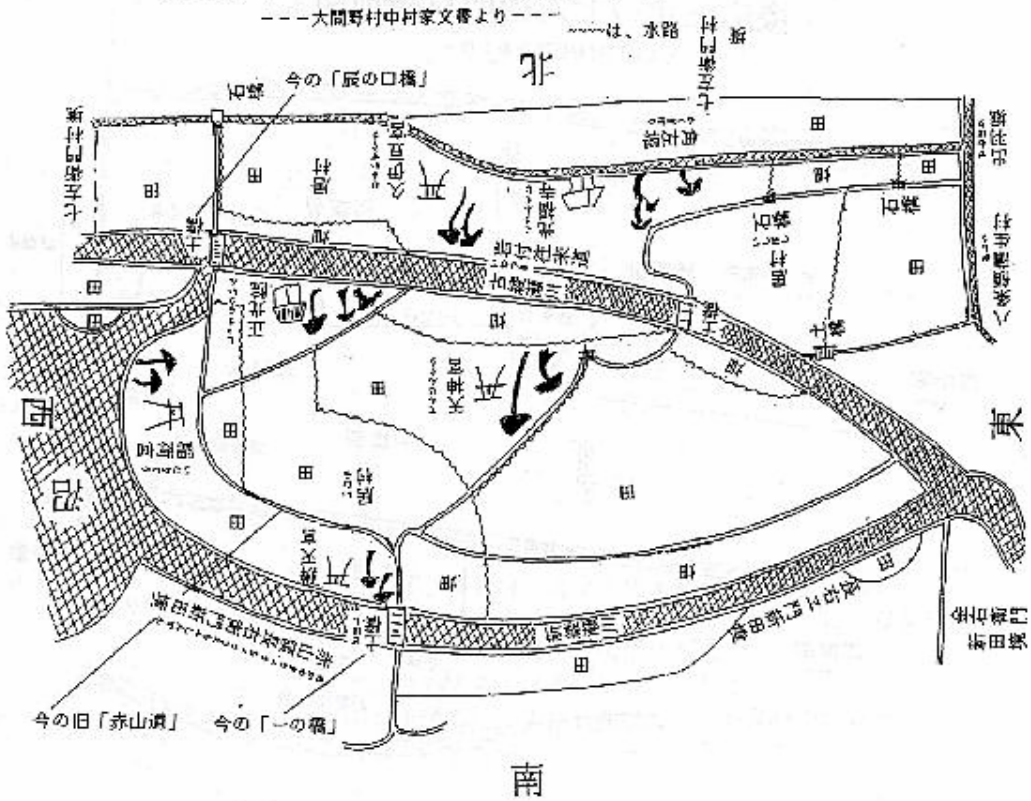
に突き当たり、そこで左折して江戸時代に名主を勤めた新川二一一八の島村家に向かい、その角地で右折して中新田の稲荷神社のわきを進んで後谷村に入る古道をさすと推定している。

下の図は、天保十一年（一八四〇）の絵地図である。「古綾瀬川」（現、新川）と「新綾瀬川」（現、綾瀬川）の文字が見られる。「古綾瀬川」には、「岩付（岩槻）往来道」（岩槻道）がこの川に沿って見られたことがわかる。岩槻道と赤山道（図の向かって左）が交差する地点に新川をまたぐ土橋が架けられている。現在の「辰の口橋」である。江戸時代は、「瀧の口土橋」と呼ばれていた。「瀧口土橋」と書かれた古文書が存在するからである。龍（辰）に「シ」（さんずい偏）、これが正しければ、当時は「龍（辰）の口」ではなく「瀧（滝）の口」と呼んでいたといえる。

この「滝の口」（辰の口）には、川底に深く大きな穴があり、滝のようにこの穴に水が落ちていたとの伝説が残っている。ここは古綾瀬川の中でも深い淵が形成されていた場所であったのであろう。

新綾瀬川（現、綾瀬川）の上流には広大な沼があった。この大沼は、越谷側では、現在の新一ノ橋周辺から武蔵野中学校にかけて広がり、すぐそばには七左衛門村の大沼明神が見られた。また綾瀬川の対岸の草加側でも同様に大きく広がっていた。

「天保十一年の大間野村絵地図」



一ノ橋（図中、新綾瀬川に架かる土橋）は、江戸時代は「一の網（あじ）土橋」と呼んでいたようだ。これがいつの日か「一の橋」と呼ばれるようになったものである。

「あじ」とは、地元の方言「あじあみ」のことかもしれない。「あじ網」とは、「越ケ谷言葉　方言と訛集　改補編」（越谷市郷土研究会理事山崎善司著）によると、川を仕切り船に取り付けた大網で、上り魚を捕る漁法であるという。

角左（かくざ）堀は、大間野小学校の北側を流れる現在の排水路筋である。

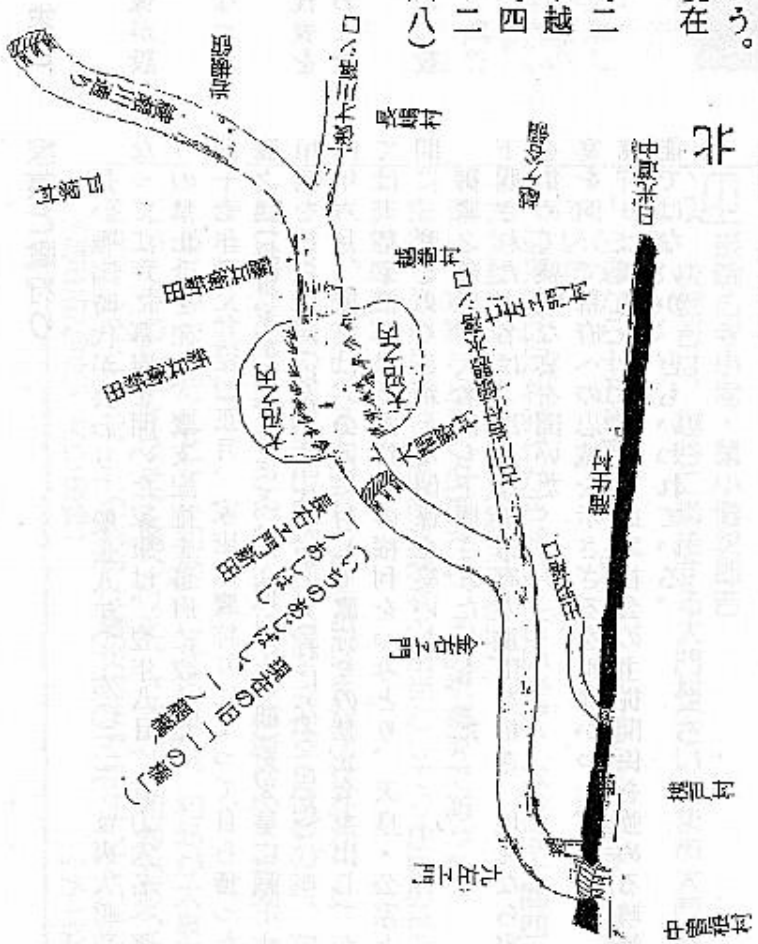
図中、久伊豆神社の現在地は、光福寺の裏の大間野町二－二〇〇のかつての太田家の跡地（現在、「パルコート越谷」のマンション）あたりである。稲荷社は、大間野町四－一五二－二の町田家である。弁天社は、大間野町五－二三五の金子家である。以上の三社は、慶応四年（一八六八）に天神宮の地に合祀されて「三社神社」として今日に至っている。

なお現在の綾瀬川は、桶川市小針領家の備前堤に源を発し、葛飾区の中川に架かる上平井橋南側で合流する全長約三九キロの中川水系に属する川である。

しかし、かつての綾瀬川は、足立郡と埼玉郡の郡境を流れ、近世初頭まで荒川の主流であった。

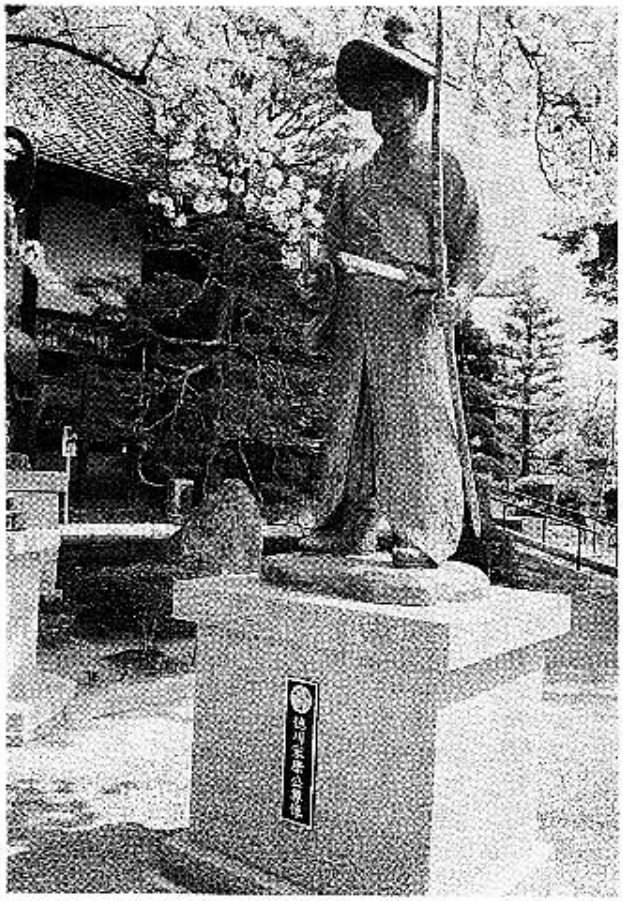
綾瀬川筋の絵図面（一部）

――長島村内山家所蔵――


北
日光道中
越ケ谷領
北島村
北島領
綾ケ瀬川筋
高橋三郎さ
北川
北川筋
北川筋領
北川筋領
北川筋領

徳川家康公狩り装束の銅像

青山　栄吉



征夷大将軍の銅像が越谷に建った。平成十六年十月、野島山浄山寺に、家康公狩り装束の銅像が設置された。この銅像は、家康の等身大で作られている。天正十九年(一五九一)、越谷周辺で家康が鷹狩りをおこなったとき、浄山寺に立ち寄った由緒がある。

家康は、大規模な鷹狩りをしばしば計画し、狩りの行程表を自作するほどで、七十五年の生涯で千回以上の鷹狩りをおこなったという。

家康にとって鷹狩りは鍛錬、娯楽以上に、農民統制のための政治的手段として活用された。

家康と鷹狩り

長い戦国時代が終わり、慶長八年(一六〇三)、征夷大将軍になって江戸に幕府を開いた家康は、翌年八月、有力大名へ鷹狩りの禁止令を発し、鷹支配権を幕府に収めた。

同十七年(一六一二)正月、家康は鷹狩りによって自ら獲った御鷹之鶴(将軍家が鷹狩りによって捕らえた鶴)を天皇に献上する恒例をひらいた(以後、歴代将軍もこれにならった)。

同年六月、家康は、公家に対して鷹狩りの禁止令を出し、かつては天皇家にあった鷹狩りの権利をつみとり、天皇・公家との間に、鷹をめぐる新たな関係を築いた。

御鷹之鶴は、大名にも下賜されたりもした。下賜された大名は、江戸なら幕府の重臣を招き、地元なら家臣を集めて盛大な宴を開いた。宴を開いて幕府への忠誠を示さざるを得なかった。鷹狩りは儀礼をとおして、武家社会の主従関係を強める政治機能ではないか、ともいわれている。

鷹狩りの歴史

日本の鷹狩りの歴史はふるい。仁徳天皇に献上された鷹を、渡来人が調教し、狩りに用いた。それをきっかけに「鷹甘部」(たかかいべ)がおかれたと『日本書紀』にある。

鷹狩りとは、飼いならした鷹を山野に放ち、鶴・白鳥・雁などの鳥や獣を捕らえる狩猟のひとつであった。

八世紀になると、天皇はとくに許可したもの以外の私的な飼育を禁じ、天皇のもとに鷹狩りの制度がととのえられた。鷹は御鷹とよばれ、王権の象徴となった。

戦国武将と鷹狩り

鎌倉幕府が成立し、武家政権が登場すると、鷹狩りは一時、耕作の妨げになるとして停止令が出された。

贄鷹(にえたか)以外の飼育は禁止されたりした。

しかし、あまり守られなかったと伝えられている。

公家のなかでは、西園寺・持明院の両家が鷹の家として定着した。武士の武芸としても鷹狩りは流行し、名鷹の所持が駿馬の所有とおなじく武士たちの願いとなった。

各地の戦国大名は、領地のなかで、鷹の権利を独占し、鷹狩りに托して領内を把握したり、敵地を偵察する手だてとして利用した。

従来にもまして軍事・政治機能が重視されるようになった。鷹のもつ伝統ある権威をとりこみ、鷹狩りは時代を反映して、戦国大名の象徴とされた。

徳川家康・秀忠・家光

迎

摂院の寺小僧・鼠小僧次郎吉

次郎吉は、越谷に隣接する大門村(さいたま市大門)の農家の出らしい。

十三歳から十五歳まで四丁野(宮本町)の迎摂院で寺小僧をしていた。

迎摂院は足利時代から続いた古い寺で、本堂は十間四方の大伽藍であった(関東大震災で倒壊)。

徳川将軍家から厚く保護され、その祈祷寺であった。

総鎮守久伊豆神社や中町浅間社の別当として、住職の格式は非常に高かった。

一旦、門内に入ると町方や岡っ引は手が出せなかった。

江戸末期の住職秀山大和尚(天保十一年一月没)の時、次郎吉は何かの手づるでこの門に入り、少年時代の三年間、和尚から教えを受けた。

彼はふとしたことから和尚にしかられた。和尚が大事にしていた寺の杉戸をなたで傷つけた。さすがの和尚も怒って彼を放逐したという。この杉戸は震災前まで存在していた。

(『越谷町秘話』より抜粋)　【水上記】

こしがやふるさと話

大間野町・旧中村家住宅について

増岡　武司

平成十六年十一月十四日、大間野町一丁目にある旧中村家住宅が一般に公開され、現在も大勢の方々が見学に訪れています。

この住宅は、江戸時代に名主を勤めた中村氏の旧宅で、平成九年に寄贈されたものです。

築百年の長屋門、式台付き玄関を持つ母屋、大量の新米を保存した石蔵、白壁の土蔵の四棟が建築当初（明治時代初期）の姿に復元されています。

施設内には江戸時代の古文書や民具類なども展示されており、建物に入ると懐かしい情景を思い出すと同時に先人の知恵をうかがい知ることができます。

これからは多くの市民が地域の歴史、風土等について生涯学習や学校教育における地域学習に活用すると共に、ほっとする憩いの場にしてゆきたいものです。

なお本文作成については教育委員会、生涯学習課文化財係より提供された資料を使用させて頂きました。

（資料）

中村家の歴史①　地域の歴史

旧中村家住宅の所在する越谷市大間野町は市域の南側にあたり、綾瀬川を挟み埼玉県草加市と接している。綾瀬川左岸の自然堤防上に位置し、標高二・五メートルである。大間野町周辺は寛永年間（一六二四～四四）の開発地で、元禄八年（一六九五）の検地によって槐戸新田より分村した旧大間野村である。

旧大間野村は江戸時代後期に編纂された『新編武蔵風土記稿』によれば、家数五四、東西十一町、南北七町余り、村の中央に高札場を設けていた。

村の鎮守は久伊豆神社で、弁天社、稲荷社、天神社、新義真言宗光福寺、浄土宗正光院、閻魔堂が記録されている。

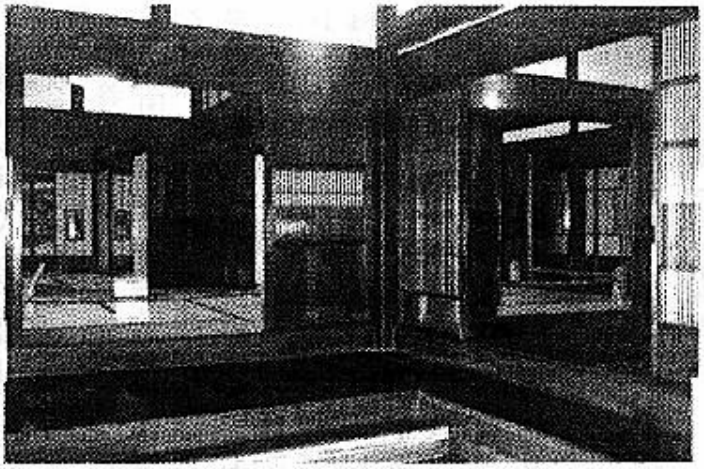
現在、久伊豆神社および弁天社は稲荷神社に合併され、大間野町四丁目一番一にある三社神社となっており、境内に天神社も祀られている。

光福寺・正光院ともに現在大間野町内に確認できる。

中村家母屋

助郷は越ヶ谷宿に出役しており、元荒川の寺橋（現宮前橋）の普請組合村でもあったため普請材料や人足の負担も行っていた。紀州家鷹場にも指定されており、家屋の建て替えや樹木の伐採などに対し、鷹場としての厳しい制約を受けていた。

明治維新を迎え、旧大間野村は明治二年（一八六九）に小菅県、明治四年十一月からは埼玉県に属し、明治九年当時、行政区第二区に所属している。その後、明治二二年から旧谷中村・旧越巻村・旧七左衛門村・旧四丁野村・旧神明下村と共に旧出羽村に属し、昭和二九年十一月からは二町八ヵ村の合併により誕生した越谷町、昭和三三年十一月からは越谷市となり、現在に至っている。



母屋の内部

中村家の歴史②

中村家は「四郎兵衛様」と呼ばれ、家伝によると豊臣方の小西行長の家臣で、関が原の合戦の後に徳川方へ従い、兄弟及びその一族郎党と共に関東に移住し、この地を開拓したと伝えられている。代々中村四郎兵衛を名乗り、江戸時代には旧大間野町の名主を勤めていた。光福寺の開山にも尽力したとされ、墓地には高さ二・九メートルの墓石がある。この墓石は石棺になっており、木炭に埋もれた遺体がミイラ状になって安置されている。

幕末には上野彰義隊の残党を西の蔵（現在は壊されている）に匿い、手当の後会津へ逃がしたことや、明治維新後間もなく有栖川宮が黒田清隆・桐野利秋などと共に狩の際に休息したとも伝えられている。

現在で確認できる古文書によると、正徳四年（一七一四）の文書に中村四郎兵衛の名がある。

当時、中村四郎兵衛は大間野村の名主を勤めながら伊奈代官所の郷手代としての役割も勤めていた（『八潮市史』資料編近世Ⅱ）。郷手代とは代官所が管轄する村々の有力者から選び、年貢の徴収や代官所の通達などを村々に伝える役割を担い、名字帯刀が許されていた。中村四郎兵衛は郷手代が廃止される享和十四年（一七二九）まで勤めていた。この時期の古文書にその名がある中村五郎兵衛門は中村家の親類筋にあたる。

明治維新を迎え、中村家では四郎兵衛を名乗ることなく、賢之輔（天保十一年～大正五年）・貞次郎（安政五年～昭和八年）・亥乃輔（明治三二年～平成八年）と当主が代わる。

明治五年埼玉県内に区戸長制が実施されると、中村賢之輔は第二区（越ヶ谷・増林・蒲生など二八町村）の副区長を勤めている（明治九年『正副戸長名簿』）。また、明治十七年十二月から同十八年十二月まで南埼玉郡を代表して埼玉県議会議員も勤めている（『埼玉県議会一〇〇年史』）。

今回復元整備した各建物は、中村賢之輔の代に長屋門・土蔵・納屋、貞次郎の代に母屋をそれぞれ新築している。

越ヶ谷久伊豆神社の収支決算書

木原　徹也

越ヶ谷久伊豆神社は、かって越ヶ谷町はじめ七ヶ村の総鎮守といわれ、大国主命（大己貴命）を祭神とする古い歴史をもった神社である。

平安末期から鎌倉時代にかけて、現在の埼玉県東部の地に勢力をはった武蔵七党の野与党あるいは私市党の氏神ではなかったかといわれる。

旧越ヶ谷はじめ地元の多くの人々から「氏神さま」として崇敬され、秋九月の別名バカ祭りともいわれる例大祭や、五月のフジ祭りなどで親しまれている。

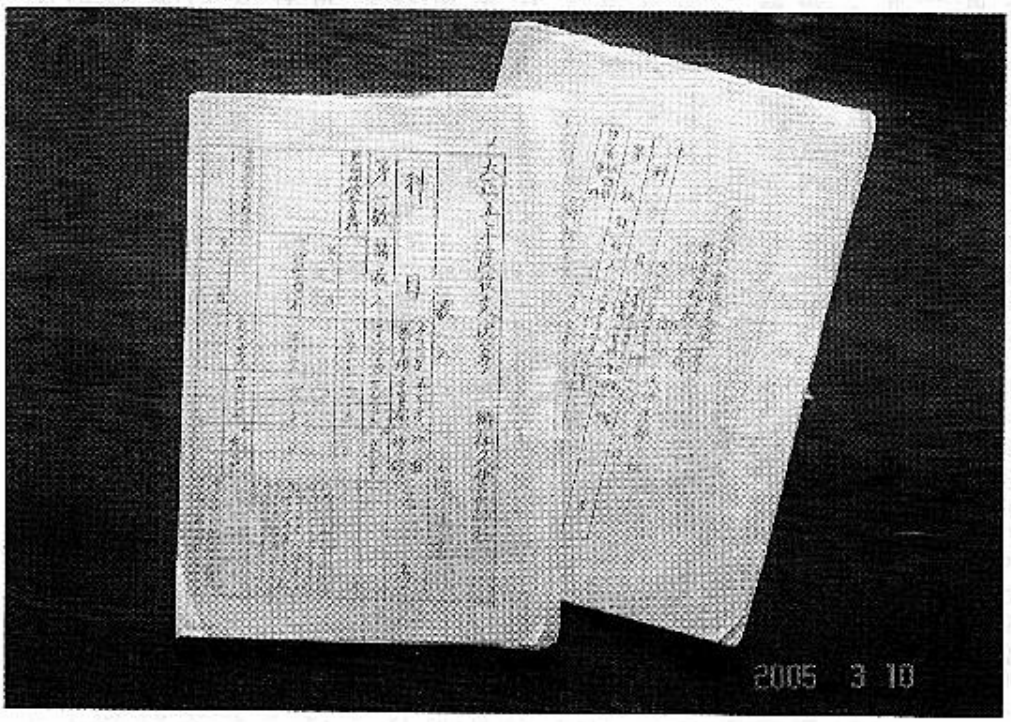
この久伊豆神社の今から九〇年ほど前の神社の運営や、当時の越ヶ谷などの人々とのかかわりの一端を知ることができる大正五年度（一九一六）の収支決算書と同八年度（一九一九）の収支予算書があるので簡単に紹介したい。

収支決算書【大正五年度】

大正五年度の収支決算書は、半紙二つ折り、縦書き、十六ページのこより綴りで、末尾には「久伊豆神社基本財産現金明細書」その他が添付されている。

この収支決算書で重要なのは「備考」欄で、細かな説明があり、なかなか興味深いので別表として掲げた。なお、引用にあたっては、縦書きを横書きに改め、漢数字を算用数字に改め、また説明文についても適宜省略を行なった。

一神社の収支決算書という特別なものであり不明な部分も多い。過日、久伊豆神社を尋ね、神職にお会いして決算書をお見せし、不明な部分についてご教示いただいた。多少の解説と感想を次に示す。



収入総額　七三〇円四五銭四厘（前年比五〇円五六銭三厘の減）
支出総額　六九二円七六銭　（前年比八八円二五銭七厘の減）
差し引き　三七円六九銭四厘の残余金が生じている。

収入

■　氏子負担金　三九七円四七銭六厘（全収入の五四・四％）
■　賽銭・祈祷料　一七八円五五銭二厘
■　寄付金　三三円五銭
氏子（住民）の負担　六〇九円七銭八厘（全収入の八三・四％を占める）
郡長・町村長出金　二四円五〇銭（全収入の三・四％を占める）

久伊豆神社は、多くの氏子（住民）達によって、経済的に支えられていたことがわかる。

支出

■　神職給料などの人件費　二九三円四五銭一厘（四二・四％）
■　庁費（本部費・事務局費）　一九五円三五銭四厘（二八・二％）
■　祭典費　一二二円八七銭五厘（一六・三％）
以上三項目だけで全支出の約八七％を占める。

項目ごとに多少の解説をすると

●　収入の部

第一項　神饌幣帛料

九月二八日の例大祭・新嘗祭・祈年祭の三回については、南埼玉郡長より例年二二円が神饌幣帛料として出金されている。国家神道の時代「郷社」に対しては、このような形で郡長から公金支出があった。

第二項　氏子負担金

久伊豆神社の氏子として、当時の越ヶ谷町、出羽村の内の四丁野、神明下、谷中及び増林村花田の住民から負担金が出されている。現在でもこの地域の人々は氏子であるとのことで、久伊豆神社創立の歴史がこういう形で引き継がれていることがわかる。なお、当時の久伊豆神社の氏子数は九五〇戸とある。

第三項　社入金

初穂料として、氏子である越ヶ谷町と出羽村、増林村の町村長より、神饌幣帛料同様に公金が支出されている。

第四項　境内外地収入

久伊豆神社が当時小作田を所有していたことがわかる。また境内地を二名の者に有料で使用させていたようである。

第五項　寄付金

用途指定寄付金の用途はよくわからない。

●　支出の部

第一項　祭典費

太々神楽は、現在は例年五月九日に行われる「藤祭太々神楽講祭」に相当するものと思われる。

大祓祭は、現在でも例年六月三〇日に「水無月夏越大祓式」として行われている。

構火祭は、現在でも例年一〇月三一日に行われる「御燎祭（おかがり祭）」であり、古神札や古熊手を焼く、いわゆる〝お焚きあげ〟である。

新嘗祭は、現在も例年十一月二五日に「新嘗祭」として行われている。勤労感謝の日に相当する。

祈年祭は、現在でも例年二月一九日に「祈年祭」として行われている。古くからの毎年陰暦二月四日に行われる五穀豊穣や国家の安寧を祈った祭典に由来する。

月次祭は、現在でも毎月一日・十五日に「月次祭」として行われている。

縁起

縁喜市は、現在でも例年十二月十五日に「縁喜市」として行われている。いわゆる熊手市である。

第四項　庁費

第一目の備品費の内、真中落錠六本は、正確にはわからないが本殿正面の扉には六個の錠が付いているので、それであろうとのこと。真中は真鍮であろう。

支出の中で特徴的なのは、盛大な祭りで知られる九月二八・二九日の例大祭にかかる費用である。

神饌費六円九〇銭五厘はじめ、数えられるものだけで七一円一一銭となり、全支出の一〇%余となる。この祭礼には神職一〇人と供人二人が出席し、祭りの賑やかさがうかがわれる。

なお、収支決算書の末尾にある久伊豆神社社司の池田吉兵衛は、現小林宮司の先代の神職である。

現在、久伊豆神社は宗教法人であり、その収支決算書や財産目録書などを埼玉県庁に毎年提出しているとのことである。

（参考）

収支決算書に記された金額は、現在では使用されていない銭・厘の単位まであり時代のへだたりを感ずるが、あまりにも貨幣価値が違い過ぎて現在の物価に比べてわかりにくい金額となっている。

そこで当時の物価を知る参考となる資料を次に示す。

◆　旧増林村の大正五年度の歳入・歳出

歳入総額　六、二八〇円一九銭（うち村税が四、五七三円八三銭）

歳出総額　五、〇九九円一七銭

（村長報酬　二一六円、月額　一八円

助役報酬　一四四円　月額　一二円

収入役給料一三二円　月額　一一円などが含まれる）

◆　当時の生活にかかる物価のうち主なものを次に示す。

物品名	価格	大正(年)
アンパン	二銭	六
うな重	四〇銭	四
駅弁(幕の内)	一五銭	六
寿司(並)	一二銭	五
牛肉(中一〇〇グラム)	一四銭	七
もりソバ	四銭	六
タバコ(ゴールデンバット)	六銭	六
日本酒(一・八リットル)　上等	二円	五
中等	一円二四銭	五
並	四八銭	五
白米(一〇キロ)	一円二〇銭	五
映画入場料	二〇銭	七
歌舞伎入場料	七円八十銭	一〇
銀行員初任給(大卒)	四〇円	五
公務員初任給(大卒上級)	七〇円	七
巡査初任給	一八円	七
北千住―久喜電車賃	四三銭	九
山手線初乗り	五銭	九
ガソリン(一リットル)	三九銭	一〇
金(一グラム)	一円三六銭	六
銀座地価(坪)	五〇〇円	二
新聞	五〇銭	四
背広(高級品)	二五円	四
ハガキ	一銭五厘	大正期

別表

No.1

<収入>

大正5年度収支決算

郷社久伊豆神社

科目	本年度決算額	本年度予算額	比較増減	備考
	円 銭厘	円 銭厘	円 銭厘	
1. 諸収入	701,254	754,017	△52,763	
1)神饌幣帛料	22,000	22,000	0	
(1)神饌幣帛料	22,000	22,000	0	・9月28日御大祭典神饌幣帛料 10円
				・11月26日新嘗祭典神饌幣帛料 6円
				・2月19日祈年祭典幣帛料 6円
				各3回とも本部長より供進
2)氏子負担金	397,476	457,417	△59,941	
(2)氏子負担金	397,476	457,417	△59,941	・越ケ谷町負担金 320円46銭4厘
				・出羽村大字四丁野・神明下・谷中
				の3大字負担金 64円70銭
				・増林村大字花田負担金 12円31銭2厘
3)社入金	181,052	190,000	△8,948	
(1)賽銭	96,852	100,000	△3,148	・大正5年4月1日より大正6年3月に至る1ヵ年間
				の総収入
(2)祈祷料及び初穂料	84,200	90,000	△5,800	・大正5年4月1日より大正6年3月に至る1ヵ年間
				の祈祷料 81円70銭
				・越ケ谷町外2ケ村長より初穂料 2円50銭
4)境内外地収入	37,865	46,400	△8,535	
(1)境内外地収入	31,565	27,800	3,765	・当社有畑小作入付金 13円80銭7厘
				・同上小作米売却代金 17円75銭8厘
(2)使用料	6,300	3,600	2,700	・大正5年4月1日より大正6年3月迄1ケ年間
				境内使用料
				大野森蔵納金 3円60銭
				遠藤亀吉納金 2円70銭
(3)枯損木売却代	0	15,000	△15,000	

No.2

科目	本年度決算額	本年度予算額	比較増減	備考
	円 銭厘	円 銭厘	円 銭厘	
5)寄付金	33,050	30,000	3,050	
(1)用途指定寄付金	33,050	30,000	3,050	・越ケ谷町の新石町・中町・本町 30円
				・10月祭典年口者より 3円5銭
6)雑収入	5,720	8,000	△2,280	
(1)寄託金利子	5,720	8,000	△2,280	・経費預金利子、但し大正2年より大正6年
				3月迄分 5円72銭
(2)不用品物売却代	0	0,100	△0,100	
7)前年度繰越金	24,091	0,100	23,991	
(1)前年度繰越金	24,091	0,100	23,991	
2. 繰入金	29,200	27,000	2,200	
1)基本財産繰入金	29,200	27,000	2,200	
(1)基本財産繰入金	29,200	27,000	2,200	・神社基本財産利子 29円20銭
合計	730,454	780,917	△50463	

No.2

科目	本年度決算額	本年度予算額	比較増減	備考
	円　銭厘	円　銭厘	円　銭厘	
5)寄付金	33,050	30,000	3,050	
(1)用途指定寄付金	33,050	30,000	3,050	・越ケ谷町の新石町・中町・本町　30円
				・10月祭典年口者より　3円5銭
6)雑収入	5,720	8,000	△2,280	
(1)寄託金利子	5,720	8,000	△2,280	・経費預金利子、但し大正2年より大正6年
				3月迄分　5円72銭
(2)不用品物売却代	0	0,100	△0,100	
7)前年度繰越金	24,091	0,100	23,991	
(1)前年度繰越金	24,091	0,100	23,991	
2. 繰入金	29,200	27,000	2,200	
1)基本財産繰入金	29,200	27,000	2,200	
(1)基本財産繰入金	29,200	27,000	2,200	・神社基本財産利子　29円20銭
合計	730,454	781,017	△50,563	

<支出>

No.1

科目	本年度決算額	本年度予算額	比較増減	備考
	円　銭厘	円　銭厘	円　銭厘	
1・経費	645,925	726,017	△80,092	
1)祭典費	112,875	175,090	△62,219	
(1)神饌費	52,510	53,200	△0,690	・太々神楽祭典　2円17銭
				・五穀豊穣祭　2円49銭5厘
				・御祓祭典　2円30銭5厘
				・9月大祭典　6円90銭5厘
				・燈火祭　3円67銭
				・新嘗祭　3円98銭5厘
				・消防組点検　80銭
				・新年祭　4円45銭5厘
				・月次祭典(1ケ年分)　25円72銭5厘
(2)幣帛料	4,945	8,500	△3,555	・奉書麻用紙代　2円74銭5厘
				・黒残木綿代　2円20銭
(3)装飾費	3,850	64,200	△60,370	・メリンス青・黄・赤・白・黒の5色、3尺5寸づつ
				2組の代金　3円85銭
(4)燈費	10,000	10,000	0	・燈祭典用の薪70把　10円
(5)傭人料	18,450	17,400	1,050	・御大祭典神職2人外供2人手当金　11円70銭
				・新嘗祭神職2人、奏楽3人報酬　2円35銭
				・縁喜市祭典神職2人報酬　2円
				・祈年祭典神職2人報酬　1円40銭
				奏楽人3人報酬　1円
(6)神楽費	6,000	6,000	0	・燈祭典神楽代　3円
				・縁喜市神楽代　3円
(7)幄舎建設費	7,695	8,970	△1,275	・御大祭典式場建設及び
				取りかたづけ　4円57銭5厘

No.2

科目	本年度決算額	本年度予算額	比較増減	備考
	円　銭厘	円　銭厘	円　銭厘	
				・式場用トタン・生子板損料　2円
				・□付竹代　42銭
				・杉丸太・竹損料　70銭
(8)雑費	9,425	6,800	2,625	・月次その他祭典用ローソク代　1円82銭
				・白木綿細引代　98銭
				・紙・縄・草履・竹□代　2円67銭5厘
				・雇人料　3円95銭
2)神職給料	249,996	250,000	△0,004	
(1)神職給料	249,996	250,000	△0,004	・大正5年4月より大正6年3月迄1ケ年間
3)雑給	13,455	10,000	3,455	
(1)雑給	13,455	10,000	3,455	・本殿・拝殿・神楽殿・境内掃除人夫賃
				1円80銭
				・太々殿・社務所掃除人夫賃　90銭
				・井戸周囲掃除人夫賃　1円
				・諸祭典及び□夫賃　9円40銭
				・決算印刷原□　35銭5厘
4)庁費	195,354	186,127	9,227	
(1)備品費	5,990	7,500	△1,510	・真中落錠六本車4個代　3円71銭
				・現行神社法令類纂1冊代　2円28銭
(2)神符・守札調整費	12,165	12,720	△0,555	・祈祷用板札代　11円35銭
				・のり入紙水引代　81銭5厘
(3)祈祷用品費	17,360	11,000	6,360	・御供物菓子代　16円
				・棚入紙代　43銭
				・祈祷用品代　93銭
(4)印刷費	2,313	2,000	0,313	・経費予算調整用紙代　1円31銭

No.3

科目	本年度決算額	本年度予算額	比較増減	備考
	円　銭厘	円　銭厘	円　銭厘	
				・経費予算決算印刷代　1円3厘
(5)消耗品費	6,665	5,000	1,665	・筆墨代　1円57銭
				・朱肉代　80銭
				・封筒及び紙代　1円5厘
				・木炭及び製茶代　3円29銭
(6)通信運搬費	0,415	0,600	△0,185	・郵便切手・ハガキ代　41銭5厘
(7)賄費	96,564	87,150	9,414	・山林鳥害巣毀じ臨時賄　1円23銭
				・大祭典総賄　44円81銭
				・燈火祭典賄　4円41銭5厘
				・新嘗祭典賄　22円13銭4厘
				・縁喜市祭典賄　2円40銭5厘
				・祈年祭典賄　20円7銭
				・雇人賄金　1円50銭
(8)雑費	23,882	24,157	△0,275	・境内周囲□材料　19円85銭7厘
				・帳簿調整及び障子紙代　1円50銭5厘
				・松飾り代　1円21銭
				・ホウキ及び□提灯張替代　1円31銭
(9)社務所使丁給料	30,000	36,000	△6,000	・大正5年4月より大正6年1月迄の分
5)旅費	1,200	4,800	△3,600	
(1)旅費	1,200	4,800	△3,600	
6)境内外地諸費	19,895	17,000	2,895	
(1)備人料	11,100	7,000	4,100	・境内・神社池周囲植木手入れ費　10円50銭
				・境内土盛費　60銭
(2)諸税	8,795	10,000	△1,205	・国税　4円87銭
				・県税及び町税　3円47銭5厘

No.4

科目	本年度決算額	本年度予算額	比較増減	備考
	円　銭厘	円　銭厘	円　銭厘	
				・葛西用水費　21銭
				・農会費　24銭
7)寄付金	6,000	6,000	0	
(1)神職会寄付金	6,000	6,000	0	・本年度神職会寄付金
8)修繕費	29,760	35,000	△5,240	
(1)修繕費	29,760	35,000	△5,240	・太々殿修繕費　17円80銭
				・本社水屋修繕小物代　1円56銭
				・井戸蛇口修繕費　40銭
				・玉垣額殿修繕費　10円
9)建設費追加	0	0	0	
(1)御即位記念建設費	0	0	0	
10)会議費	17,390	20,000	△2,610	
(1)氏子総代会議費	17,390	20,000	△2,610	・予算会議賄料　6円88銭
				・3回分会議賄料　10円31銭
				・会議使丁　20銭
11)庶務細則諸調費	0	10,000	△10,000	
(1)庶務細則調整費	0	10,000	△10,000	
12)御即位記念植樹費	0	0	0	
(1)御即位記念植樹費	0	0	0	
13)選挙費	0	6,000	△6,000	
(1)選挙費	0	6,000	△6,000	
14)予備費	0	6,000	△6,000	
(1)予備費	0	6,000	△6,000	
2. 積立金	46,835	55,000	△8,165	
1)基本財産積立金	46,835	55,000	△8,165	

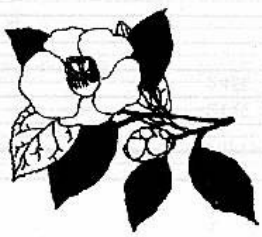
No.5

科目	本年度決算額	本年度予算額	比較増減	備考
	円　銭厘	円　銭厘	円　銭厘	
(1)基本財産積立金	46,835	55,000	△8,165	・神社所有田畑小作金　31円56銭5厘
				・神社収得金100分の5を
				基本財産積立　9円55銭
				・神社経費預金利子　5円72銭
				(大正2年より大正6年3月迄分)
合　計	692,760	781,017	△88,257	

右本年度残金　37円69銭4厘は、大正6年度へ繰越すこと

大正6年6月　　日　提出

郷社久伊豆神社社司　　池田吉兵衛



史跡めぐりの記録

第316回	茨城・城めぐり	平成15・7・11
第317回	越谷・大道遺跡	15・8・18
第318回	越谷・出羽の石仏	15・9・28
第319回	越谷・川柳町	15・10・19
第320回	紅葉の甲斐路	15・11・4
第321回	平林寺特別展	15・11・9
第322回	野火止用水・平林寺	15・11・16
第323回	新撰組と高幡不動	15・12・21
第324回	深川七福神	平成16・1・3
第325回	江の島・鎌倉	16・2・29
第326回	桃の里・古河	16・3・25
第327回	越谷・大袋	16・3・28
第328回	越谷・埼玉鴨場1	16・4・13
第329回	松戸・戸定邸	16・4・24
第330回	横須賀	16・5・30
第331回	岩槻・土俵の民俗芸能	16・6・20
第332回	横浜市、川崎市・卯之助の力石	16・7・16
第333回	足利	16・10・24
第334回	佐倉民博・平田国学	16・11・9
第335会	桶川宿と力石	16・11・28
第336回	房総の城と卯之助	16・12・16
第337回	下谷七福神	平成17・1・3
第338回	霞ヶ関界隈・増上寺	17・2・26
第339回	春日部	17・4・2
第340回	越谷・埼玉鴨場2	17・4・12
第341回	佐野界隈	17・4・28
第342回	越谷・大相模不動尊・鎮守三社	17・5・29

第三一六回　茨城・城めぐり

記録　水上　清

・日　時　平成十五年七月十一日(金)
・天　候　晴
・参加者数　百人
・案内者　西村　功

会員限定の暑気ばらいバスツアーは、二台で南越谷駅前を八時半に出発する。昨日までのうっとうしい梅雨空とはうって変わった中晴れの上天気、日差しがまぶしい。

約一時間で千葉県立関宿博物館に着く。利根川・江戸川の洪水と治水の歴史、水運の変遷と河岸産業の発達を学ぶ。

展望室から吊り下げられた高瀬舟の帆の大きさに驚き、蛇篭・揚げ船水塚(みづか)など洪水に対する人々の知恵に感心する。

展望室からは利根川・江戸川の流れや遠望を楽しむ。

猿島町・逆井城(飯沼城)へ向かう。戦国末期、北関東に進行を続ける後北条氏の最前線基地である。

自然の要害を巧みに利用した築城技法と広大堅固な遺構、復元された建物群……しばし戦国時代へタイムスリップ、雄大なロマンを肌で感じる。

お待ちかねの昼食は下妻市へ。人数の関係で一号車は「ます田」での「おでん定食」、二号車は「道の駅しもつま」の「そば定食」に分かれる。

ます田の二階上がる。おでん鍋に一斉に火が入り、一階からの温かい空気と太陽の熱射も加わり、二階はクーラーなど無いに等しい。

蒸し風呂での熱いおでん定食となる。

この辺りはかつて下妻三業地で大いに賑わっていた由で、あちこちに面影が残っている。

次に豊田城(石下町地域交流センター)を訪れる。

農民文学の名作「土」の著者アララギ歌人の長塚節(たかし)の旅姿の銅像・歌碑・豊富な展示資料が印象深かった。

水海道市の弘経寺で史跡めぐりは終わりになる。

次の予定もあり、駆け足で千姫寄進の本堂とその廟所に詣でる。

見学予定の内陣や千姫直筆の扁額が見られず、皆さん残念がっていた。

最後はアサヒビールの茨城工場見学と試飲で暑気を払う。

帰りの一時、激しい雨にあう。南越谷駅前に予定どおり午後五時半に無事帰着した。楽しい一日であった。

第316回　茨城・城めぐり　H15・7・11

第三一七回　越谷・大道遺跡

記録　佐々木義隆

・日　時　平成十五年八月十八日(月)
・天　候　曇
・参加者数　三十七人
・案内者　越谷市教委　学芸員　橋本　充史

朝、早く目が覚めた。晴れてほしいと願いながら窓を開けると、雨雲が空いっぱいに広がっていた。幸い雨は降っていない。雨具を用意して越谷駅に向かった。駅前広場には、谷岡会長ほか数人が集まって、いずれも天候を心配されていた。降雨となれば車の利用者が多い。「駐車場の確保が必要だ」ということで、役員の方と現場の香取神社方面に先行した。私たちは適当な駐車場を求めて付近をさがした。神社付近には、すでに十人ぐらいの会員が集まっていた。

そのうち集合時間になった。雨模様のためか、いつもより参加者が少ない。参加者はいずれも雨具を用意し、中には長靴姿の方もおられた。雨が降っても大丈夫、参加者の熱意がうかがえた。

神社境内で橋本氏から遺跡見学についての注意をうけた。遺跡発掘に至った経過、時代的背景、それに今回の発掘は二回目の調査などの説明があり、橋本氏の案内で遺跡の発掘現場に向かった。

現場は神社の東側間近で、大袋駅に向かう公道から北側の農家に通ずる私道に面した側の畑地の中にあった。畑地の奥と手前の二か所に、それぞれ一メートルぐらいの深さに掘り込まれた地点があり、いずれも前日の降雨で水たまりになっていた。水たまりの場所が竪穴住居跡とのことであった。水たまりの底に土器の破片様のものが露出している箇所も見られた。住居跡は調査中で、八月末日まで整理しながら作業をすすめるなどの説明をされた。

付近の広場で、調査済みの発掘品が卓上に展示されている。いずれも同類のもので、整理保管中の土器、漁業用石製おもり、土器類の破片、その他、使途不明の鉄と石の塊などである。考古学者の一人になったつもりで、一つひとつ手にとって、千二百年前の生活を想い浮かべながら、じっくりと観察させてもらった。

正午すぎ、橋本氏に感謝して解散した。秋の気配がする大道の里で、野道の隅に咲く、たで・にら・野菊などを目にして、平安時代の越谷の先住民の生活に触れた喜びと満足感を味わいながら帰路についた。

第317回　越谷・大道遺跡　H15・8・18

第三一八回　越谷・出羽の石仏

記録　須賀　弘

・日　時　平成十五年九月二八日(日)
・天　候　晴
・参加者数　一〇三人
・案内者　加藤　幸一

さわやかな秋晴れ。九時すぎ、新越谷駅西口より石仏めぐりに向かった。皆さん、元気に出発する。百人からの行列でかなり長くなる。

加藤氏の出羽堀由来、三ッ谷新田馬頭観音像の説明からはじまる。赤山街道の三ッ谷地蔵へ移る。昔は地元で信仰された地蔵様である。時折、車ですぐ脇を通るが気付かぬものだと、幾人もが話をする。これも歩いての勉強の成果だろうか。

四号バイパス七左歩道橋を渡った所にある三ッ谷稲荷で色々な庚申塔を見る。

三明院を訪ねる。同院は、越谷にただ一つ残る山伏寺院の修験道場になっている。

今泉住職から、明治以降、困難になった寺の歴史や修験道のお話を聞き、寺内を拝観する。

さほど広くはないが四季それぞれの植木が手入れされている。

観照院につく。この寺は、越谷の歴史に欠かせぬ会田家初代の開基した寺である。会田政重ご夫妻の座像がまつられている。

参道から三門まで多種多様の石仏石像が並ぶ。

加藤氏の解説は熱がこもり、聞くほうもひきこまれる。

三門の前に横に伸びた松の木が目をひく。三門と本堂の間、しばし、芭蕉の世界を思い浮かべる。三門も本堂もかなり古い。

「新しく建て替える考えはなく、補修はむずかしいが現状を保ちたい」との住職のお言葉を心に留める。

谷中の西福院に足をはこぶ。広い境内で持参の弁当をひろげてくつろぎの時間を過ごす。休憩後、市の文化財・円空仏不動明王三尊を拝観する。その他、貴重な色々の石仏があるのを知る。

そろそろ帰路になり、宮本町歩道橋を渡り、神明町会田家墓所を目指す。ここには歴代の墓石が並ぶ。金沢祐之の墓もある。

最後に神明橋を渡るとき、元荒川の土手に残る石が、神明社跡地の名残りと説明を聞き、一抹の思いがする。

神明橋を渡ると北越谷駅は近い。参加の全員、最後まで元気に行動され、無事家路についた。

おおぜいで楽しく歩き、新しい気持ちで石仏を拝むと、心身ともにさわやかになり、勉強になった。

第318回　越谷・出羽の石仏　H15・9・28

第三一九回　越谷・川柳町

記録　藪　高道

・日　時　　平成十五年十月十九日（日）
・天　候　　晴
・参加者数　　七十人
・案内者　　池田　仁

秋晴れに恵まれ、新越谷駅をバス二台に分乗して出発した。
コスモスが畑や田の畔に咲きほこり秋をかんじさせた。
十五代続く田中家に、樹齢三百年の天然記念物の楠を目にした。
武蔵国より、風雨に耐え、現在も雄大さを保っているのを見て感慨無量であった。
当日の気温は高く、途中の川柳公民館での一時休憩は格別なものであった。
見学した史跡は歴史を感じさせるものと、時代の変革によってそうでないものとの二とおりの受止め方があるように思われた。
これも時代の流れだろうか。
越谷に在住してから三十年余りになる。これ程の文化遺産が身近な所に、しかも多数あるとは思ってもみなかった。
同時に郷土における歴史を学ぶ上で奥が深く神秘的でエピソードなどに益々興味を持った。
当日参加された方々も郷土の歴史に一層の興味を持たれたと思う。
史跡めぐりの楽しさは出会いと、発見、文化にふれることができる楽しさでもある。
新しい自分自身をみいだしたような気持をもった。
今回の史跡めぐりを企画された方々にお礼をもうしあげたい。

第319回　越谷・川柳町　H15・10・19

第三二〇回　紅葉の甲斐路

記録　小泉平八郎

・日　時　平成十五年十一月四日（火）
・天　候　晴
・参加者数　七十六人
・案内者　宮川　進

夜来の雨はすっかり上がり、参加者の顔は秋晴れに見える。バス二台で南越谷を七時半に出発する。関越道を花園で降り、秩父路を荒川に沿って山中を進む。左右の木々が秋の陽光をあび黄葉、紅葉と錦織に輝き天然の美に歓声が聞かれる。

家々の周りには、花が咲きこぼれ庭の木はよく手入れされて豊な山里の営みが感じられる。大滝道の駅に着く頃には、快晴で暖かく澄みきった秋気が心地よい。

三峰山を左に中津川ループ橋を渡り、雁坂峠のトンネルを抜け出ると、甲斐の国に入る。黄金色の唐松の山々が広がり、桃源郷に迎えられる。笛吹川を下ると、塩山の恵林寺に着く。十二時前なので先ずは腹ごしらえ。境内の一休庵で名物精進料理の「ほうとう」「ごま豆腐」「もみじ麩と蕪の酢のもの」「瓜の浅漬」に舌つづみ。

恵林寺の赤門より参道を歩く、杉の古木に銀杏、楓や桜紅葉が映え見事な景色に一同みとれる。

心頭滅却で有名な楼門の棟に武田菱が堂々の貫禄を示す。

宝物館では風林火山・諏訪神号旗が戦国時代の甲冑・軍扇・武具と共に往時の武田軍団をしのばせる。大本堂裏に名勝指定の夢窓流庭園が広がり、石組の枯山水と心字池の配置など禅の世界にさそわれる。

放光寺では住職の案内で、国指定重要文化財の大日如来像ほか仏像を拝観、武田軍が戦さに使った釣鐘や、農民衆が雨乞祈願に使用した引きずり木像仏も興味があった。寺の近所には、柿がたわわに実り、農家の軒先には干柿のすだれが並ぶ。

甲斐の善光寺は、信玄が造り家康と柳沢吉保が守ったとか、一同足早に、大伽藍内で鳴龍、胎内めぐりの参詣をすませる。

武田神社は甲府盆地を見下す居館跡に、大正八年に造営された。神域は苔むした石垣や土塁、深い堀がめぐらされる。

境内は茂った森の中にあり、参道の散り紅葉はきれいである。

秋の日は早や暮れなずみ、四時半に帰路につく。

第320回　紅葉の甲斐路　H15・11・4

第三二一回　平林寺　特別展

記録　伊藤　靖二

・日　時　　平成十五年十一月九日（日）
・天　候　　曇
・参加者数　　二十七人
・案内者　　古澤　孝

今回の史跡めぐりは、埼玉県立博物館で開催中の「平林寺」特別展である。

越谷駅集合、当日は衆院選も重なりながらも二十七名が参加する。常連さんの話がはずむ。

越谷から大宮公園駅と短い道中でも、皆さんは資料を開き、心が早や特別展へと、十一月十六日の平林寺の事前勉強に入っている。大宮公園駅より博物館へとつい歩みが早くなる。

博物館に入り、今日の案内者の古澤さんより特別展の見所など資料で説明がある、皆さん一生懸命にメモを取り、目が輝いていた。

特別展に入場し、古澤さんの説明で文化財を拝見した。

仏像・仏画・墨跡・梵鐘など寺宝を何度も見る。

特に十六羅漢像は「怖い顔の羅漢さんね」と皆さんが言っていた。

常設展示室に集り、縄文より現代までのくらしを文化係の説明にききいる。

都幾川村の慈光寺の国宝「法華経一品経」など宮川さんの説明をきく。地下の展示室では、野のほとけ、日本最大の板碑を見る。

「こんなに大きな板碑だったかね」と皆さん長瀞のライン下りに行った時に見たと話し合っていた。

庚申塔・道祖神・五輪塔などふたたび勉強し、みんな夢中になって説明にききいっていた。

いつも大勢さんの参加、皆さんほんとうに勉強家の集まりで頭が下がります。

十二時ごろ自然解散になる。ありがとうございました。

第321回　平林寺特別展　H15・11・9

第三二二回　野火止用水・平林寺

記録　小林　光男

・日　時　平成十五年十一月十六日(日)
・天　候　晴
・参加者数　六十一人
・案内者　古沢孝

雨上りの日曜の朝、好天気を予感しつつ集合場所の新越谷駅東口広場へ急いだ。

手にした本日の充実した資料におどろきの声があがる。

過日、行われた県立博物館での平林寺宝物展の話題が飛び交う。

新座駅に到着する。本日の案内役の古沢氏から資料の説明と道中の注意があった。

「元気の出る町づくり、今年は野火止用水開削３５０年です新座市」の大きな横断幕を見上げる。二色の小旗に守られて歩き始めた。

平林寺をめざし野火止用水に沿って境内林を見ながら、左に折れるコースをとる。緑道や雑木林が行く手に待っているはずだ。

ホタル飼育池をすぎる辺りから景色は黒々とした土になり、人参・白菜・キャベツ・里芋の野菜畑が広がった。

「越谷には無い風景だなあ」の声に足が止まる。

先頭を行く古沢さんは、時折、歩を止めて振り返って下さる。

農家の無人スタンドをのぞく人もいた。

新座市総合体育館の木漏れ日の下で十五分の休憩をとる。

平林寺堤に沿って進み、正午に総門をくぐって、金風山平林寺に入山した。

十三万坪という平林寺の広大な境内には、杉やヒノキなどの針葉樹が天に伸び、コナラやクヌギの落葉樹が一面に茂っている。

静寂こそが肝要という禅刹。禅宗伽藍は閑静にして質素そのもの。物見遊山の客にはそっけない風情に思えるが、思索にふけるにはもってこいの場所と独り感じ入ってしまった。

境内の史跡などの見学の後、下山した。四時過ぎ南越谷駅に帰着した。

小春日和の一日、皆様、有難うございました。

第322回　野火止用水・平林寺　H15・11・16

第三二三回

新撰組と高幡不動

記録　柿沼　孝行

・日　時　平成十五年十二月二十一日（日）
・天　候　晴
・参加者数　八十四人
・案内者　水上　清

本年最後の史跡めぐりとなる。風もなく最高の行楽日和である。史跡めぐりは十五回目だ。毎回、天候に恵まれ全て晴れ日（よほど会員の心がけが良いと感謝する）。

バスで日野駅前へ向かう。高速道路を走るバスの窓から富士山がくっきりと美しく見えた。

日野駅前に着く。徒歩で土方歳三ゆかりの八坂神社ー大昌寺ー佐藤道場など拝観する。

モノレール甲州街道駅より満願寺駅へ移動する。車窓より山並や富士山がきれいに見える。

雲一つ無く見晴らしは最高である。気分は爽快、満願寺駅に着く。

徒歩で土方歳三資料館へ入る。普通の家の一部が資料館であり、最初は一寸ア然、しかし、内容は豊富である。

つづいて歳三の墓のある石田寺（さるでんじ）を詣でる。この付近は土方姓の家が多い。

満願寺駅より高幡不動駅へ行く。不動尊前の「開運そば」店で昼食をとる。食後一時間ほど高幡不動尊境内自由に散策する。

丁度、毎月第三日曜日に行われている「ござれ市」（古民具・骨とう品・アンテーク・古着など古い物なら何でも売買）開催中で、百二十の出店は見ていて飽きない。案内僧の説明で奥殿・大日殿を拝観する。

不動尊より移動し近藤勇の菩提寺・龍源寺と勇の生家跡を見学する。

その後、バスで深大寺へ向かう。

寺内は日が暮れて薄暗くなっていたが、本堂と元三大師堂などを大急ぎでめぐった。

ほぼ予定どおり南越谷に帰着した。

案内の水上氏、関係者一同様ありがとうございました。

独りでは、なかなか行けない場所に参加でき、有意義な一日を過ごせ感謝します。

第323回　新撰組と高幡不動　H15・12・21

第三二四回　深川七福神

記録　藤川　吉洋

・日　時　平成十六年一月三日(土)
・天　候　晴
・参加者数　九十七人
・案内者　西村　功

快晴で春のように暖かく気持ちのよい朝である。地下鉄門前仲町駅で下車する。駅に置いてあるパンフレット「深川七福神めぐりガイドマップ」を取り準備がととのう。駅から一歩でた所が「深川不動堂」の参道となっており、一気に参詣気分となった。深川不動尊の広場でスケジュールを含めた西村氏の全体説明の後、深川七福神めぐりに出発する。

①恵比寿神(富岡八幡宮)　境内は広く楽に歩ける。神殿前で獅子舞に遇う。女性ばかり八人のグループとのこと。獅子舞の実物を見学するのは何年ぶりか。幸先良し。

②弁財天(冬木弁天堂)　巻西橋通りに面した小さなお堂である。そこへどういう取り合わせか「深川七福神めぐりと横浜中華街での昼食」と称するはとバスと合流し、更に混雑する。

③福禄寿(心行寺)　境内は案外広くお参りしやすい。おでん・酒の屋台がある。暖かくて買う人はほとんどいない。

④大黒天(円珠院)・⑤毘沙門天(龍光寺)　この地域には芭蕉をはじめ史跡が多い。更に寺院が多く、寺町の雰囲気がある。先の戦災ですべてが焼けた筈なのに、こんなに沢山の寺院を再建させた市民の信仰心・団結力の強さに感心する。

⑥布袋尊(深川神社)　町会によって管理されている小さな無住社である。それだけに町内全員が協力し合い神社を守っている熱意が伝わってくる。道路にテントを張り、机・椅子を置き、お茶の接待をしており、気持ちよくお茶を頂き、ひと休みする。

⑦寿老神(深川神明宮)　深川で最古の神社だけあって境内はまずまずの広さもあり、参詣する人は多い。しかし、深川という地名の発祥の地が今では「森下」という。一寸残念である。

百人の団体が狭い歩道を歩けば、長さは百メートルになる。正月だけに車も人も少なく、他人に迷惑をかけずに無事に参詣できたのは幸いであった。深川神明宮で解散する。

第324回　深川七福神　H16・1・3

第三二五回　江の島・鎌倉

記録　三原　紀子

・日　時　平成十六年二月二十九日(日)
・天　候　小雨　強風
・参加者数　九十五人
・案内者　宮川　進

前日までは晴天だった。今日はどんよりして今にも降り出しそうな中、南越谷駅を出発する。東京駅からアクティに乗車し、藤沢駅で小雨の中、江ノ電に乗り換え江ノ島駅へ向かう。

雨と強風の熱烈歓迎を受けつつ、江の島までの長い橋を渡る。

さざえの壺焼きの香りだけ吸い込みながら江島神社の鳥居をくぐる。

辺津宮(つつのみや)の弁天堂へ入る。堂内には日本三弁財天のひとつ「裸弁財天」と八本腕の「八臂(はっぴ)弁財天」の二体があった。

琵琶を抱えた裸弁財天は思ったより小さく愛らしい姿だった。

腕が八本なら、髪を解かしながら、食事をし、服を着て…など思いつつ、長いエスカレーターを乗り継いで奥津宮へと向かう。

神門天井の八方にらみの亀を逆にらみする。

奥津宮の手前に卯之助の力石があった。今年は越谷生まれの日本一の力持ち三ノ宮卯之助没後一五〇年にあたる。

当会の水上清氏が平成一〇年、卯之助の力石であるのを発見した。

しらす丼が名物とのことだが、荷物を軽くするため、持参のおにぎりで昼食をすます。沿道の土産物店をひやかしながら坂をくだる。

またも風に吹かれて江ノ電で隣の腰越駅で下車し、満福寺につく。

源義経が、鎌倉入りを止められ滞在したとのこと、弁慶の手玉石の大きさに比べ、義経の腰掛石の普通の大きさに弁慶の身長・体重を知りたくなる。

「新田義貞・太刀投げ」の稲村ヶ崎へ。七里ヶ浜の磯伝いで有名な「鎌倉」と、「真白き富士の嶺」を参加者全員で歌う。

加藤氏、なかなかの美声である。砂嵐に送られて鎌倉駅へ向かう。

鶴岡八幡宮の手前の駐車場の奥にも卯之助の力石が二個あった。

小町通りの散策では、鳩サブレーを土産に持つ人が多い。

横須賀線の中では疲れたのか、いねむり姿もちらほらする。

「こんなに歩いたの初めて、へとへと」と、今回初参加の女性は日ごろの車利用を反省している様子だった。

強風でマイクの声は、今一つでしたが、いつもながら宮川氏の博学多識とユーモアたっぷりの説明に心から感謝いたします。

第325回　江の島・鎌倉　H16・2・29

第三二六回　桃の里・古河

記録　田中悠紀男

・日　時　平成十六年三月二十五日(木)
・天　候　曇
・参加者数　六十八人
・案内者　水上　清

三月にしては暖かい。一班は黄リボン、二班はリボンなし。利根川を渡って、古河駅に着く。

柔かい日差しのなか、町並みを少し歩いて、国道四号(旧日光街道)で古河市の古い町なかの説明を水上氏から聞く。国道四号より横に入ると、城下町の趣きが現れる。

私の生れた田舎は城下町、お城は堀に囲まれ、柳が垂れ、今は観光の屋形船が通っている。そこを横に入ると武家屋敷があり、お寺が多い。静かなたたずまいだ。

坂長本店さんに着いた。室内や千年杉の座卓は、今にない歴史を感じさせる。保存するのも、それを維持するのも大変な努力が必要なことが理解される。そのままでは瓦解が進む。

古河城御茶屋口から乾門、そして古河藩使者取次所址などの説明を水上氏より聞く。階級社会の格式とか厳しさが感じられた。史跡の維持や案内板に心配りが見られ、見学者には有難く思われる。

古河歴史博物館には河口新任・鷹見泉石・土井利位の業績が展示され、御三方ともに年代が前後しており、このころの古河地方の民度は高く、豊かさもあったのであろう。

一朝一夕では育めない文化である。

古河総合公園に着く。園内で三三五五昼食を摂る。

食後二千本の桃花を愛でる。曇りの多い空では映えない。晴天の日に今一度見に来ることにする。その時は、紅・白・真紅に一重・八重の花が一段と賑わいを見せるだろう。

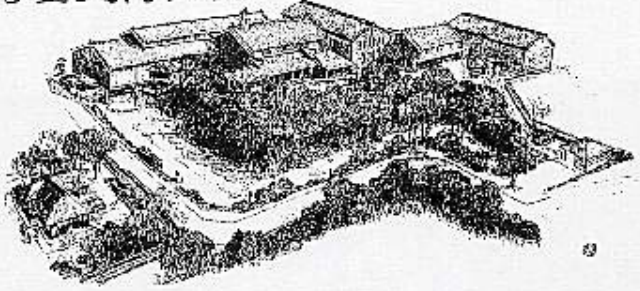
五代で廃絶した足利氏の古河公方館跡や旧家を見学する。

渡良瀬川沿いを歩く。頼政神社・雀神社を水上氏に熱心に説明していただく。古河駅まで歩き、越谷駅で解散する。

自宅に着いた時の歩数計は二万三四五〇歩を示した。

旅を楽しみながら生涯学習、そして体力維持を求めて感謝!!

古河歴史博物館



第326回　桃の里・古河　H16・3・25

第三二七回　越谷・大袋

記録　永井　勇雄

・日　時　平成十六年三月二十八日（日）
・天　候　晴
・参加者数　九十五人
・案内者　加藤　幸一

昨日までの風・雨・寒さに悩まされた天候とはうって変わった上天気の下、百名近い会員が大袋駅東口に集合する。折から桜は開花の速度を上げ、花見気分が加わった。参加会員の顔は明るい。足取りも軽そうである。

加藤氏の引率の下、コース案内図に従い、最初の見学地・袋山薬師堂に向け出発した。

同地では、往時の元荒川の流域の説明がなされた。現在の市街地の様相からは、想像し難いコースをとっていたこと、現在、我々が住んいる越谷の一部が、下総国、現在の千葉県に属していたことの説明を受けると、会員の間で一様に驚きの声と表情が漏れたのが印象的であった。

香取神社では島村元市長から千間台の地名由来の裏話について、関係者でなければ知り得ない実情を、一同興味深く拝聴する。

大袋地区の狭い道路に、百人の人数が一斉に移動するにあたり、役員は、人の往来・車両の通行に支障ないよう苦労されていた。勢至堂では、近隣の居住者から説明の拡声機の音量が大き過ぎる、との苦情を受ける一幕もあった。

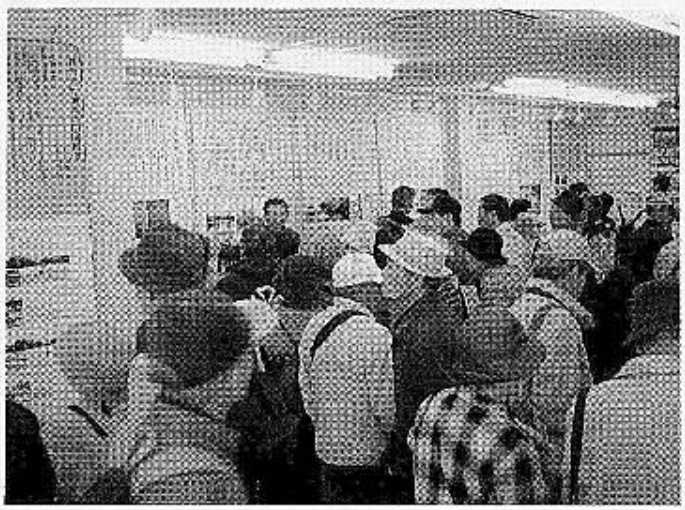
渡辺家のご好意により、同家の古文書・系譜の原本を見せていただく機会を得たことは、この上ない幸運であった。

細沼家の屋敷周りの囲い塀跡からは、往時をしのぶことができた。

私たちが住んでいる身近な場所に、歴史的な史跡があることを今回の史跡めぐりがなければ接することができないし、存在さえ知らないところであった。

同時に、貴重な史跡が保護されることなく、放置されている実態を知り、その保護対応策が早急に取られる必要性があることを感じた。

最後に大袋ギャラリーに到着、加藤氏より、同ギャラリーの展示内容の説明を受けた後、解散した。



第327回　越谷・大袋　H16・3・28

第三二八回　越谷・埼玉鴨場１

記録　岩瀬　静江

・日　時　平成十六年四月十三日（火）
・天　候　曇
・参加者数　四十人
・案内者　増岡　武司

くじをひきあてた幸運な四十人が、北越谷駅に集合しました。鴨場に着いたとき、市役所の方が待っていて下さり、禁煙、撮影禁止などの注意事項を聞いてから場内へ入りました。

広い芝生、四阿、ポプラの木、前回には気付かなかった満開の桜が目に入りました。

左側には食堂があります。右側の建物では「新浜鴨場」のビデオを鑑賞しました。

一日に二度、コンコン、コンコンと木を叩く合図で餌付けされた合鴨につられて引堀から引堀に、右往左往する鴨は駅のラッシュアワーを見るようで、可愛くておかしいようでした。

捕獲された鴨は保護条約により、すべて標識をつけて放され、ロシア・アメリカ・カナダなどで捕らえられた記録から十年、十五年も生存が確認され、なかには二十年以上も生きた鴨もいたといいます。小さな渡り鳥の力強い翼、肉体には恐れ入りました。

隣には応接セットが配置された部屋が二つあり、壁際のガラスケースには、鴨類・鷺類・鳶・鷹などのはく製が飾られていました。

建物の脇を通って池へ向かいました。南北に引堀が十七か所あり、小屋の透き間から池がのぞけるようになっています。

いまは島に数羽の合鴨がいるだけです。

餌とおとりの合鴨につられて引堀に入ってきた鴨が、気配に驚いて飛び立つのを両側から、さで網で捕らえます。

狐をする日の風向きで引堀を決めるそうです。

食堂も見せていただきました。

鏡のついた大きな暖炉が、三つもある広い食堂、なげしには百五十七の鹿の角が二段三段に飾られていました。

見学のあと、「ホット越谷」では、お話やクイズまでありました。

増岡理事さんのお骨折りで、楽しい日になり、有難うございました。

第328回　越谷・埼玉鴨場１　H16・4・13

第三二九回　松戸・戸定邸

記録　堀川　静二

・日　時　平成十六年四月二十四日(土)
・天　候　晴のち曇
・参加者数　九十二人
・案内者　西村　功

前日までの暖かさは、一変して肌寒くなったが早朝から快晴である。南越谷駅に集合した参加者は百人近い多人数である。

松戸駅に着く。近代的に整備された駅前広場はさながら大都会の雰囲気で、史跡めぐりにはそぐわない感じである。

駅に程近く松戸神社があった。ビルに囲まれた狭い境内に静かに鎮座される神社に参拝する。ご祭神は日本武尊で、松戸宿の鎮守として多くの崇拝を受けている古社である。

寒さはやや和み、風も次第にやわらいだ。なだらかな台地上にある戸定が丘公園までは間もない距離である。

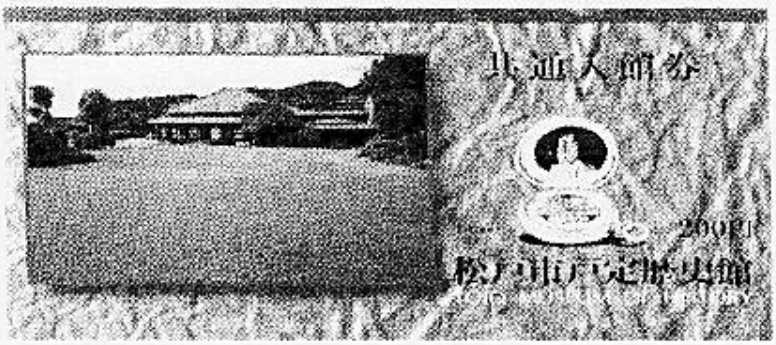
公園入口には水戸の西山荘を模して作られたというかやぶきの門があり、静かなたたずまいをみせていた。

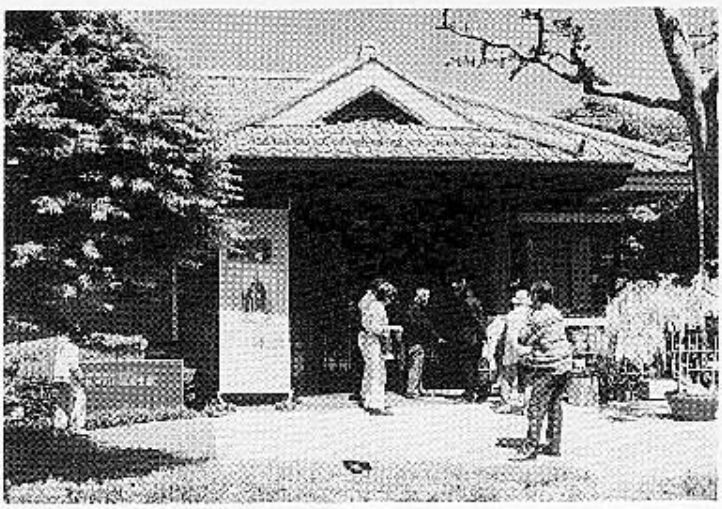
この公園は県の文化財として名勝公園に指定されており、園内に戸定邸と歴史館がある。

歴史館入口で係員から概要の説明を受け、二班に分かれて見学することになった。

戸定邸は徳川昭武が、明治十七年に建てた邸宅である。芝生のフランス式庭園を取り入れた和洋折衷で、フランス留学の経験や明治後期の流行の影響を受けている。

建物の西側は江戸川を見下ろし、遠くには富士山が望まれる。ボランティアの熱心な説明を受け、明治の華族社会をしのぶことができた。





歴史館は、昭武の遺品を中心とする徳川家の伝来品の展示館である。見学を終わって芝生の庭園で昼食をすませ、通路に配された満開の鉢植えの藤を鑑賞しつつ、戸定邸をあとにした。

浅間神社へ向かう。この神社の本殿は、標高二十メートルほどの円形の独立丘陵の山頂にあり、長い石段を登って参拝する。神域一帯はタブの木などの自然の植相で県の天然記念物に指定されている。

最後の千葉大学園芸学部は、独立した学部としては全国でここだけとか。土曜日のため学生の姿はなく、静かな庭園など見学できた。

見学を終えて松戸駅に戻り、現地解散となった。

第329回　松戸・戸定邸　H16・4・24

第三三〇回　横須賀

記録　渡辺　和照

・日　時　平成十六年五月三十日(日)
・天　候　晴
・参加者数　八十一人
・案内者　宮川　進

気象情報では、雨または曇のち晴でした。一転して晴天のスタートとなりました。

横須賀中央駅より、九州宮崎をおもわせるフェニックスの並木通りをすぎ、三笠記念艦に到着しました。

日露戦争の映画鑑賞のあと、艦内を見学しました。

艦内、艦外で昼食をすませ、「ペリー記念碑」へ向かいました。

五月末日にしては真夏をおもわせる暑さの中、全員、元気に約二十五分間、歩きとおしました。

ペリー記念碑と記念館を見学のあと、路線バスで「燈明堂」へと進みました。

全員が、一台の路線バスに乗れたことは、驚きであり貴重な体験でありました。

燈明堂は、現在の燈台で、海上安全の道しるべとして設置されたことに、皆さんは感心されておりました。

海岸にはバーベキューや海水浴を楽しむ人たちも来ており、幾人かの会員は、裸足になり初夏の海遊びをする光景が見られました。

史跡めぐりは終盤となりました。「常福寺」では、ご高齢の住職の案内により、本堂とりつぱな庭園を拝観しました。

「西叶神社」では、願いが叶ういわれがあるそうで、会員の熱心な参拝風景が見られました。

一人の事故もなく無事、越谷に到着しました。

電車とバスの移動、二万歩以上の旅でしたが、全員、疲れも見せず名残りつきない解散となりました。

記念艦三笠のゆらい

三笠は日露戦争中、東郷平八郎大将が指揮する連合艦隊の旗艦で、明治38年5月27日の日本海々戦において、ロシアの遠征艦隊38隻を全滅する偉功をたてて日本の独立と安全を確保し、その後日本が躍進する基礎を作った記念すべき当時の最新鋭の戦艦です。

日本海々戦の勝利はアジア諸民族の自覚と独立を促し、世界史の転換期を作ったといわれますが、この大事業をなしとげた日本民族の誇りを長く後世に伝えるため、大正15年三笠は記念艦としてこの地に据えられました。

世界の三大記念艦としては、三笠のほかに英国のビクトリー、米国のコンスティチューションがあります。

財団法人　三笠保存会

建造特要目		三笠の略歴	
排水量	15,140㌧	進水	明治33.11.8
速力	18節	黄海々戦	〃 37.8.10
主機	30㌧缶×4	日本海々戦	〃 38.5.27
副機	15〃×14	記念艦	大正15.11.12
補助缶	8〃×20	復元	昭和36.5.27

第330回　横須賀　H16・5・30

第三三一回　岩槻・土俵の民俗芸能

記録　西村　功

・日　時　平成十六年六月二十日（日）
・天　候　曇のち晴
・参加者数　四十五人
・案内者　宮川　進

「輪のちから土俵の民俗芸能」という埼玉県内の土俵にちなんだ民俗芸能を県立民俗文化センターで鑑賞しました。

保存会の沖田会長の流れるような解説で、ビデオと実演がありました。

● 川口市安行原蛇（じゃ）作り

江戸時代から、豊作祈願と悪病退散のために、長さ十メートルほどの大蛇をわらで作ります。村境にある大ケヤキに掛け、一年間、村を鎮守してもらいます。大切な蛇作りが終わると、百万遍の行事にうつり、円周が八メートルの大数珠を皆でもみあって、しんの麻糸が切れると、その年は豊作といわれています。最後に手締めをして、すべて行事が終りとなります。

● 鉤上（かぎあげ）の古式子ども相撲土俵入り

こども土俵入りは、全国でも珍らしい行事だそうです。小学一年生から六年生までの男子が各家の紋・名入のまわしをつけ、取組前の天長地久を祈り、邪気をはらい、地を清める儀式の土俵入りを極端に様式化した芸能です。

かわいいお相撲さんたちに拍手喝采でした。

● 深作ささら獅子舞

土俵の中で、大獅子と中獅子が牝獅子を取り合い、その中に天狗が入り、獅子たちをだますなどの掛け合いで、獅子たちは、それぞれ小太鼓を身につけて打ち鳴らし、土俵いっぱいあばれまわる勇壮で活発な舞に魅せられて、四十分はあっというまに過ぎました。

民俗文化センターを出たとたん真夏を思わせる太陽のもと、岩槻の浄国寺へ向かいました。このお寺は、天正十五年、ときの岩槻城主大田氏房の発願により建立され、浄土宗関東十八檀林の一つになった格式の高い寺院です。江戸時代の岩槻城主であった阿部氏の墓所もあり、そこに詣でました。

民俗芸能を見終った後は、最近になくすがすがしさを感じさせられたよい一日でした。

第331回　岩槻・土俵の民俗芸能　H16・6・20

第三三二回　横浜　川崎・卯之助の力石

記録　古澤　孝

・日　時　平成十六年七月十六日（金）
・天　候　晴のちにわか雨
・参加者数　八十人
・案内者　水上　清

連日の猛暑にも負けず元気な足取りで、おなじみの顔が揃いました。観光バス二台は、南越谷駅を出発した。朝の車のラッシュの高速道路を走り、横浜ベイブリッジを渡ると、車窓の左側はコンテナークレーンと倉庫群が立ち並び、右側には「みなとみらい21」のホテル、ビルなど、横浜らしい風景を眺めながら山田神社に着く。

うっそうとした木々の間の石段を百段ほど登ると本殿があり、奥の竹林の前に力石と由来碑が並んでいる。力石をなでながら卯之助をしのび、カメラにおさめた。本殿の一間社流造と精巧な彫物の調和がすばらしい。

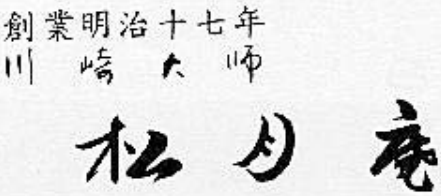
竹藪の山道を登った森の中に古い型式の杉山神社がある。力石が一個、卯之助の切りつけがはっきりと読め、うなずけた。

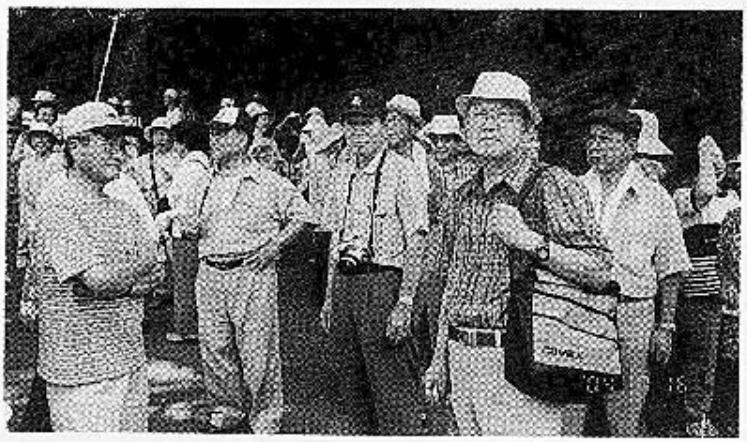
綱島街道より切通しの坂道を登ると諏訪神社の本殿がある。東参道をくだった鳥居の横に卯之助の力石が、二個が立ち、二個は横になっている。会員は力石の由来や、卯之助の説明板を見入っていた。

川崎大師（平間寺）に一時間ほど遅れて着き、老舗松月庵で名物のそば、天丼、くず餅を賞味し、急ぎ足で大師を参拝した。力石は五個が横ならびとなり、左端の一個が卯之助の力石であった。

若宮八幡宮には、力石の碑を十個の力石が囲むように並び、左側の奥に横になっているのが卯之助の力石であった。

キリン横浜ビアビレッジへつく。案内嬢の工場説明もそこそこに、試飲コーナーで冷たい生ビールで一息つき、暑気を払う。南越谷に無事到着。暑い中での楽しい史跡めぐりであった。





第332回　横浜市、川崎市・卯之助の力石　H16・7・16

第三三回　足利

・日　時　平成十六年十月二十四日（日）
・天　候　晴
・参加者数　五十一人
・案内者　菅波　昌夫

記録　林　和江

秋晴れの気持よい朝、足利へ向いました。渡良瀬川にかかる中橋を渡ると両側の河川敷がきれいに手入れされて、心安まる眺めでした。清く澄んだ流れの中に大きな鯉が悠々と泳いでいるのが見られました。普段は見られない眺めに思わず笑みがこぼれました。

足利美術館に着きました。足利学校展最終日で賑わっていました。足利学校の須永先生より概略の説明を受けて館内を見学しました。「学びの心とその流れ」がテーマになっています。

足利は織物の町といわれ、「まちなか遊学館」では色々な機械の実演があり、皆さん、熱心に説明を聞いていました。

足利学校では熱心なボランティアの説明を一時間ほど聞きながら見学しました。「自主自学」「自給自足」で生活していた由、改めて昔の人々の努力がしのばれました。

鑁阿寺境内で昼食をとり、よい天気で皆さんと楽しい一時を過しました。

「本堂は約八百年の間、火災にあわず大修理が行われただけで、現在まで、その姿をとどめている」との住職のお話がありました。

大日堂または大御堂とも呼ばれています。

法玄寺は北条時子（北条政子の妹）にまつわる悲話があります。その墓が昭和六年に発見され、俗に「お姫子様」と呼ばれています。

万鏡峰を借景とした長林寺の本堂に万鏡峰と書かれた扁額が掲げられていました。

帰りに、「うしろに織姫神社が見える」と加藤氏が教えてくれました。山腹に色あざやかに緑と朱の美しいお社があり、皆さんは感嘆の声をあげ見とれていました。

土手の道は足に優しく、ほほをなでる風も心地よく、疲れもなごみました。足利駅で解散となりました。改めて、菅波氏をはじめ、お世話いただいた方々、本当に有難うございました。

第333回　足利　H16・10・24

第三三四回　佐倉歴博・平田国学

記録　中村　幸夫

・日　時　平成十六年十一月九日（火）
・天　候　晴
・参加者数　三十八人
・案内者　宮川　進

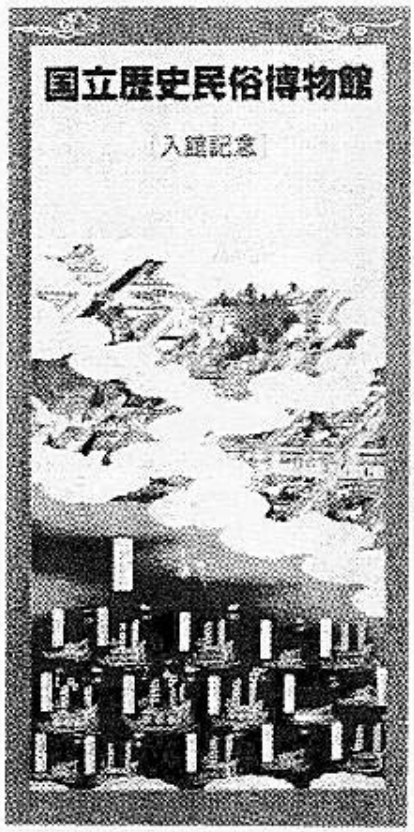
さわやかな秋空のもと、佐倉へ向け出発する。意外に早く到着した。まちなかを歩くこと十分、前方の小高い丘の木々の上ににょっきりと「歴博」と書かれた目的地を見つける。期待に胸が高なる。途中、近頃めずらしいわらぶき屋根の民家、佐倉城の外堀、昔なつかしい赤いポストに迎えられ「歴博」へ到着する。さすが国立博物館。佐倉城址の一画の広々とした敷地に近代的建物が偉容を誇る。

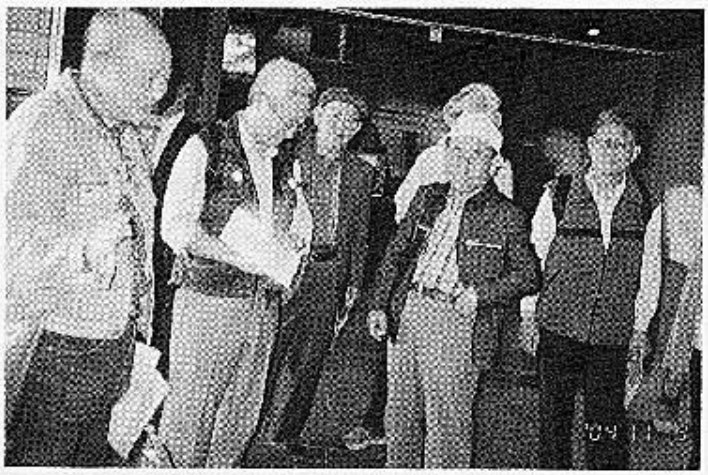
ボランティアの方のご案内で今日の目的の「明治維新と平田国学の展示」を観賞する。平田篤胤については妻おりせとのかかわりでこれまで図書館・公民館などの歴史講座で何回か耳にしてきた。今回、篤胤・鉄胤・延胤三代にわたる活動の歴史を、時代の推移と共に判りやすく説明していただき勉強になった。

改めて平田国学の明治への影響を強く感じた。ただ、篤胤と越谷のかかわりについては「文政元年、山崎長右衛門を親元として後妻をもらう（のち織瀬と名乗る）」との説明程度では残念だった。

平田国学の展示観賞のあと、常設展示館をかけ足で見学した。第一から第五展示室に分かれ、古代縄文時代から近代まで興味深い展示品が数多くあった。一つの展示室を見るだけでも一～二時間はたっぷりかかりそうだ。別の機会に出直したい。

館内一巡後、佐倉城址公園を散策する。澄んだ青空、黄葉・紅葉の中、落葉を踏みしめて一ノ門跡・本丸跡などをめぐり、越谷への帰途についた。





第334回　佐倉民博・平田国学　H16・11・9

第三三五回　桶川宿と力石

記録　飯塚　英志

・日　時　平成十六年十一月二十八日（日）
・天　候　晴
・参加者数　五十一人
・案内者　桶川地域文化研究会

桶川は、昭和四十年代、開発され始めた一連の東京のベットタウンと思っていました。駅前通りや、旧中山道のメイン通りは、いまでも個人商店が賑わっています。宿場町の雰囲気を多分に残し、朽ちかかってはいるが明治・大正風の建物があちこちにあり、意外な思いでした。

桶川宿は上木戸から下木戸まで約一キロ、旅籠三十六軒の中規模な宿であったようです。現在も残る座敷構えある本陣やまだ旅籠の武村旅館、宿の繁栄を支えた紅花商の土蔵など、貴重な建物があります。

徳島の藍、山形の紅花はよくいわれますが、桶川の紅花は知りませんでした。

今回の史跡めぐりの、もう一つのテーマの力石は桶川稲荷にありました。大盤石・卯之助のきりつけがあり、確かに大きい石でした。他の石でこれほどのものはないようです。卯之助が日本一の力持ちの根拠らしい。案内の方の話では実測六百十キロとのこと。手で揚げたか、足で揚げたかと、推論はあるようだが、先ず無理なのでは、と感じました。

きりつけの世話人欄に紅花商の名があり、当時の豪商の心意気のあらわれとして江戸一番の卯之助を大枚で招き、桶川を誇示したのでは、と想像しました。

その意味からも卯之助は日本一の力持ちの裏付けになります。

同研究会は、市内力石調査のなかで高崎氏との交誼からお世話下さった皆さまです。皆さま、市のボランティア案内員の資格をお持ちで、深い知識と慣れた話り口で、楽しく聴かせていただきました。昼食場所の設営、お茶、香の物差し入れ、昼休みを利用した質疑応答の場を設けるなど、親身な応対を頂き、有難うございました。

第335会　桶川宿と力石　H16・11・28

第三三六回　房総の城と卯之助

記録　西田　烝

・日　時　平成十六年十二月十六日（木）
・天　候　晴
・参加者数　七十三人
・案内者　西村　功

今年は暖冬異変だ。十二月になっても暖かい。本日は快晴。南越谷駅前をバス二台に分乗して最初の目的地である千葉城に向け出発する。いつものツアーより男性が多く見受けられる。首都高、中央環状、湾岸道路を経て進む師走の平日、しかも出勤時間帯と重なってバスはなかなか先に進まない。

やっと千葉城に到着した。往時、本丸に天守閣はなかったとされるが、現在、鉄筋造りで郷土博物館となっている。かつての城郭の「縄張り」に住宅がぎっしりと押し寄せていて、現代の史跡の保存の問題点を垣間見る思いがした。しかし、鉄筋造りの天守閣を後世に伝えようとする地元の人々の努力が何故か微笑ましい。「観蔵寺」で卯之助の「力石」をみる。江戸の力石が何故ここ木更津にあるのか？力石のミステリーだ。これで午前の部は終わった。

木更津港近くの富士屋ホテルで、途中の交通渋滞でロスした時間を取り戻すため、急いで昼食をとる。

午後は房総半島の中心部に位置する二つの城をみる。久留里城は戦国時代の典型的山城で堅城だ。復元天守閣よりの眺望はすばらしい。紅葉の時期は過ぎているが、隣接する山々の稜線が美しい。

大多喜城は本丸跡に城郭様式の県立博物館が建つ。徳川家康の関東入りの際、当時、騒乱の続く房総一帯の押えとして家康の命で、本多忠勝が十万石で入封した。近世城郭の縄張りは堂々と見えた。

天守閣を一巡して空を見上げると、まさに暮れかかる西の空に鎌状の月がかかっていた。

これで本日は予定無事終了。バスツアーを企画された方々に感謝します。

第336回　房総の城と卯之助　H16・1

第三三七回　下谷七福神

記録　加藤　幸一

・日　時　平成十七年一月三日(月)
・天　候　晴
・参加者数　八十四人
・案内者　西村　功

快晴のもと越谷駅に集合しました。郷土研究会の行事に初参加の方が十人ほどおられました。

三ノ輪駅で下車して、最初は下谷七福神めぐりの布袋尊(寿永寺)に参詣しました。境内には大きな石の布袋様がどっしりと安置されていました。到着するとご朱印窓口へ直行する方もいました。

二番目は、「飛び不動」で知られる正宝院を訪れて恵比寿神を参拝しました。

三番目は、国際通りを横切って弁財天(弁天院)に行きました。ここは、「水の谷(や)の池」があって通称「朝日弁天」といい、上野の「不忍の池」の「夕日弁天」と対になっていましたが、関東大震災のあとに震災の残土で埋められてしまったそうです。地元の町内会の婦人部の方々がお茶の接待をしていました。本堂は地元でお守りしていて、普段は閉まっていて中が見られないそうです。

昭和通りを横断し、小野照崎神社に立ち寄って富士塚と庚申塔を見学した後に、四番目の毘沙門天(法昌寺)を参拝しました。境内には千手千眼観音の巨大な絵が掲げられていたのが印象的でした。

五番目は大黒天(英信寺)です。大黒天の左肩には弁天様のお顔が、右肩には毘沙門天のお顔が見られる珍しい「三面大黒天」を拝観することができました。

六番目は、金杉通りを渡り、言問通りを西に進んで路地にはいると、不夜城を呈するような密集地の中に寿老神の元三島神社がありました。大晦日に行なわれた「茅の輪」が残っていて、輪くぐりをして参詣しました。

最後は、「恐れ入谷の鬼子母神」で有名な真源寺に到着しました。ここで甘酒を振舞われながら福禄寿を参拝しました。

すべての行程が終わり、開運招福を期待して十二時半ごろに現地で解散しました。

第337回　下谷七福神　H17・1・3

第三三八回　霞ヶ関界隈と増上寺

記録　佐藤　光夫

・日　時　平成十七年二月二十六日(土)
・天　候　晴のち曇
・参加者数　七十二人
・案内者　宮川　進

半蔵門線永田町駅に到着した。長いエスカレーターで地上にに出ると自民党本部があり、警察官が数人立っていた。大勢の参加者が縦長になって歩いていたので不審者が来たのかと歩み寄ってきた。郷土研の旗を見せると何の質問もされず通してくれた。六十九年前の今日、二、二六事件が起ったのは雪の降る朝だった。今日も気温は低い。

国会議事堂の裏を通って国会前庭公園に着く。この公園は加藤清正の上屋敷であった。その後、井伊家の上屋敷となった。園内には陸地測量の「標高基準」になっている日本水準原点がある。公園の下に桜田門が見えた。

道を少し下ったところに井伊邸跡の標識と桜の井戸がある。

桜田門の手前で大老井伊直弼が水戸藩士に暗殺された日も雪が降っていた。桜田門から警視庁・法務省などのある官庁街を通って日比谷公園に着く。園内の噴水前で昼食をとる。

午後は新橋駅前広場にある蒸気機関車を横目で見ながら、すぐ近くにある旧新橋停車場・鉄道歴史資料館を見学した。ここは旧新橋駅舎を再現したところで、裏には復元軌道と0哩標識がある。

大江戸線の汐留駅から赤羽橋駅まで移動する。

芝公園内の小高い山は芝丸山貝塚だ。そこは古墳である。すぐそばに伊能忠敬の碑があり、ここで忠敬が測量の予行練習をしたとされている。

増上寺には三解脱門・大殿・光摂殿・安国殿など多くの建物がある。今回は修行僧が社寺の説明をしてくれたので、このお寺が徳川家の菩提寺になったのがわかった。

安国殿のなかには皇女和宮の実物大の像があった。

「本日は特別に」と徳川将軍家霊廟の扉を開けていただき参拝することができた。

増上寺の境内には、千躰の子育地蔵尊があり、色とりどりの頭巾や風車が並んでいる。「きれいね」と皆さんが言っていた。

大殿と東京タワーを見ながら、ここで解散となる。駅へ行く途中の御成門を数人でみて、越谷へ向かう。有意義な一日だった。

第338回　霞ヶ関界隈・増上寺　H17・2・26

第三三九回　春日部めぐり

記録　菅波　昌夫

・日　時　平成十七年四月二日(土)
・天　候　曇
・参加者数　八十人
・案内者　加藤　幸一

四月とはいえ曇天で肌寒く感じる。

粕壁のお酉さまといわれる神明社を訪ねる。浅草の酉の市は有名だが、十二月十四日にここで大祭の酉の市が立つとは知らなかった。

日光街道に出て、浜島家と山田家の土蔵を見る。何か街道の寂しさのように、その姿は憐れにも見える。

春日部の発祥の地となっている南北朝時代に活躍した春日部重行は、この地に住んでいたと思われる。

最勝院の中に樹齢百年の「しい」の木が立つ丘に重行の墓があった。

古隅田川に出る。古代は利根川の本流とされ、大河の名残りの河岸砂丘が見られる。土手の桜が薄紅色のつぼみをつけており、「来週ならよかったのにね」の声が聞かれる。

いま立っている南岸は下総国、北岸は武蔵国という加藤氏の解説に熱がこもる。

古利根川に架かる公園橋は、昭和五十九年に完成した。女性の美しさを表現した六体のブロンズ像があり、円いステージの方位盤の下に、タイムカプセルが埋められている。

戦国期、永禄十二年(一五六九)、北条氏政が武田信玄との争いで、氏政配下の多田新十郎がたてた武功を賞して与えた古文書(春日部市の文化遺産)を、近くに住む直系の方から見せていただく。

春日部郷土資料館では、まず、学芸員から総括的な説明を受けた。春日部のあけぼの、縄文時代、土器、貝塚、埴輪、板碑、古文書と展示が並ぶ。粕壁宿が再現された模型に大勢が見入っていた。

四号線沿いの一里塚跡には、レプリカの碑が立っており、何の説明板もなかった。

地蔵坊渡し跡、会野川の河道跡と進む。この辺は川だったが、今は川の中を歩いている話に皆さんは感心する。

称名寺では、江戸期の金精石神(高さ四六センチ、幅二九センチ、厚さ二十センチ)について説明があった。

「子宝に恵まれない人が、ご神体に肌を接すると、子宝に恵まれる」という信仰で、神仏を頼む気持ちは現代でも理解できる。

疲れも見えてきたころ、武里駅に着く。

春日部の地に多くの歴史、文化遺産があるとは知らず、大いに勉強になった。

今日は、十一・五キロメートル歩いたとの話に驚きの声があがった。

第339回　春日部　H17・4・2

第三四〇回　越谷・埼玉鴨場2

記録　水上　清

・日　時　平成十七年四月十二日(火)
・天　候　曇
・参加者数　四十人
・案内者　増岡武司

埼玉鴨場の見学は、昨年四月に次いで二回目、参加者は前回同様くじ引きで決まった。

幸運な四十人が北越谷駅前に集合し、鴨場まで歩く。

場内に入り、まず目を引いたのは手入れの行き届いた庭園、大きな池に広い芝生と周囲にうっそうと生い茂る竹・樹木の自然林。池の左右にある満開の二本の桜が一面の緑に映えて美しい。

右側の応接棟で「新浜鴨場」のビデオを鑑賞し、鴨場と皇室外交、鴨の捕獲方法、標識調査などについて学ぶ。

さらに鴨場に飛来する鴨類・鷺類・鷲・鷹などのはく製を見て、叉手網(さであみ)にも触れる。

渡り鳥が飛来・生息し鴨猟の行なわれる大池へ向う。

大池は約四千坪あり、飛来鳥は毎年一万羽を超えるという。

池の南北に十七本の引堀りがあり、小屋の小窓から池とそれぞれの引堀りの状況をうかがえるようになっている。

一日二回の食事時、木づちで板を叩くと、餌付けされたおとりの合鴨はわれ先に引堀りを上り、つられて野生鴨も引堀りに殺到する。人の気配で飛び立つ鴨を叉手網で捕らえる。

この捕獲方法は江戸時代の大名家に伝わる伝統的技法ときく。

招待狩猟の時、猟場係の職員は鷹匠(たかじょう)と呼ばれ、江戸時代からの鷹匠装束で参加する。

保護されたすべての鴨は、野鳥の生態や分布の国際的調査と研究のため、脚に標識をつけて放鳥される。

最後に池の左側にある大きな食堂を見学する。

狩猟招待者に供する昼食の鴨料理には合鴨が使用されるとのこと。

北越谷駅の周辺で昼食後、「ホット越谷」で増岡理事から「越谷と鴨場」の興味深い解説を拝聴し、解散となる。

時折、小雨の予報であったが、どうやら雨に会わずに楽しむことができた花冷えの一日であった。

写楽の記念碑

越谷市・獨協埼玉高校近くの法光寺には、謎の浮世絵師である東洲斎写楽ゆかりの寺として「写楽の記念碑」が建てられている。

法光寺は平成五年、都内築地から越谷市三野宮一三三六に移転してきた寺で、写楽と思われる人物の過去帳が同寺にあった。

徳島市「写楽の会」の調査によると、発見された過去帳には「辰三月七日、釈大乗院覚雲居士、八町堀地蔵橋、阿州殿御内、斎藤十郎兵衛事、行年五十八歳、千住二テ火葬」と記されている。

写楽の正体は、阿波の能役者斎藤十郎兵衛で、宝暦十一～二年(一七六一～二)ころに生まれ、文政三年(一八二〇)に没したと推定している。

(加藤記)

第三四一回　佐野界隈

記録　森田　三郎

・日　時　平成十七年四月二八日(木)
・天　候　快晴
・参加者数　九十一人
・案内者　水上　清

参加者で満員のバスは、快晴の南越谷りそな銀行前を出発した。今回はバスツアーのため会員のみの参加となった。

最初のお寺さん大慈寺に到着した。二班に別れ一班が寺に入り、住職の説明をきき、二班は外の庭を見学して交代した。慈覚大師円仁ゆかりの寺で、住職が中国まで行き、円仁像を贈ることになったとの住職の説明に皆さんは感激していた。高さ一・八メートルのすばらしい坐像が出荷待ちで、本堂で拝観できた。

引き続き近くの村檜神社と小野小町の墓に詣でた。

次は、唐沢山城跡に登り、本丸跡にある唐沢山神社に参詣した。上りは息を切らし、下りは楽で、話を交わしながらて降りてきた。すばらしい展望であった。

待ちこがれた昼食は、食事どころの赤見温泉一乃館に着く。レトロ調の大正時代の旅館で、広間で昼食の用意ができていた。マスの塩焼やフライが出た。食後、広い庭を散策した。鯉がおよいでいる池、季節の花が咲きみだれるみごとな広い庭を見物できた。

出流原弁天池を見物し、弁財天でお金を洗った。

田中正造旧宅では、三十分ほど案内人の説明を聞いて見学し、向かい側の夫妻墓に詣でる。ついで人丸神社に参詣する。

佐野市郷土博物館では二班に別れ、学芸員から説明をうけながら見学した。

ここにも博物館とか史料館がありうらやましくなった。越谷はどうしてこういう施設できないのかふしぎに思った。これから皆でがんばり史料館を立ち上げようと考えた。

佐野厄除け大師に参詣してから、最後のフラワーパークに入園する。メインの藤がまだ三分咲きなのが残念だが、ライトアップや他の花を見物し楽しい一日をすごした。

一路、越谷に向い定時に到着した。運転手や案内の方へ感謝する。明日に向ってまたがんばろうという気をおこさせていただいた。ありがとうございました。

第341回　佐野界隈　H17・4・28

第三四二回　大相模不動尊・大相模郷鎮守三社

記録　宮川　進

・日　時　平成十七年五月二十九日(日)
・天　候　晴
・参加者数　九十三人
・案内者　池田　仁理事

昨年秋に雨で中止した市内の名刹・大聖寺を見学する史跡めぐりの仕切り直し本番。「曇り」との天気予報も覆して今日は快晴。

続々と集まられる方々のうち、五十人の方が一本前のバスで先発。第二陣三十八人が続いた。

現地でお待ちの五人の方とあわせて九十三人の参加者が池田先生の説明に耳を傾ける。

なにしろ先生は、この地で生まれ、育たれた方、地元の人でしか語れない、大聖寺のお話がいっぱい。

いまは全くなくなった塔頭・安養院の跡、大聖寺の旧境内のひろがり、宅地開発の波にさらされる原因となった農地解放、釘をつかっていない大きな仁王門、もう一つ別にあった二天門……先生のお話で、巨大寺院であった大聖寺の当時の盛大さが目の前に浮んでくる。

宝物殿で徳川家康の寝衣などを拝観し、戸外で楽しく昼食。

ご住職のユーモアをまじえた胎蔵界の大日如来などについてのお話もうかがった。

午後も池田先生のお話はさらに熱を帯びる。

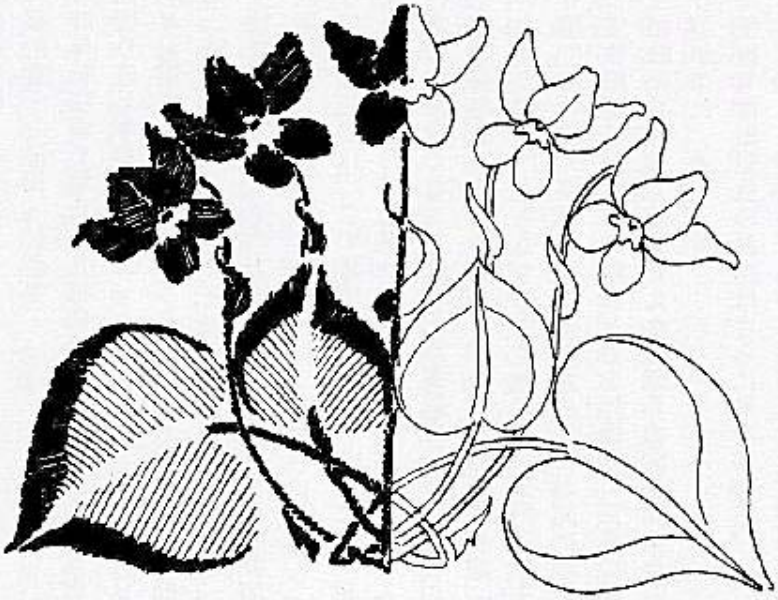
水ごり修行の含満井、堤防に悪用された百庚申の石塔、渡し舟のあった跡など大聖寺の残りの史跡のご説明のあとは、「おしゃもじさん」「山王日枝神社」「大相模久伊豆神社」「八坂神社」へ。

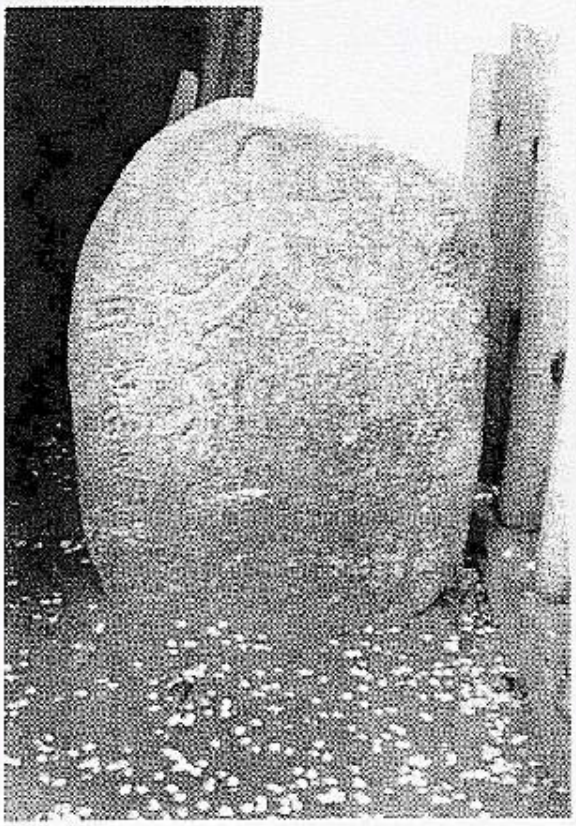
神社の社域は広く、大きな森があって、まさに荘厳であったとのお話。

身体で歴史を体験し覚えておられるからこそ、そして生まれ育たれた土地に対して深い愛情をもっておられるからこそのお話は、これまでの、どの史跡めぐりにもなかった感慨を参加者の皆様に与えて終わったことでした。

第342回　越谷・大聖寺　H17・5・29

大相模不動尊
眞言宗　大山　大聖寺





卯之助の力石を訪ねて

私用で大阪へ行くことになり、かねて大阪天満宮に力石があるという高崎先生のお話を聞いておりました。

着くとすぐに天満宮へ向かいました。

境内はさすがに広く、むかしは見世物小屋などで賑わったと思いました。

探してもみつからず、神主さんに聞いてもわかりません。

あちこち探すうちに、戎門のそばに立っている力石をみつけだしました。

石の正面に大磐石(さし石)天保十一年子二月、西浜若中三ノ宮卯之助と刻字されておりました。

やっと見つかり嬉しくて石をなで、天満宮を後にしました。

立て札もなく、人目に触れにくく、残念に思いました。

公私とに忘れられない思い出になりました。

(林記)

さいたま市の力石探訪

平成十六年師走、さいたま市岩槻区加倉・久伊豆神社の力石を写生中、隣の公民館から競売関係の男性が出てきて、私の写生帖をのぞきこみながら、

「この南の方に有名なお人が持った石が幾つもあるよ」

と言う。

私は大門と釣上での観察を終えていたので、

「三ノ宮三橋卯之助！」

と応じると、

「三ノ宮とか三橋は土地の名で、本当はムカサ(向笠)っていうんだ」

と意外な言葉を残して戻って行った。

年明けて飯塚・新方須賀(岩槻区)で一個ずつ卯之助の力石に対面した。

大森(同右)の市界では三野宮(越谷市)の田園を見晴るかし、生い立ちから活躍の生涯を想像するにつけ、何故あの折、貴重な地元話を訊く機会をあっさり逃がしてしまったのか。いい年齢をして一期一会が解かっていない私。

(酒井記)

父

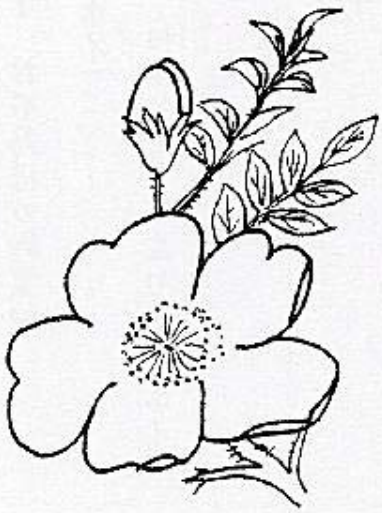
親が厄年の時に生まれた赤ちゃんは、一度捨てて他の人に拾ってもらってから育てるという風習がありました。

昭和二十一年ころ、近所の赤ちゃんを隣のおばさんが頼まれて送り届けたと、何度も聞いたことがありました。

お父さんはまだ厄年前でしたね。

でも、前の赤ちゃんを肺炎で亡くしていたので、今度は丈夫に育つようにと願ってそうしたのでしょうか。

(岩瀬記)



越谷相撲甚句をご存知ですか。
平成十六年六月十九日、越谷相撲甚句会が発足しました。
現在の会員は二十人です。うち六人が日本相撲甚句会登録メンバーです。
会長藤乗雅敏さん、指導者池田政則師範(元関取大勇)、婦人部長伊藤霞さん。この三人の方を中心に活動しています。
毎週水曜日、午後七時から九時まで、越谷市越ヶ谷チュリス自治会集会所で練習に励んでおられます。
大相撲場所中には、両国駅コンコースでライブコンサートをおこないます。
平成十七年四月、第十四回相撲甚句全国大会に出場し、伊藤霞さんが新人賞を受けました。
これからは相撲甚句の楽しさを通じて、越谷市や近隣の市でボランティア活動をしていかれるそうです。
興味がおありの方は練習会場へ、是非、お越しください。
越谷相撲甚句を体験されてはいかがでしょうか。

(増岡記)

越谷相撲甚句会　テーマ甚句

「武州　越谷」

あー　えー　武州越谷　甚句に詠めばよー
あー　日光街道その中で　要と云われし宿場町(ホイ)
越ヶ谷御殿に御狩り場は　東照権現ゆかりの地(ホイ)
久伊豆神社の御社は　藤の名花が咲き誇り
善男善女に慕われて(ホイ)
サイジンサマと呼び名され　鎮座壱千弐百年(ホイ)
木遣りの唄に彩られ　元禄絵巻か錦絵か
天下に名高き莫迦祭り(ホイ)
間久里で名代は獅子舞よー
太夫獅子　中獅子　女獅子舞う(ホイ)
古寺名刹なら大聖寺　お不動様の御霊験
病魔祓いて福招く(ホイ)
神人和楽　国の華　相撲が好きで甚句好き(ホイ)
集いて謳う同朋は
越谷相撲の　よー　ほほいー
あー　甚句会　よー

会員アンケート

①現住所に何年間、お住まいですか。

②越谷市郷土研究会へ入会の動機を、一つ選んでください。

・歴史すき　・散策すき　・旅行すき　・余暇活用　・越谷を知りたい　・友人づくり　・その他

③入会して何年ですか。

・20年以上　・10年以上　・5年以上　・4年以下

④あなたの趣味を、二つ以内書いてください。

⑤あなたの好きな言葉を、一つ書いてください。

⑥あなたが興味のある歴史上の人物名を、一人書いてください。

・NPO越谷市郷土研究会への要望。

・出身地

45×48cm

櫛屋の看板(江戸時代)

氏名	現住所	動機	何年	趣味	言葉	人物	要望	出身地
染谷 勇蔵	越谷市70年	越谷を知る	20年	釣・グランドゴルフ	あいさつ			越谷市
池田 仁	越谷市78年	越谷を知る	10年	園芸・囲碁	誠実	秋山真之		〃
山本 泰秀	越谷市62年	歴史すき	5年	畑仕事	真実の追求		増林の地名の最古を知りたい ご存じでしたらお教えください	〃
高橋 正澄	越谷市43年	歴史すき	10年	読書・旅行	誠実	河井継之助		〃
岩瀬 静江	越谷市4年	歴史すき	10年	旅行・手芸	今が幸せ	卑弥呼	若い会員さんが増えるといい	〃
古海 久代	越谷市34年	歴史すき	4年	歴史探訪・古布収集	自愛	藤原鎌足	日本人のルーツを海外へ	〃
荻野 昌世	越谷市70年	旅行すき	4年	運動・手芸	努力	源 義経		〃
関根 正直	越谷市77年	旅行すき	5年	海外旅行・アマチュア無線	気力	兼好法師	史跡めぐりはゆとりの行程で	〃
関根 綾子	越谷市38年	歴史すき	10年	読書・作歌	静謐	坂本竜馬		〃
鈴木 種雄	越谷市	散策すき	20年	歴史		北条早雲		〃
塚本 礼子	越谷市35年	旅行すき	4年	ガーデニング・花	健康			〃
須賀 弘	越谷市20年	余暇活用	4年	ハイキング・読書	平凡	織田信長		〃
谷塚由紀子	越谷市5年	散策すき	4年	絵画観賞・旅行	一期一会	徳川家康		〃
	越谷市13年	余暇活用	10年	旅行・園芸	誠実	坂本竜馬		〃
渋谷 正芳	越谷市63年	越谷を知る	20年	古民具収集・盆栽				〃
S・S	越谷市74年	歴史すき	5年	史跡見学・美術品観賞		徳川家康		〃
中山 弘子	越谷市68年	歴史すき	4年	旅・雑学を学ぶ	誠意	日野富子	今年は研究会に参加します	〃
石塚 陳正	越谷市74年	越谷を知る	20年	写真・読書		司馬遼太郎	比較郷土史または交通史	〃
宇田川正治	越谷市78年	歴史すき	20年	旅行・気学・姓名学	誠実	若林東一	ますますの発展を祈ります	〃
会田 清	越谷市70年	歴史すき	4年	旅行・歴史	日々平安	始皇帝		〃
M・I	越谷市40年	歴史すき	4年	旅行・デパートめぐり	健康	土方歳三	個人では行かないので、末長く 続けてほしい	松伏町
北川 義男	越谷市10年	歴史すき	4年	テニス・読書（歴史物）	誠実	徳川家康	近代・現代の勉強会の開設	〃
島根 岱助	越谷市50年	越谷を知る	4年	旅行・読書	誠実	フランクリン		幸手町
森田 三郎	越谷市18年	歴史すき	10年	旅行・読書	生涯学習	西郷隆盛		岩槻区
ポリッピー	越谷市25年	越谷を知る	4年	旅行・カラオケ	健康一番	畠山重忠		嵐山町
柿沼 孝行	春日部53年	散策すき	4年	ウォーキング・読書	継続は力なり	渋沢栄一		春日部市
大沢 茂	越谷市9年	越谷を知る	4年	パソコン・地域史	温故知新		ホームページを立ちあげたら	〃
H・S	宮代町8年	歴史すき	5年	読書・旅行	和顔愛語	一休禅師		羽生市

本銚 文子	越谷市	歴史すき	4年	謡曲・歌舞伎観賞	秘すれば花	平 将門		埼玉県
山崎	越谷市35年	歴史すき	5年	花・旅行	ありがとう	三ノ宮卯之助		久喜市
小川 隆雄	越谷市35年	余暇活用	10年	ゴルフ・家庭菜園	而今（じこん）	クフ王	おしゃべりサロンの場の提供	杉戸町
林 佳子	越谷市30年	越谷を知る	10年	健康づくり・旅行	誠実	野口英世	高齢者のためゆとりある行程を	騎西町
台 実	栗橋町40年	歴史すき	5年	花・俳句	花は友だち	田中正造		大利根町
田端 功政	越谷市36年	越谷を知る	4年	読書・スケッチ	好奇心	内村鑑三	充実した内容で会が長く続く	美里町
阿部 一枝	越谷市24年	越谷を知る		散策・旅行	笑み	北条政子		東京深川
S・T	越谷市15年	散策すき	4年	読書	誠実	諸葛孔明		東京都
吉田 昭典	越谷市8年	越谷を知る	4年	スポーツ・旅行	百里を行く者は九十里を半ばとす	孔子		北区
熊谷 正博	越谷市38年	歴史すき	4年	読書・古寺めぐり	至誠	蘇原秀衡		東京都
篠原 陸郎	越谷市17年	歴史すき	4年	歴史・音楽	追求	西郷隆盛	講演会の増加	世田谷区
星川 泰子	越谷市32年	旅行すき	10年	音楽・旅行	忍耐	徳川家康	長い歩きは苦手になりました	東京都
S・T	越谷市36年	越谷を知る	5年	盆栽・旅行（ハイク）	花は色、人は心なり	坂本竜馬	大正～戦後昭和の越谷市の歴史を知りたい	八王子市
沖川喜久枝	越谷市30年	越谷を知る	4年	旅行・土いじり	平和	土方歳三		東京浅草
加藤 雅子	越谷市37年	歴史すき	4年	音楽観賞	忍	秀吉の妻ねね	越谷について、お願いします	武蔵野市
高野 仁	越谷市60年	その他	4年	カヌー・旅行	信用	織田信長		台東区
川田佐一郎	越谷市	歴史すき	20年	俳句・墨絵	努力	坂本竜馬		東京都
西村 功	越谷市18年	歴史すき	10年	時代小説・古文書	日々是好日	田沼意次		足立区
酒井 正	さいたま市 20年	歴史すき	4年	石仏探訪・絵・スケッチ	一期一会	江戸期武州の石仏彫刻工に興味がある	越谷市内の力石の発表	墨田区
尾崎 孝一	越谷市38年	歴史すき	4年	旅行・史跡探訪	無事これ名馬	織田有楽斎	努力されて頭がさがります	品川区
橋 ふさ	越谷市7年	歴史すき	4年	書道・編物	待て、しかして希望せよ	蘇原道長		江戸川区
吉川 輝男	越谷市15年	越谷を知る	4年	仏教美術・クラシック音楽	老而学、則死而不朽 佐藤一斎	空海	NPOへの依存度が高まっているので、ますますの発展をお願いします	千代田区
藤井佐登子	越谷市39年	余暇活用	4年	毛糸編物	最初の一歩		運営の皆さんに感謝しています	葛飾区

高山　はつ	越谷市25年	越谷を知る	20年	旅・歴史	感謝	源　義経	温故知新	中央区
松本マツエ	越谷市20年	旅行すき	4年	ハイキング・洋裁				東京都
菅波　昌夫	越谷市40年	歴史すき	10年	寺社めぐり・絵画観賞				〃
飯泉　信夫	越谷市27年		4年	カラオケ・散歩	忍	大石良雄		北区
八木下邦夫	越谷市61年	越谷を知る	4年	旅行・ダンス	他人に迷惑をかけない	豊臣秀吉		
Y・N	越谷市	歴史すき	4年	歴史散歩	忍耐	野口英世		
M・A	越谷市10年	旅行すき	4年	木目込人形・パッチワーク	ありがとう	織田信長	史跡めぐりの時間に余裕を	
	草加市28年	散策すき	4年	手芸・ハイキング・音楽	穏やか			世田谷区
小林　光男	越谷市18年	越谷を知る	4年	野球・バードゴルフ	日々是好日	与謝野晶子	ますますのご発展とご活躍を	中央区
杉浦　健之	越谷市33年	歴史すき	4年	自然観察・釣	和顔愛語	道元		東京都
安西　利夫	越谷市36年	歴史すき	4年	水墨画・釣	調和	徳川家康		〃
増岡　武司	越谷市25年	越谷を知る	10年	ちぎり絵・読書（歴史物）	協力協調	徳川家康	NPO法人にふさわしい組織	北区
小原勘三郎	越谷市37年	歴史すき	10年	野鳥観察・囲碁	本来無一物	田沼意次		東京都
林　和江	春日部25年	歴史すき	10年	音楽・読書	自然体	千　利休		〃
加藤　幸一	春日部15年	越谷を知る	20年	切手収集	初心忘るべからず	田中正造		足立区
磯谷　知子	越谷市30年	歴史すき	10年	歌舞伎観賞・旅行	温故知新	勝　海舟		東京都
山本　昭	越谷市24年	友人づくり	4年	読書・車	一つは難しい	坂本竜馬		中央区
針田　尚之	春日部8年	歴史すき	4年	歴史散策	残躯いかに楽しまん	伊達政宗	発展を期待しています	台東区浅草
川端　孝夫	越谷市30年	散策すき	4年	読書・ゴルフ	誠実	小栗上野介		中央区
青山　栄吉	越谷市26年	歴史すき	10年	囲碁・水彩画	努力	徳川家康		足立区
	越谷市35年	歴史すき	4年	旅行・スポーツ	元気	渋沢栄一		東京都
佐藤　純子	越谷市16年	散策すき	4年	歩く・音楽を聞く	一期一会	金子みすず	今までどおりで	〃
T・S	越谷市20年	越谷を知る	4年	囲碁・ゴルフ・旅行	生涯現役	芭蕉	歴史館・資料館の開設	三鷹市
山本　希八	越谷市22年	散策すき	4年	ウオーキング	几帳面	富本武蔵	一泊の史跡見学しますか	大田区
H・S	越谷市30年	越谷を知る	4年	能・演劇	へたの横好き	式子内親王	教えていただくばかりで感謝	横浜市
S・O	越谷市4年	越谷を知る	4年	歴史散歩・歩くこと	根気よく	坂本竜馬	越谷以外、県東・県南の歴史	〃
水上　清	越谷市35年	歴史すき	10年	旅行	前向き	平賀源内		鎌倉市
木原　徹也	野田市62年	歴史すき	20年	郷土史・旅行		上杉謙信		野田市

堤竹 宏吉	越谷市37年	越谷を知る	20年	歴史散策・読書	共存共栄	越谷吾山	団体活動で社会貢献を期待		栃木・岩舟町
川原 文子	越谷市27年	越谷を知る	4年	旅・読書（古典）	ほどほど				栃木県
斎藤 幸裕	越谷市17年	歴史すき	4年	ゴルフ・史跡散策	易学而難行	河井継之助	埼玉・関東へ研究の拡大		宇都宮市
関 幸保	佐野市40年	越谷を知る	4年	カメラ・ハイキング	努力	吉田松陰	幹事の指導力に感謝あるのみ		栃木・佐野市
石川辰三郎	越谷市40年	歴史すき	5年	ゲートボール・園芸	ヤサシサ	二宮金次郎	よろしくお願いします		栃木・西方町
藤田 浩行	越谷市20年	越谷を知る	4年	古町散策・音楽観賞	温故知新	勝海舟			常陸太田市
内田 和男	越谷市33年	歴史すき	4年	読書・ゴルフ	忠恕	織田信長			茨城・岩井市
長谷川敦子	越谷市10年	越谷を知る	4年	箏曲・太極拳	愛	坂本竜馬			館林市
M・S	越谷市44年	余暇活用		木彫	初心忘れるな				群馬・草津町
根岸日出松	越谷市38年	歴史すき	5年	スキー・読書	変革	しぼれない	会のますますの発展		群馬・佐波郡
木村 恵仲	越谷市33年	歴史すき		麻雀・読書	正義	織田信長	史跡・講演会をウイークディに		館林市
H・Y	越谷市35年	旅行すき	4年	旅行・散歩	ありがとう	徳川家康			福島県
渡辺 和照	越谷市12年	越谷を知る	4年	ゴルフ・歌	誠実	織田信長	人生を楽しくすごせる会に		郡山市
長谷川久一	越谷市33年	歴史すき	5年	映画・芝居	全てを知る事は全てを許す事	中臣鎌足	講演会をふやして下さい		福島・川俣町
小林 重蔵	越谷市35年	越谷を知る	5年	古文書解読・家庭菜園			越谷の歴史を知る機会をふやす		〃喜多方市
高山 良一	松伏町12年	歴史すき	5年	伝統こけし・仏像彫刻	一期一会	坂本竜馬			宮城・白石市
小野 博康	越谷市38年	散策すき	4年	散策・スポーツ観戦	朝の来ない夜はない	伊達政宗			仙台市
三原 紀子	越谷市35年	歴史すき	4年	読書・漢字パズル	健康であれば何とかなる	上杉鷹山	仕事とかさなり参加できず残念		米沢市
菅原 貞良	春日部34年	歴史すき	4年	ソフトボール・麻雀	明朗	黒田官兵衛			山形・滝島町
新野トモ子	越谷市27年	散策すき	10年	旅行・手芸	正直	上杉謙信			〃西置賜郡
伊藤 ユキ	越谷市18年	歴史すき	4年	裁縫・編物	努力	源 義経			秋田八郎潟町
最上 忠二	さいたま市30年	歴史すき	4年	さくら草栽培	忍耐	平 将門			〃大曲市
沼倉 セツ	越谷市	歴史すき	10年	クロスワード・出歩き	歳月人を待たず				〃大曲市
M・H	松伏町37年	歴史すき	4年	茶道・俳句	愛	源 義経			岩手・水沢市
福井 勝衛	越谷市13年	越谷を知る	4年	読書・ゴルフ・詩吟	先憂後楽	坂本竜馬	郷土文献の閲覧		青森・八戸市

西田 糸	札幌市1年	歴史すき	4年	史跡めぐり・外国語		太田道灌	都内の史跡めぐり・年間の予定	札幌市	
	越谷市30年	歴史すき	5年	史跡めぐり				北海道	
内村 江	越谷市20年	歴史すき	5年	旅行	和をもって尊しとなす	聖徳太子		旭川市	
平田	越谷市40年	散策すき	10年	油絵・コーラス	誠実	徳川秀忠		南アルプス市	
青木 勝子	越谷市39年	余暇活用	5年	人のカラオケを聞く		親鸞		長野・中野市	
高津 昭子	越谷市30年	歴史すき	4年	登山・料理	山を想えば人恋し、人を想えば山恋し	樋口一葉		長野・南安曇郡	
吉田 忠雄	越谷市45年	余暇活用	4年	読書・散策	一生勉強	坂本竜馬	学習会をもっと回数多くしてください	長野市	
K・Y	越谷市20年	歴史すき	4年	男の料理・俳句	一期一会	徳川家康		新潟市	
鈴木タカネ	越谷市18年	歴史すき	10年	編物	我が身をつねって人の痛さを知れ	伊能忠敬		新潟・高田市	
S	越谷市16年	旅行すき	4年	短歌・旅行	真実	親鸞		新潟県	
上原 保夫	越谷市30年	歴史すき	4年	歴史探訪・ハイキング	努力	秋山真之		新潟東頸城郡	
岩根 富子	草加市18年	歴史すき	5年	コーラス・史跡めぐり			今のままでよい	〃六日町市	
一	越谷市30年	散策すき	10年	家庭菜園・小旅行	愚直	野口英世		〃・新井市	
T・S	越谷市28年	歴史すき	4年	読書・旅行	一期一会	徳川家康	お世話になりありがとう	静岡市	
山梨 隆司	越谷市18年	越谷を知る	10年	歴史探訪・彫刻	常楽我浄	梶原平三景時	趣向のある計画・会員の確保	〃	
恵 凡多	越谷市20年	歴史すき	4年	読書・将棋	微笑もて正義なせ	卑弥呼	マイペースで参加させて頂きます	〃	
長瀬由木夫	越谷市40年	歴史すき	10年	ゴルフ・旅行	我以外皆師なり	佐々成政	越谷市内の歴史探訪を希望	富山市	
山口 正夫	越谷市4年	散策すき	4年	釣・散策	邂逅	徳川慶喜	催しは日曜日にして頂ければ	富山・南砺市	
T・Y	越谷市17年	越谷を知る	5年	短歌・俳句・中国語	山川草木悉皆仏性	空海		石川・白山市	
西尾 康	越谷市29年	歴史すき	4年	史蹟探訪	忍耐	織田信長		愛知・江南市	
石崎 一宏	越谷市30年	歴史すき	4年	美術観賞・読書	同志	家康		〃 岡崎市	

宮川　進	越谷市22年	歴史すき	20年	古墳めぐり 古楽（作曲者の楽譜どおり当時の楽器で演奏）観賞	一生少年 一生感動		越谷市が「市民の郷土の歴史に関心度ナンバーワン」になるようがんばりましょう	滋賀・近江八幡市
M・N	越谷市38年	散策すき	4年	スポーツ・園芸	素直	蒲生氏郷		滋賀・蒲生市
小泉平八郎	越谷市15年	越谷を知る	4年	美術観賞	一期一会	諸葛孔明	過去の人気のあった行事を再開催、若い会員を啓発する	滋賀・八日市市
古沢　孝	越谷市40年	余暇活用	5年	写真・スポーツ	らしい	坂本竜馬		滋賀・日野市
蓬田　敏晶	草加市23年	歴史すき	4年	城めぐり・切手収集	初心	豊臣秀吉	街道散策	大阪市
	越谷市1年	越谷を知る	4年	歴史・旅行	和	徳川家康	史跡めぐりを楽しみにしている	大阪府
谷岡　隆夫	越谷市42年	散策すき	20年	ぶらり旅	和	徳川家康	ふれあいを大切に活動	大阪市
Y・T	越谷市33年	歴史すき	5年	俳句・史跡めぐり 美術館めぐり	気儘	卑弥呼	弥生時代の研究特集	京都・相楽郡
I・N	越谷市23年	余暇活用	4年	川柳・卓球	誠実	西郷隆盛		兵庫・宍粟郡
藤川　吉洋	越谷市19年	歴史すき	4年	ゴルフ・読書	誠実	空海	明るく楽しい会になるよう運営	呉市
佐々木義隆	越谷市10年	越谷を知る	4年	ゴルフ・囲碁	人生万事塞翁が馬	ガンジー		広島市
A	越谷市25年	越谷を知る	5年	ゴルフ・株	学習	源頼朝	細分化された学習 趣味の教室または同好会	島根・松江市
森中　重樹	宮代町25年	余暇活用	5年	旅行・読書	一病息災	高杉晋作	幹事に感謝しております	下関市
	越谷市35年	越谷を知る	4年	歴史・史跡めぐり	継続は力なり	田沼意次		高知・須崎市
Y・K	越谷市10年	歴史すき	4年	ケーキづくり・昼寝		久米栄左衛門		香川・坂出市
橋田　早苗	春日部20年	散策すき	4年	読書・旅行	誠心誠意	義経		愛媛・今治市
新居　佳雄	越谷市28年	越谷を知る	4年	詩吟・中国語	継続は力なり	徳川家康		徳島市
峰　孝久	越谷市37年	歴史すき	4年	日曜大工・旅行	真実一路	徳川家康		長崎市
M・Wa	越谷市25年	余暇活用	5年	海外旅行・温泉	ありがとう			長崎県
久木田　豊	越谷市38年	歴史すき	4年	将棋・ゴルフ	念ずれば花ひらく	大久保利通	行事が多すぎる 減らしてもよい	鹿児島・枕崎市
	越谷市32年	歴史すき	4年	ゴルフ・魚つり	向上心			

越谷市郷土研究会　史跡めぐり

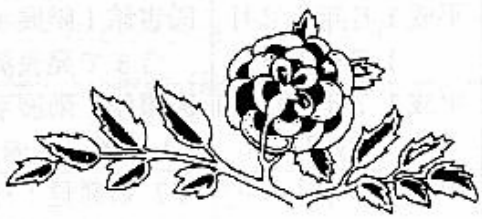
回数	実施年月日	行先	案内者
316	平成15年　7月11日	（バス）関東古城（関宿城・逆井城……）	西村　功
317	8月18日	市内　大道遺跡	橋本充史
318	9月28日	出羽地区の石仏めぐり（観照院）	加藤幸一
319	10月19日	市内　川柳地区（女体神社……）	池田　仁
320	11月　4日	（バス）雁坂峠から山梨県（恵林寺……）	宮川　進
321	11月　9日	埼玉県立博物館　「平林寺展」	古澤　孝
322	11月16日	「平林寺・野火止用水……	古澤　孝
323	12月21日	（バス）新選組を調布・日野に（高幡不動……）	水上　清
324	平成16年　1月　3日	深川七福神めぐり（富岡八幡宮……）	西村　功
325	2月29日	江ノ島・稲村ケ崎（江ノ島の卯之助力石……）	宮川　進
326	3月25日	古河の花見（桃）（歴史博物館……）	水上　清
327	3月28日	市内・大袋地区（袋山薬師堂……）	加藤幸一
328	4月13日	埼玉鴨場	増岡武司
329	4月24日	徳川昭武の戸定邸（松戸市）……	西村　功
330	5月30日	横須賀市・三笠艦・ペリー記念碑……	宮川　進
331	6月20日	埼玉県立民俗文化センター（こども土俵入り）	宮川　進
332	7月16日	（バス）卯之助力石を横浜・川崎に訪ねる	水上　清
333	10月24日	足利・歴史と文化のまち（足利学校……）	菅波昌夫
334	11月　9日	国立歴史民俗博物館「明治維新と平田国学」	
335	11月28日	桶川宿と日本最大の卯之助力石	桶川地区文化研究会
336	12月16日	（バス）千葉のお城と木更津・卯之助力石	西村　功
337	平成17年　1月　3日	下谷七福神めぐり（元三島神社……）	西村　功
338	2月26日	永田町・霞ケ関・日比谷・汐留・芝の増上寺	宮川　進
339	4月　2日	春日部・古利根川土手散策（最勝院……）	加藤幸一
340	4月12日	埼玉鴨場	増岡武司
341	4月28日	（バス）足利フラワーパークと佐野（大慈寺……）	水上　清
342	5月29日	大聖寺とその周辺	池田　仁
343	7月22日	府中市・大国魂神社・郷土の森博物館……	水上　清

越谷市郷土研究会　展示出品リスト

回数	出品年月	出品作品名	出品者
(大袋ギャラリー展)	平成１５年３月 ２４日～２９日	大袋ギャラリーひろばの「大袋の歴史展」 大袋の歴史１３点、三ノ宮卯之助８点	
第２９回 (祇まつり)	平成１５年 １１月２３日	１）力石と三ノ宮卯之助の紹介 ２）諏訪大社の卯之助力石 ３）江ノ島奥津の宮の力石	水上　清 小林重蔵 水上　清
第３５回 (文化祭)	平成１５年１１月 ２１日～２４日	１）三ノ宮卯之助の力持ち番付 ２）三ノ宮卯之助の力石（横浜市都筑区） ３）会田七左衛門家の墓誌銘 ４）武蔵国新西国観音霊場めぐり ５）出羽地区の石仏 ６）越谷の六阿弥陀 ７）近藤 勇　－逮捕か任意同行か－ ８）増林のねんね河岸の河童	高崎　力 谷岡隆夫 会田　俊 岩瀬静江 加藤幸一 菅波昌夫 宮川　進 山本泰秀
(芸術祭)	平成１６年 ２月２２日	１）甲府で新発見・卯之助の力石 ２）長島村の絵地図 ３）増森本田の肥船	高崎　力 谷岡隆夫 加藤幸一
第３０回 (祇まつり)	平成１６年 １１月１４日	１）久伊豆神社の卯之助力石 ２）三野宮神社の卯之助力石 ３）三ノ宮卯之助の力持ち番付	山口美津江 磯谷知子 高崎　力
第３６回 (文化祭)	平成１６年１１月 １８日～２１日	１）旧西方・東方・見田方村の石仏 ２）林泉寺の開創当初のご本尊 ３）蒲生の忠魂碑 ４）関東大震災と越谷 ５）桶川の卯之助力石 ６）木更津の卯之助力石 ７）綱島の卯之助力石 ８）川崎の卯之助力石	加藤幸一 木村恵俊 菅波昌夫 原田民自 須賀　弘 小泉平八郎 西村　功 林　和江 古澤　孝
(越谷市立図書館展)	平成１６年１２月 １日～１９日	図書館１階展示室の「三ノ宮卯之助展」 今まで発表済みの卯之助集大成	
(越谷市立図書館展)	平成１７年2月16日 ～３月６日	図書館１階展示室の「江戸時代の越谷展」 １６点（「赤山陣屋と赤山街道」など）	
(芸術祭)	平成１７年 ２月２７日	１）新発見！林泉寺の「新六阿弥陀」扁額 ２）浅間山の噴火と越谷 ３）越谷周辺の近代交通のあけぼの	加藤幸一 金岡由紀子 山本泰秀

越谷市郷土研究会　講演会　研究発表会

回数	実施年月日	テーマ	講師
135	平成15年　6月22日	追想　武州大沢町・宿場の残像	鈴木徳治
136	8月24日	（卯之助没後150年記念）力石と力持	高島慎助
137	平成16年　1月25日	下間久里の獅子舞	松崎庄蔵
138	6月27日	民俗の行方―日本・埼玉越谷を歩く	斎藤修平
139	8月29日	（卯之助没後150年記念）三ノ宮卯之助生涯	高崎　力
140	平成17年　1月23日	東武地区で最も栄えた宿―越谷宿と大沢宿	高崎　力
141	6月18日	関東郡代・伊那氏と越谷	小沢正弘
142	8月27日	江戸時代の越谷に学ぶ―私と越谷の思い出	竹内　誠



会員名簿

05・8・7現在

1	相川和男	33	伊丹常和	65	小川康治	97	熊谷正博
2	会田　清	34	市川巳隆	66	小川正雄	98	倉持唯枝子
3	会田　俊	35	伊藤貴美	67	沖川喜久枝	99	栗田勝行
4	会田米子	36	伊藤靖二	68	荻野昌世	100	黒田信子
5	青木勝子	37	伊藤ユキ	69	尾崎孝一	101	小泉平八郎
6	青山栄吉	38	井上璡久江	70	押切ナヲエ	102	甲田美恵子
7	浅川恵子	39	今野光子	71	小野田吉秀	103	小島千枝
8	阿辻正義	40	岩沢　明	72	小野博康	104	越村英雄
9	阿部　緑	41	岩瀬静江	73	小原勘三郎	105	小島久枝
10	阿部一枝	42	岩根富子	74	折原烈子	106	小杉勝義
11	阿部ミエ	43	上野　勉	75	柿沼孝行	107	小沼登茂子
12	天野　武	44	上野英子	76	片桐　薫	108	小林清子
13	新井敏浩	45	上原保夫	77	加藤幸一	109	小林静夫
14	新井美代子	46	宇田川正治	78	加藤サイ子	110	小林重蔵
15	荒金照登	47	内田和男	79	加藤富士代	111	小林　登
16	荒木京子	48	内村　江	80	加藤雅子	112	小林光男
17	有元淳子	49	漆田佳子	81	香取世志男	113	小山淳子
18	安西利夫	50	榎本紀美子	82	金岡由紀子	114	近藤ユキ子
19	飯尾やい	51	江原千恵子	83	金子　寛	115	後藤千代子
20	飯泉信夫	52	江森峰子	84	金田　宏	116	斉木一征
21	飯塚英志	53	遠藤　洋	85	亀田すみ子	117	斎藤　登
22	飯塚多摩子	54	大石ふく	86	川上金蔵	118	斎藤博道
23	池田　仁	55	大川　博	87	川添ハルミ	119	斎藤幸裕
24	伊沢　茂	56	大川昌三	88	川田佐一郎	120	酒井　正
25	石井敏夫	57	大崎葉子	89	川原文子	121	酒井達男
26	石川辰三郎	58	大沢　茂	90	川端孝夫	122	坂巻絹江
27	石崎一宏	59	大竹秀夫	91	菊地七子	123	坂本弘子
28	石塚陳正	60	大塚節子	92	木島明子	124	佐久間サワ
29	石渡ミチ	61	大西チエ	93	北川義男	125	佐々木一麿
30	泉　雅彦	62	大橋浩子	94	木原徹也	126	佐々木忠雄
31	和泉　守	63	岡野助夫	95	木村恵仲	127	佐々木義隆
32	磯谷知子	64	岡山エミ子	96	工藤さだ子	128	佐竹春江

129	佐藤弘二	161	染谷耕司	193	中里一い	225	花町文美
130	佐藤修實	162	染谷勇蔵	194	中澤桂子	226	浜島はじめ
131	佐藤純子	163	染谷高行	195	中沢正夫	227	林　知子
132	佐藤昌之	164	染谷政之助	196	中島栄子	228	林　和江
133	佐藤光夫	165	高久昌代	197	中村梅子	229	林　佳子
134	重田美明	166	高崎　力	198	中村幸夫	230	原島　明
135	重田教江	167	高津昭子	199	中山弘子	231	原田加寿子
136	篠　進	168	高野　仁	200	永井勇雄	232	原田民自
137	篠田敏夫	169	高橋とき	201	長瀬由木夫	233	針田尚之
138	篠原陸郎	170	高山　津	202	名倉　功	234	樋口武介
139	渋谷正芳	171	高山はつ	203	名倉三津枝	235	平田博子
140	島根岱助	172	竹谷フミ子	204	南雲ハルエ	236	深野京子
141	清水初江	173	橘　ふさ	205	並木栄子	237	福井勝衛
142	菅　清子	174	田中きく江	206	新野トモ子	238	藤井佐登子
143	須賀　弘	175	谷岡隆夫	207	新居佳雄	239	藤井俊男
144	須賀慶子	176	田端功政	208	西川信徹	240	藤川吉洋
145	菅波昌夫	177	田山美保子	209	西川峰雄	241	藤田浩行
146	菅原貞良	178	台　実	210	西崎久美代	242	藤原徹哉
147	須賀由紀子	179	塚本礼子	211	西田　烝	243	古海久代
148	杉浦健之	180	土屋清江	212	西村　功	244	古澤　孝
149	鈴木一子	181	堤竹宏吉	213	沼倉セツ	245	古田美雄
150	鈴木進志	182	堤原保貞	214	根岸久子	246	古谷京子
151	鈴木千也子	183	津山正幹	215	根岸松日出	247	蓬田敏晶
152	鈴木タカネ	184	照井春吉	216	野口康子	248	星川泰子
153	鈴木種雄	185	伝谷恵重	217	野口祐許	249	堀井和由
154	鈴木英男	186	殿山悦三	218	野沢陽子	250	堀井博之
155	鈴木秀俊	187	都丸悦示	219	野村勝八	251	堀川静二
156	鈴木政子	188	豊田　重	220	橋田早苗	252	本銚文子
157	関　幸保	189	内藤拙夫	221	橋本ミツエ	253	本間清利
158	関根正直	190	内藤録次	222	長谷川敦子	254	坊野清之
159	瀬下さつき	191	仲井美知子	223	長谷川久一	255	前田斐子
160	仙波好江	192	中川雄一郎	224	長谷川義夫	256	前田吉子

257	蒔田美恵子	271	宮川　進	285	山口　香	299	横山正明
258	増岡武司	272	村上フサ子	286	山口正夫	300	吉井ミチ子
259	松浦節也	273	村山初枝	287	山口美津江	301	吉川輝男
260	松岡利器	274	最上忠二	288	山崎和子	302	吉田昭典
261	松沢開作	275	最上みち子	289	山崎弘治	303	吉田忠雄
262	松澤喜代子	276	森田三郎	290	山崎孝二	304	吉田文子
263	松原茂樹	277	森中重樹	291	山崎治子	305	吉野夫美子
264	松本マツエ	278	八木下邦夫	292	山崎洋子	306	渡辺和照
265	水上　清	279	矢口博孝	293	山梨隆司	307	渡辺景子
266	峰　孝久	280	矢口正昭	294	山本　昭	308	渡辺美智子
267	箕輪粂三郎	281	谷塚由紀子	295	山本希八	309	渡部勝代
268	三原紀子	282	柳田明雄	296	山本正得	310	和田尚之
269	宮内和代	283	藪　高道	297	山本泰秀	311	東彩会＊
270	宮川ユミ子	284	山岸貞子	298	横川静江		

＊賛助会員

計311人

NPO法人越谷市郷土研究会　役員（平成17年7月～平成19年6月）

常任顧問	谷岡隆夫			
会長	宮川　進			
副会長	加藤幸一			
常任幹事	西村　功			
幹事	中村幸夫	藤川吉洋	籔　高道	
常任理事	佐藤光夫	菅波昌夫	鈴木種雄	高崎　力
	古澤　孝	増岡武司	水上　清	山口美津江
理事	青山榮吉	磯谷知子	岩瀬静江	柿沼孝行
	小泉平八郎	小林重蔵	小林光男	佐々木義隆
	須賀　弘	永井勇雄	古谷京子	森田三郎
	渡辺和照			
監事	名倉　功	野口祐許		

NPO法人越谷市郷土研究会　実行委員（平成17年7月～平成19年6月）

安西利夫	飯塚英志	伊藤靖二	上野　勉	加藤雅子
木村恵仲	小林清子	篠原陸郎	原田民自	藤田浩行
福井勝衛	山本希八			

NPO法人越谷市郷土研究会　会友

会田　俊	池田　仁	小原勘三郎	木原徹也	堤竹宏吉
林　和江	本間清利			

会報「古志賀谷」掲載基準

会報掲載の混乱・異同をさけるため、基準を設ける。

一　会員・会員外の原稿をうけつける。

原稿は、越谷につながるものとする。

二　原稿の字数は次の各号とする。

(ア)調査・研究の記録は、字数制限はしない。

(イ)紀行・随筆は、二千字程度とする。

三　次の各号に該当する原稿は編集委員会で掲載の可否を審議する。

(ア)特定の政治的主張、または政党勢力拡大を内容とする原稿。

(イ)特定の宗教を流布し、または勧誘する内容を含む原稿。

(ウ)営利を目的とする内容を含む原稿。

(エ)差別の内容を含む原稿。

(オ)戦争賛美を内容とする原稿。

(カ)他人への中傷を内容とする原稿。

(キ)その他、特定の意図を含む原稿、または穏当を欠く原稿。

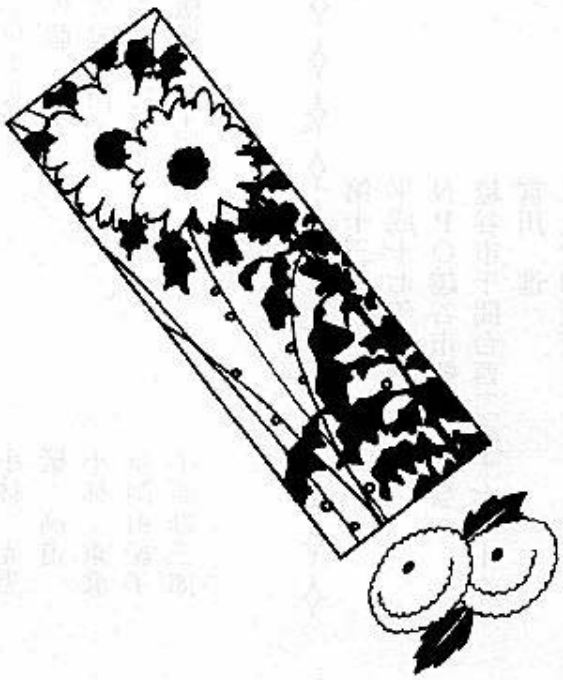
四　第三者の調査・研究・報告・書籍を引用または転用するときは原則として著者名・書名・出版社名・出版年度を明記する。

五　会員名簿は、氏名のみを掲載する。

個人情報保護のため、住所・電話番号は掲載しない。

六　本基準の変更は、総会の議決を経るものとする。

付則　本基準の施行は、平成十四年六月三〇日とする。



あとがき

編集委員会

会報「古志賀谷」十三号をお届けするはこびになりました。

「越谷市郷土研究会創立四十周年きき書き」

越谷市郷土研究会は、平成十七年(二〇〇五)、創立四十周年を迎えました。

発足から参加された前会長・谷岡隆夫氏、常任理事・高崎力氏に、そのころのようすを、楽屋ばなしをまじえて語っていただきました。

「研究・調査」

魅力ある研究・調査の成果について、各氏から寄稿がありました。

「史跡めぐりの記録」

最近、二年間の史跡めぐりについて、おおくの方々から健筆が寄せられました。

記録・写真・パンフなど、当日のようすが判るように編集しました。

「会員アンケート」

毎号、恒例の企画です。入会の動機、趣味、歴史上の人物、座右銘など、皆さまのプロフィールが読みとれる事柄をお聞きしました。

会員でつくる会報をめざして、おおくの皆さまが誌面に登場するよう、編集委員会は願っています。

研究・調査、史跡めぐりの記録、アンケートを含めて、延べ一八二人が誌面に出ております。

つぎの飛躍にむかって、ますます充実した内容にするようつとめてまいります。皆さまのご協力をお願いいたします。

▼編集委員会▲

渡辺　和照　　水上　清
小泉平八郎　　小林　光男
佐藤　光夫　　籔　高道
菅波　昌夫　　小林　重蔵
西村　功　　金岡由紀子
飯塚　英志　　小原勘三郎

会報　第十三号
発行日　平成十七年九月
発行所　NPO越谷市郷土研究会
　　越谷市千間台西二の十七の十六
代表者　宮川　進
印刷所　三光堂印刷所
　　越谷市大沢一の十五の十四